

ルドルフ・シュタイナー 「魂生活の変容 - 経験の道」(第二巻)

ベルリン、1910年1月20日 - 5月12日

- 第一講 精神科学と言語
- 第二講 笑うことと泣くこと
- 第三講 神秘主義とは何か
- 第四講 祈りの本性
- 第五講 病気と治療
- 第六講 ポジティブな人とネガティブな人
- 第七講 不調と心的な障害
- 第八講 人間の良心
- 第九講 芸術の使命

佐々木義之 訳
神秘学遊戯団発行

第1講「精神科学と言語」

(1910年1月20日)

人間が自分を表現する様々の仕方をここで使用されている意味での精神科学の観点から観察するのは何か興味深いことです。と申しますのも、私たちがこの連続講義の中で行ってきたように、いわば人生に様々の側からアプローチし、その様々の側面を観察することでそれについてのある包括的な見方が獲得され得るからです。今日は言語の中に明瞭に示されるところのあの人間精神の普遍的な表現を取り上げましょう。そして次回は、「笑うことと泣くこと」という題名の下に、言語に関連しているけれども、とはいえずそれとは基本的に異なる人間表現のいわばバリエーションを見ることにしましょう。

私たちが人間の言語についてお話しするとき、私たちはいかに人間のすべての意義、尊厳、そもそもその人間全体が、私たちが言語と呼ぶところのものと関連しているかを十分に感じます。私たちの最奥の存在、私たちのすべての思考、感情そして意志の衝動が私たちの仲間の人間へと流れ出ていくとき、それらは言語を通して私たちが彼らに結びつけるのです。このようにして、私たちは私たちの存在が無限に拡張する可能性、言語を通して私たちの存在を私たちの環境の中へと延ばす能力を感じます。一方、意義深い人物たちの内的な生活の中に入ることができる人であれば誰でも、いかに言語が暴君に、つまり私たちの内的な生活を圧倒する力になり得るかを感じることができるでしょう。私たちは私たちの感情と思考、すなわち私たちの魂を通過する特別で親密な性格をもったそれらのものを言葉あるいは言語をもってしてはいかに貧弱に、不十分にしか表現することができないかを感じることができます。そして私たちは、私たちがその中に置かれているところの言語でさえいかに思考に関して特定の様式を私たちに押しつけるかを感じることできます。誰もが、彼の思考に関する限り、いかに言語に依存しているかを意識している必要があります。通常、私たちの概念は言葉に付着しています。そして不完全な発達段階にある人間は言葉あるいは言葉が彼に吹き込むところのものと概念とを混同しがちです。ある人々が、彼らの周りで普通に使われている言葉の中に含まれているものを越えたところに達する概念の骨組みを自分で構築することができない理由はここにあります。そして私たちはいかに共通の言語を話す人々全体の性格が一定の方法でその言語に依存しているかに

気付きます。国民的な性格、言語の文脈上の性格をより詳しく観察する人は、人間が彼の魂の内容を音に変化させることができるその仕方が今度は逆に彼の性格の強さや弱さ、彼の気質が表現されるその仕方、そして全体的な存在に関する彼の概念にさえ影響を及ぼす、ということに気付くに違いありません。言語の構成は国民の性格について多くを告げることができます。そしてひとつの言語がひとつの国民に共通であるがゆえに、個々の人間はいわばその国民の間に卓越する共通の要素、平均的な性質に依存しています。このように人間は一種の圧政、共同体の支配に屈しやすくなっているのです。しかし、もし人が、言語は一方では私たちの個人的な精神生活を、他方では共同体の精神生活を包含している、ということに気付くならば、彼は「言語の秘密」と呼ばれるものを何か特別な重要性を有しているものとして理解するようになるでしょう。もし、人間がいかに言語において自らを表現するものであるかを観察するならば、その魂的生活についてかなり多くのことを学ぶことができるのです。

言語の秘密、その起源と各時代における発展はいつでもある特定の科学的な専門分野における研究課題であり続けました。しかし私たちの世紀において、これらの専門分野が言語の秘密を暴くことに特に成功したとは言えません。今日私たちが言語とその発達、そしてその人間との関係をこれまで人間とその発達に適用してきた精神科学的な観点からいわば警句的かつ外観的に照らし出そうとしているのはこの理由からです。

私たちが対象、出来事、過程を記述するために言葉を使うとき、まず第一に非常に不思議に見えるのは次の関連です。つまり、言葉や文章を構成するある特定の音の結びつきと私たちの内にあり、言葉として表現される対象が意味するところのものとの間のつながりとは何なのでしょう？この関連で外的な科学は幅広い観察結果をあらゆる方法で結びつけようとしてきましたが、そのような方法は不満足な性格のものであるとも感じられてきました。問題は次のように非常に単純なのですが、それでもそれに答えるのはきわめて困難です。人間が外的な世界のある対象や出来事に直面したとき、何故彼はその対象や出来事の残響として彼自身の内部からあれこれの特定の音を発したのでしょうか？

ある一定の観点から見ることによって、ことは全く単純であると考えられました。例えば、言語は元々言語器官の内的な能力によって形成された、つまりこの能力が外的な音として聞こえるようなもの（例えばある動物の出す音、あるいは何か別の何かにぶつかる音）を模倣したのだと考えられたのです。もしくは犬が「わんわん」と鳴くのを聞いた子供がその犬を「わんわん」と呼ぶようにです。そのような言葉の形成は擬音、音の模倣と呼ばれます。これは一定の方向性をもった考え方によって音と言葉を形成する本来の基礎であるとされました。当然のことながら、人間はどうやって音を発さない存在に名前を付けるに至ったのかという問題は答えられないまま残ります。そのような理論の不十分な性格に気付いていた偉大な言語学者マックス・ミュラーはそれを「わんわん」理論と呼んでからかいました。彼は別の理論を打ち立てたのですが、彼の反対者達は今度はそれを「神秘的」（この言葉はそのような意味で使われるべきではないのですが）と呼びました。と申しますのも、マックス・ミュラーは、それぞれの対象がいわばそれ自身の内に何か音のようなものを含んでいる、つまり落とされるガラスばかりではなく、鳴らされる鐘ばかりではなく、ある意味であらゆるものが音を持っている、という観点を掲げているからです。そして人間の魂とこの表現要素すなわち対象の本質的な性質のようなものとの間に関係を確立する人間の能力がその魂の中に対象の内的な音存在を表現する能力を呼び起し、そして鐘の本質的要素が「キンコンカン」という音の中で経験される、というようにです。そして、マックス・ミュラーの反対者達は彼のからかいのお返しに彼の理論を「キンコンカン」理論と呼びました。より詳細に検討すれば、人間がものの本性について彼の魂の中で残響のように経験するところのものをこのように外的な方法で性格づけようと試みる時にはいつでも何か不満足なものが残る、ということが分かります。人間の内的な存在の中へとより深く貫き至ることが要求されるのです。

精神科学の観点から見ると基本的に人間は非常に複雑な存在です。彼は彼の肉体を有していますが、それは鉱物界を支配する法則と同じ法則によって支配され、鉱物界と同様に構成されています。同様に、人間は彼の存在における第二の、より高次の構成体であるエーテル体もしくは生命体を有しています。次いで、楽と苦、喜びと悲しみ、本能、願望、熱情の担い手であるアストラル体があります。これは精神科学にとっては人間が目で見、手で触ることができる体よりさらに現実的ではないにしても、それとちょうど同じくらい現実的な人間の構成体のひとつです。そして人間の第四の構成体を私たちは自我の担い手と呼びます。私たちはさらに現段階における人間の発達には自我の働きかけによって他の三つの構成体を変容させることにあるのを見てきました。私たちはまた、未来において自我は、自然あるいは自然の中で活動している精神的な力がこれら三つの人間構成体から作り出したものは何も残っていないというような仕方です。これら三つの構成体を変化させているだろうということも指摘しました。

と申しますのも、苦と楽、喜びと悲しみ、イマジネーション、感情、そして知覚の波打つ力の担い手であるアストラル体は元来私たちがそれに参加することなく、つまり私たちの自我のいかなる貢献もなしに創造されたからです。しかし今や、自我は活動的となり、アストラル体のすべての性質と活動を純化し、清め、従属させるというような仕方です。もし自我がアストラル体にわずかしき働きかけていなければ、人間は彼の本能や願望に支配されますが、もしそれが本能や願望を徳へと浄化するならば、そして乱れた思考を論理の糸で秩序づけるならば、その時には、アストラル体は自我が参加することなく作られたものではなく自我の産物へと変化しているでしょう。もし自我がこの仕事を意識的に成し遂げるならば、そしてそれは今日では人間進化の中でスタートが切られたところであるに過ぎないのですが、私たちはこの自我によって意識的に変化させられたアストラル体の部分を「霊我」、あるいは東洋の哲学の用語を使えば、「マナス」と呼びます。自我がアストラル体ばかりではなく、異なる方法、より強力な方法でエーテル体にまで働きかけるとき、私たちは自我によって変化させられたエーテル体の部分を「生命霊」、あるいは東洋の哲学の用語で、「ブッディ」と呼びます。そして最後に、自我が非常に強力になり（これははるかな未来において生じるだけなのですが）、肉体を変化させ、その法則を規制し、それに浸透することによって肉体の中に生きるあらゆるものを支配するとき、私たちはこの肉体の部分を「霊人」、あるいはまたこの働きは呼吸過程をコントロールすることから始まるゆえに、東洋の哲学の用語で「アートマン」と呼びます（ドイツ語の *atmen*、「呼吸する」と比較して下さい）。

このように、私たちは人間を最初は四つの構成体、つまり、肉体、エーテル体、アストラル体そして自我から構成されていると見ます。そして過去に由来する私たちの存在の三つの構成体と同様に、私たちは私たちの自我の働きによって創造され、未来に向かって発展する人間の三つの構成体について語る事が

できます。こうして私たちは肉体、エーテル体、アストラル体に霊我、生命霊、霊人を加えることによって七つの構成体から成る人間について語ることができます。しかし、私たちがこれら最後の三つの構成体を何かはるかな存在であると、つまり人類の未来の進化に属するものと考えるとき、人間はある意味で既に現在においてもそのような発展のための準備をしている、ということが付け加えられなければなりません。人間が彼の自我によって意識的に肉体、エーテル体、アストラル体に働きかけるのははるかな未来においてに過ぎませんが、自我は既に無意識の中で、つまり十分な意識のない状態で人間存在のこれら三つの構成体をまだぼんやりとした活動に基づいて変化させつつあります。その結果は既に存在しています。以前の講義において、私たちが人間の内的な構成体として記述したところのものは、ひとえに自我によるこの働きのゆえに生じることができたのです。それによってアストラル体からは感覚魂が感覚体のいわば内的な鏡像として形作られました。感覚体が（感覚体とアストラル体は人間に関する限り同意語です。感覚体なしには私たちは満足というものを有することはないでしょう。）満足を伝える一方、それは願望として魂の中に反映されます（ですからそのとき私たちが魂に帰するのは願望です）。このようにしてふたつのものが、つまり、アストラル体と変化したアストラル体あるいは感覚魂がお互いに属することになります。

満足と願望が

お互いに属しているようにです。同様に、自我は過去において既にエーテル体に働きかけていました。自我が人間の魂の中に悟性魂もしくは心魂を内的に創造したのです。このように記憶の担い手でもある悟性魂は自我によるエーテル体の無意識的な変化と結びつけられています。そして最後に、自我は過去に肉体の変化に向けても働きかけ、人間が今日の形態において存在することができるようにしました。その変化の結果が意識魂であり、それが人間に外的な事物についての知識を獲得することができるようにさせるのです。このように七つの構成体からなる人間は次のように性格づけることができます。自我の無意識的な準備活動を通して三つの魂の構成体、すなわち感覚魂、悟性魂そして意識魂が創造された、と。

さて、肉体、エーテル体そしてアストラル体は複雑な実在ではなかったのか？という疑問が生じるかも知れません。人間の肉体とは何という奇跡的な構築物なのでしょう！そして、もし私たちがそれをもっと詳しく調べるならば、肉体はそれが自我によって意識魂へと変化させられた部分すなわち意識魂の物理的な形態と呼ぶことができる部分と比較してもっとはるかに複雑である、ということが分かるでしょう。同様に、エーテル体は悟性魂もしくは心魂の形態とでも呼ばれるところのものよりはるかに複雑であり、また、アストラル体も感覚魂の形態よりはるかに複雑です。これらの部分は人間が自我を持つ以前から存在していたものと比較して貧弱なのです。精神科学において、人間ははるかな過去にその肉体のための最初の素質を精神的な存在から発達させていたと語られるのはこの理由によります。これにエーテル体が、そしてずっと後になってアストラル体が、そして最後に自我が付加されました。人間の肉体はこのように四つの発達段階を通過してきたのです。つまり、最初は精神世界との直接的な対応がありましたが、その後、エーテル体を織り込まれ、注入されることによって発展し、そのためさらに複雑になりました。次にアストラル体が織り込まれるようになりましたが、それによってもまたさらに複雑になったのです。それから自我が加えられました。そしてこの自我の肉体に対する働きかけがその一部を変化させ、それを人間の意識すなわち外的世界の知識を獲得するための能力の担い手へと変えたのです。ただこの肉体は感覚と脳によって外的世界の知識を私たちに提供する以上の機能を有しています。私たちの意識の基礎を構成するとはいえ全く脳の領域の外側で生じるところの数多くの活動をそれは遂行しなければなりません。同様のことはエーテル体とアストラル体にも当てはまります。

さて、もし私たちが何度も強調してきたように、外的世界で私たちの周囲にあるあらゆるものは精神であるという事実、すまわちあらゆる物質的、エーテル的、アストラル的なものには精神的な基礎があるという事実が全く明白であるとすれば、私たちは次のように言わなければなりません。人間が彼の存在の三つの構成体を発達させるに際し、自我は精神的な存在として内側から外に向けて働く。同様に、私たちの自我が現れてその発達を受け継ぐ以前に、私たちの肉体、エーテル体そしてアストラル体に働きかけていたもの（私たちがそれらを精神的な存在と言うにしても精神的な活動と言うにしてもそれは重要なことではありません）があったに違いない、と。私たちは、私たちのアストラル体、エーテル体そして肉体に対し、今日では自我が外向きに働きかけているのと同様の活動が起こっていた時代を振り返っているのです。つまり、自我がそれらの内部で自身を確立する準備が整う以前には、精神的な創造、精神的な活動が私たちの鞘に働きかけ、それらに形態、動き、形状を与えたのです。ここでもし私たちが感覚魂、悟性魂そし

て意識魂という私たちの存在における三つの構成体の中で自我が変化させたものすべてを除外し、これら人間存在の三つの鞘の構築、それらの内的な動きと活動を眺めるならば、人間の中で自我の活動に先立って生じるところの精神的な活動がそこにあります。

私たちが精神科学において今日あるような人間を個別の魂として、つまりそれぞれの人間を自己充足した個人にするところの自我を注入された魂として語るのはこの理由によります。人間はそのような自己充足した自我存在になる以前には「集合魂」、つまり私たちが今日でも動物界に関して集合魂として言及するところの性質を持った魂の一部を構成していたのです。それぞれの人間におけるそれぞれの魂として人間の中で生じるものは種や同族全体の根底をなすものとして動物界の中で生じます。ひとつの動物の種全体が共通の集合魂を有しているのです。個々の人間の魂が動物においては種の魂に相当します。このように、人間が個々の魂になる以前には、今日では私たちが精神科学を通してのみその知識を持つことができるころの別の魂、つまり、私たちの個別自我の前駆となる魂が彼の存在の三つの構成体の中で働いていました。この私たちの自我の前駆体すなわち集合魂もまたそれ自身の中から肉体、エーテル体、アストラル体を変化させ、それ自身にしたがってそれらを秩序づけたのです。その後、それは肉体、エーテル体、アストラル体を自我に明け渡し、自我がそれらを変化させ続けるようにしました。そして人間が自我を付与される以前の最後の活動、自我の誕生以前に横たわるものの最後の影響が人間の言葉と私たちが呼ぶところのものの中に今日でも存在しているのです。ですから、私たちが私たちの意識魂、私たちの悟性魂もしくは心魂、そして私たちの感覚魂の活動に先立つものを考察するとき、私たちはまだ自我を注入されていない魂に出会います。そしてその結果は今日でも言語表現の中に存在しています。

人間の四つの構成体の外的な表現とは何でしょうか？それらは肉体においてどのように純粹に外的に表現されるのでしょうか？植物の体は人間の体とは異なって見えます。何故でしょうか？それは植物の中には物質体とエーテル体のみが存在しているのに対して、人間の肉体の中にはアストラル体と自我もまた存在しているからです。それはこの内的な活動が肉体をそれに応じて形成し再構成するからです。肉体はエーテル体もしくは生命体に浸透されるときどのような影響を受けるのでしょうか？

人間あるいは動物におけるエーテル体もしくは生命体の外的、物理的な表現は腺組織です。つまり、エーテル体は腺組織の建築家なのです。アストラル体は神経組織を形成しました。神経組織について正當に語ることはアストラル体を有している存在に関してだけであるというのはこの理由によります。では、人間の内における彼の自我の表現とは何なのでしょう？それは循環組織であり、特に内的な生命の熱の特別な影響の下にある血とでも呼べるところのものです。自我が肉体を変化させるときの人間に対する働きはすべて血を通して伝達されます。これが、血が特別な性質を有している理由です。自我が感覚魂、悟性魂そして意識魂を変化させるとき、それが達成するところのすべての働きはただそれが血を通して肉体に影響を及ぼす能力を有しているがゆえに肉体にまで貫き至ることができるのです。私たちの血はアストラル体と自我、そしてそれらすべての活動のための仲介者なのです。

私たちが人生を見るとすれば、それが単に表面的なレベルではあっても、人間が彼の意識魂、悟性魂そして感覚魂を変化させるのと同様に、彼の肉体をも変容させるということに疑問の余地はありません。容貌は中で生きて働いているものを表現している、ということを誰が否定するのでしょうか。そして内的な思考が、もしそれが魂を完璧に捉えるならば、ひとつの人生の経過の中でさえ脳を変化させる、ということも誰が否定するのでしょうか。私たちの脳は私たちの思考の要求に適合する道具なのです。しかし、もし人間が彼の自我を通して彼の外的な存在を変化させ、いわば芸術的に形成することができる度合いを考えるとすれば、それは非常にわずかです。私たちが私たちの内的な熱と呼ぶところのものをもって血に動きをもたらし、それによって私たちが為すことができるのは非常にわずかです。私たちの自我に先立つあの精神的な存在たちはもっと多くのことを成し遂げることができましたが、それは彼らがより効果的な方法を用いることができたからです。このように人間の形姿は彼らの影響の下に形作られましたが、それはそれらの力によって人間から造り出されたものの総体的な表現として形成されたのです。これらの存在たちは空気の実質を用いました。私たちが私たちの血を脈打たせる（これによって血を私たち自身の中で活動的にする）ために内的な熱を用いるのと同様に、私たちの自我に先立って私たちに働きかけていた存在たちは彼らの目的のために空気を利用したのです。彼らの空気を通しての私たちに對する働きかけが私たちに私たちの人間としての形姿を与えるところのものを創造したのです。

私たちがはるかな過去に空気を通して人間に働きかけていた精神的な力について語るのは奇妙なことに

見えるかも知れません。しかし私が、私たちの内的な存在の魂や精神の生活について、それを単にイメージの産物としてだけ考え、それが外的世界全体から取られてきたものであるということに気付かないのは間違っている、と申し上げたのはこれが最初ではありません。概念や考えが外の世界の中に存在するところの考えなしに私たちの中に生じることができると考える人は誰でも、ちょうど何も入っていないコップから水を取り出すことができると言っているようなものなのです。私たちの概念は、もしそれが外部の事物の中に生きているもの、それらの法則としてそれらの事物の中に存在しているもの以外のものであるならば、あぶく以上のものではないでしょう。私たちは私たちの魂の中で発達させるものを私たちの環境から取ってくるのです。私たちが、私たちを取り巻くあらゆる物質的なものには精神的な存在が織り込まれている、と語るのはこの理由によります。

奇妙に聞こえるかも知れませんが、空気として私たちを取り囲んでいるところのものは単に化学によって示されるような物質なのではなく、精神的な存在、精神的な力がその中で活動しているのです。そして、私たちが私たちの血の中にある自我から流出する熱（これが本質的な要素なのですが）によって私たちの肉体をわずかに変化させることができるのと同様に、自我に先立つ存在たちは空気をを用いて、力強い方法で私たちの物理的な存在の外的な形を造り出したのです。私たちが人間であるのは私たちの喉頭とそれに関連するもののゆえです。すばらしい芸術的な器官として外部から私たちの中に彫り込まれ、その他の発声、会話器官に結びつけられた喉頭は空気の中の精神的な要素から創造されたのです。ゲートは目に関して非常に適切に「目は光によって光のために作られた。」と言いました。もし今、ショーペンハウアーの意味で、光を感じる目がなければ私たちにとって光の印象はないであろうと強調するならば、それは単に真実の半分でしかありません。別の半分とは、もし光がはるかな過去にまだ定かでない器官から私たちの目をいわば彫り出さなかったとすれば、私たちは目をもっていなかったであろう、というものです。このように、光を単に物理的な光、今日記述されているような抽象的な実体と見なすのではなく、光の中にそれ自身のために目を創造することができるあの隠された存在を探さなければならないのです。

同様に私たちは、別の関連で、空気は複雑な喉頭の器官とそれに関連するあらゆるものをある時期に人間の中に創造することができた存在たちに満ちている、とすることができます。そして、人間形姿のそれ以外の部分は細部に至るまで、現在の発達段階にある人間とはいわば話す器官がさらに発達したものである、というような仕方では形成され、彫り出されているのです。まず第一に、話すための器官は人間の形姿にとって何か決定的なものになっています。人間が動物を超越しているのは話すことによってである、と言われるのはこのためなのです。と申しますのも、私たちが空気の霊と呼ぶところの精神的な存在は動物をも造り出したのですが、それは人間が備えているような話すための才能を発達させることができるようなレベルにおいてはではありません。人間は、彼の現在の思考、彼の感情そして彼の意志、つまり、彼の自我に関連するあらゆるものを発達させる以前に、彼の言語器官を既に内的に発達させていたことが分かります。今や、何故これらの精神的な力が人間の肉体に対して、それを最終的に彼の言語器官の付属物にするような仕方でのみ働きかけることができたのかが分かります。それは彼らがアストラル体、エーテル体そして肉体を空気の影響と配置を通して発達させたからです。自我は、人間が自分の内に空気の精神的な存在と私たちが呼ぶところのものに対応する器官を、つまり光の精神的な存在が目に対応しているのと同様の器官を有することができるようになった後に、それ自身の中で意識、感情、情緒として発達させたところのものをその中に形成することができたのです。このように、そこには無意識における三重の活動、つまり自我に先立って存在していたところの肉体、エーテル体そしてアストラル体への働きかけがあるのです。もし私たちがそれは集合魂であったということ、つまりその集合魂は動物の中では不完全な仕方働いていたということを知るならば、私たちはこのことに気付くことができます。

もし私たちが自我に先立って生じた精神的な力をアストラル体の中で働いていたものと見なすならば、次のことが考慮されなければなりません。私たちは自我に関係するあらゆるものを除去し、暗い根底から集合魂によって為された仕事を観察しなければならなりません。願望と満足がアストラル体の中で不完全なレベルにおいて向き合います。願望は、その先駆けを既に人間のアストラル体の中に有していたがゆえに、魂の性質、内的な能力になり得たのです。

アストラル体の中における願望と満足と同様に、心象、象徴と外的な刺激とがエーテル体の中で向き合います。自我に先立つエーテル体の活動をエーテル体の中における自我の活動と区別する、ということが最も重要なのです。自我が悟性魂もしくは心魂として活動するとき、人間の現在の発達段階においては、そ

これは外的世界の真実にできるだけ近い像であるところの真実を求めます。外的な事物に正確には対応しないものを「真実」と呼ぶことはできません。私たちの自我の夜明け前に横たわるところの精神的な活動はこのような仕方では働きません。それらはむしろイメージの中で象徴的に働き、夢の働きに似ています。夢は例えば次のような仕方働きます。誰かが夢の中で銃声を聞き、そして起きたとき、ベッドの横の椅子が倒れているのを見るというようにです。外的な出来事（椅子が倒れること）は、夢の中でイメージに、つまり銃声に変化させられます。このように、自我に先立つ精神的な存在たちは象徴的に働きましたが、私たちが秘儀参入によってより高次の精神的な活動を達成するときにも、私たちは再び同じ仕方働くようになります。ここにおいて私たちは全く抽象的な外的世界から離れ、象徴的なものの見方、イメージネーション的な概念に向けて（ただし、今回は十全なる意識をもって）働くように努めるのです。

そして人間の肉体の中で働く精神的な存在たちはそれを外的事物の対応物とでも呼べるものに変化させました。外的な事実、そして模倣です。模倣とは、私たちが例えば子供の中に見出すような、つまりその他の魂の構成体がまだほとんど発達していない時期に見出すような何かです。模倣とは人間の無意識的な本性に属するような何かです。これが教育は模倣から出発しなければならないと言われる理由です。何故なら、人間の中で自我が秩序を創造し始める以前は模倣への衝動が自然の衝動として存在しているからです。

肉体の中にある外的な活動に対置される模倣への衝動、エーテル体の中にある外的な刺激に対置される象徴、そして、アストラル体の中にある願望と満足の対応、これらすべては空気という道具の助けを借りて創造されたと考えられなければなりません。そして、それらは私たちの喉頭及び話すための装置全体の中に、いわば芸術的な印象が彫り出されるようにして創造されたと考えられなければなりません。そして、これらの自我に先立つ存在たちは空気が人間の中でこれら三重の方向性をもって表現されるに至るというような仕方彼を形成し、秩序づけるように働きかけた、とすることができます。

と申しますのも、言語能力をその言葉の真の意味において見るとき、それは私たちが口に出すところの音から成り立っているのか？と問われねばならないからです。いいえ、それは音からではありません。私たちの自我は空気によって創造されたものに動きを与えます。目は光を取り入れるためにそれ自体で存在していますが、私たちが外的な光を取り入れるために目を動かすのと同様に、私たちの中の自我が空気の中の精神的な存在たちによって創造されたあの器官に動きを与えるのです。私たちはその器官を自我によって動きへともたします。つまり、私たちは空気の霊に対応する器官を活性化し、そしてその器官を作った空気の霊が私たちの空気に対する活動の反響としてその音を私たちに響き返すのを待たねばならないのです。正にパイプのそれぞれの部分が音を出すのではないように、私たちが音を出すではありません。私たちの自我は空気の霊から創造された器官を使用することによって活動を展開します。その時、私たちはその霊が再び空気に動きをもたすのを、つまり、言葉がそれらの器官を最初に作り出した活動によって音になるというような仕方動きをもたすのを待たなければなりません。

こうして私たちは人間の言語が先に述べた三重の対応に支えられていることを理解します。この対応はどのように働いているのでしょうか？

肉体における模倣は外的な活動すなわち私たちにある印象を与えるところの外的な対象を模倣しますが、それは画家が絵の具やキャンパス、光と影など景色を構成する成分とは全く異なる成分から成るものを用いて景色を模倣するのと同様に、それらを音として構成すべき言語器官に支えられています。光と影を用いて模倣する画家に似て、私たちは空気の要素から造られた私たちの器官をもって環境を模倣するのです。これが、私たちが音として造り出すところのものがある対象の本質を真に模倣したものである理由です。そして、私たちの母音や子音は外部から私たちに印象を及ぼすそれらの事物の像や模倣以外のものではありません。

次はエーテル体における像、私たちが象徴と呼ぶところのものです。私たちの言語の最初の要素は模倣によって創造されました。しかしそれはその後、自らを外的な印象からいわば引き剥がすことによってさらに発展しました。エーテル体はもはや外的な経験には対応しないそれらのものを（夢の中でのように）消化します。これが音の中における発達の要素です。最初、エーテル体は純粋な模倣物を消化します。そしてその模倣物はエーテル体の中で変化し、そのために何か独立したものになります。それは内的な過程を経てきているがゆえに外的な印象には単にイメージとして象徴的に対応するだけのものになります。私たちはもはや単なる模倣者ではありません。

そして第三に、願望、情緒、あらゆる内的に生きるものがアストラル体において表現されます。これは音の変化を継続するという形で働きます。内的な経験は内側から音の中に流れ込みます。つまり、苦や楽、喜びや悲しみ、願望、望み、これらすべては音の中に流れ込み、その中に主観的な要素を持ち込みます。純粋な模倣として出発したものは個々の音や言葉のイメージの中で言語的な象徴へと変化し、そして今、人間の内的な経験を吹き込まれることによってさらに変化するのは魂の中に音を引き起こすのはいつでも外的な対応物でなければなりません。魂がその内的な経験、楽と苦、喜びと悲しみそしてその他のあらゆるものを音において表現するとき、それは対応する外的な形態を探さなければならないのです。最初の段階では、外的な印象が模倣されます。次の段階は内的な音のイメージあるいは象徴の創造です。しかし、喜びや嘆きのような内的な経験はその性質上、外的な対応物を有していません。この外的な存在と内的な経験の対応は、子供が話すことを学ぶときに観察できます。子供がいかにある感情をひとつの音に変化させるかを見ることができず、子供が当初「マ」とか「パ」と呼ぶとき、これはある感情の音への内的な変化に過ぎません。それは何か内的なものの表現に過ぎないのです。しかし、子供が自分をそのように表現し、例えば母親がやって来るとすれば、子供は「マ」という音に変化したその内的な喜びの感情がいかに外的な出来事に対応しているかに気付きます。もちろん子供はどうやってそれが、つまりこの場合には母親がやって来るといふ対応が生じるかについて詮索することはありません。内的な楽と苦の経験が外的な印象と連合し、そのようにして内から流れ出るものが外的な印象とひとつになるのです。これが言語活動の第三の過程です。ですから、言語は外にあるものの内的な模倣と同時に私たちの内的な経験に結びついた外的な存在に起源を有する、と言って間違いないのです。それは無数の場合に起こり、内的な表現である「マ」なり「パ」が「ママ」とか「パパ」という語に形成されて完成し、父親なり母親が応えるとき充足させられる過程です。人間が内的な表現の結果として何かが起こるということに気付くたびに、その内的な出来事の表現は彼にとって何か外的なものと同じく結びついたものになります。

これらすべては自我が参加することなく起こります。自我がこの活動を引き継ぐのはもっと後の段階になってからにすぎません。このように、自我以前に存在していた力が人間の言語能力の根底に横たわる配置の中で働いていました。人間の言語はその基礎が既に創造されていたところに自我が取って代わったために、その後は自我にしたがって自身を秩序づけるようになりました。こうして感覚体に結びついた表現は感覚魂に浸透され、エーテル体に結びついたイメージや象徴は悟性魂に浸透されます。人間は悟性魂の経験をもって音を満たし、そして同様に、当初は模倣に過ぎない意識魂の経験をもってそれを満たします。この過程によって、魂の内的な経験を表現する私たちの言語のためのあの領域が徐々に存在するようになったのです。

これが、私たちの中には、言語に関して、何か自我以前に存在していたものが、そしてその後自我によって発達させられたものがある、ということが全くはっきりと理解されなければならない理由です。しかしその時、言語が直接自我を、つまり私たちの中の精神的な側面すなわち私たちの個性に密接に結びついたあらゆるものを表現している、と主張することもできません。そうではなく、言語の中に自我の直接的な表現を見ることは決してできないということが理解されなければならないのです。言語の霊はエーテル体の中で象徴的に働き、肉体の中で模倣的に働きます。そしてこのことはその感覚魂の中での創造的な活動とリンクしています。そして、その活動によって音が内的な生活の表現になるというような仕方で、そこから内的な経験を押し出すのです。要するに、言語は今日見られるような意識的な自我にしたがって発達したわけではありません。そうではなく、そもそも言語の発達を何かと比較するとすれば、それはただ芸術的な創造に比せられるだけです。私たちは、正に、芸術家の模倣が現実に対応していることを要求することができないように、言語がそれによって表現されることが意図されているものをコピーすることを要求することはできません。言語は絵画に似た方法で、つまり、芸術家が彼なりに外的な現実を模倣するのに似た方法で外なる世界を模倣するだけなのです。人間が今日そうであるような仕方で自意識を持った存在になる以前には、一人の芸術家が活動的な言語の霊として彼の内で働いていました。そして私たちの自我は以前に芸術家が働いていた場所に納められています。このことはそれ自体、どちらかというイメージの形で述べられていますが、この分野において真実を表現しています。私たちは無意識の活動を観察し、ここには芸術作品としての人間を創造した何かがあると感じます。この関連で、各芸術作品はその芸術的手法によって許容されたものとして検証することができるだけだ、ということをお忘れしないようにしましょう。

な学者ぶった作品は初めから排除されていたことでしょう。ここでの言語批判は全く間違っただけで、つまり、私たちが人間の言語をよく見ると、それは客観的な現実を表現してはいないという仮定に基づいています。しかしそれは第一に、言語の機能なのでしょうか？ 絵画に関して、それが光と影を使うことによってキャンパスの上の色の中に外的な現実を表現する可能性がないのと全く同様に、言語が現実を表現する可能性はありません。人間の活動の根底に横たわる言語の霊は芸術的な感性によって把握されなければなりません。

以上の事柄についてはただ簡単な概観が示されたに過ぎません。しかし、もし言語を作った芸術家が人間の中で活動していたということを知るならば、人間の個々の言語の中においてさえ（様々な言語が異なっていればそれだけ様々な）芸術的な要素があらゆる種類の異なった仕方働いていた、ということを理解することができます。また、言語の霊が（空気の中で働いていたこの存在を言語の霊と呼ぶことにしましょう）人間の中の比較的低いレベルで自らを表現するときには、それがいかにあらゆるものを個々の部分から組み立てようとして原子論的な方法で働くかを理解することができます。個々の音がひとつの文章全体を構成するために結びつく、ということはこのようにして生じるのです。

例えば中国語で「シー」と「ピアン」という音を取り上げるとすれば、それらは言語形成のふたつの原子です。「シー」という音節は歌、詩を、「ピアン」は本を意味します。これらの音を組み合わせると、「シーピアン」、つまり「詩本」の組み合わせをつくるのと同じことになります。全体として見たときには詩の本となる何かのふたつの品詞から結果として生じるのです。これは中国語がその概念と思想を形成する仕方のひとつの例に過ぎません。

もし私たちが今日考察したようなことがらをよく考えてみるならば、セム語のようにすばらしく形成された言語はいかにその本質において考察されなければならないか、ということもまた今や理解することができます。セム族の言語にはその基礎として本当に子音だけから構成された音があるのです。そして人間はこれらの子音と子音の間に母音を挿入します。ですから一例として q、t、l という子音を取り上げ、間に a ともうひとつの a を挿入するとすれば、そのとき、純粋に子音から形成された単語は単に外的な音の模倣であるに過ぎませんが、母音を加えることによって「q a t a l」、殺すという語が造られるのです。

このように、音の複合としての「殺す」が当初は単に外的な過程を模倣する言語器官によって生じる、ということには特筆すべき発展過程が見られます。そして魂がその過程を継続し、母音によって内的な経験が付け加えられます。つまり、音の複合体はさらに発展し、それによって「殺す」が主題へと差し戻されます。これが基本的にはセム語の構成であり、そこでは言語の形成における様々な要素の組み合わせが言語の枠組みの内側で表現されているのです。象徴化は（つまり言語の霊としてエーテル体の中で働いているのが見出されるところのものは）そしてそれはセム語においては主要な作動力となっているのですが、個々の模倣的な音を一步先に進め、母音の挿入によってそれらを象徴へと変化させるところのセム語の特別な側面を示しています。

これが、セム語においては基本的にはすべての語が外的世界の環境に象徴として関係するような方法で形成される理由です。対照的に、インド - ゲルマン系言語において現れるあらゆるものは私たちがアストラル体の内的な表現、内的な存在と呼んだところのものによってより多くの刺激を受けます。と申しますのも、アストラル体とは何か既に意識に結びついたものだからです。人は外なる世界に向かうとき、自分をそれと対比させます。もし、人がエーテル体の観点から外なる世界に向かうならば、人はそれと溶け合い、それとひとつになります。事物が意識の中で反射されるときにだけ、自身と事物との間に差異が存在するのです。その中にあらゆる内的な経験を有するアストラル体のこの働きは、独立した存在性の反映である「である」という動詞を有している点でセム語と対照的なインド - ゲルマン系言語において見ることができます。このことは、私たちが私たちの意識をもって私たち自身を外なる印象から分離することができるがゆえに可能なことです。ですから、もし私たちがセム語で例えば「神は善である。」と言いたい場合、これは直接的には可能ではありません。と申しますのも、存在することの表現としての「である」という語を作る方法がないからです。と申しますのも、このことはアストラル体と外なる世界との対比に起源を有するものだからです。エーテル体は単に語るだけです。これが、セム語においては「神、善きもの」と言わざるを得ないであろう理由です。主体と客体の対比は特徴的な要素ではありません。外なる世界に對峙している言語としては、そしてそれは本質的な要素として外なる世界の知覚を含んでいるのですが、特にインド - ゲルマン系言語があります。それらの言語は、それらが内面性を支えるというような、つまり、

強い個性、強い自我を発達させるための基礎を与えるあらゆるものを支えるというような仕方、今度は逆に人間に影響を与えるのです。このことは言語の中において既に明らかです。

私がお話ししましたことすべてについて、何人かの人は、もしこの分野であらゆることを詳細に記述しようとするならば2週間はかかるであろうというだけの理由で、単に不十分な示唆に過ぎないと考えられるかも知れません。そうであるにしても、この連続講義に規則的に参加し、この本質へと貫き至った人たちはそのような示唆が不正なものではないということを理解するでしょう。これらの示唆は、言語が芸術的な感覚（それは発達させられなければならないのですが）以外の方法によっては理解され得ないということを経験するところの言語についての精神科学的な観点がいかにか引き起こされるかを示すために意図されたものに過ぎません。すべての学問は、もしそれが私たちの中で自我が活動するようになる以前に人間の中で言語を創造した力によって実行されたところの創造的な活動に参加しようとしなければ、失敗に終わるに違いないというのはこの理由によります。創造的な能力だけが言語の秘密を把握できるのですが、それは創造的な能力だけが自分なりに再創造することができるからです。どんなに博識な抽象も芸術作品の包括的理解を生じさせることはできません。芸術家が絵の具や音などの思想以外の方法で表現するものを、思想として実りある方法で再創造することができる思想のみが芸術作品に光を当てることができます。創造的な感情のみが芸術家を理解でき、そして言語に対する創造的な感情のみが言語の起源における創造的な精神を理解できるのです。これが言語に関して果たすことが期待される精神科学の役割のひとつです。

別の役割とは何か実際のレベルで重要性を持つようなものです。もし私たちが、言語とはいかに内的、前人間的な芸術家に発するものであるかということを経験するならば、私たちはまた、私たちが言語の中で何か価値あることを表現しようとする場面で、この創造的な感情を活動的にするために私たち自身を上昇させることもできるのです。しかし、私たちの時代にはそれに対する感情がほとんど存在していません。言語に対する生きた感情を涵養することにおいて、大した発展が為されていないのです。今日では、人は誰でも口を開けさえすればあらゆることを表現できると感じているのです。けれども、全くはっきりと理解されていなければならないのは、私たちが何を表現しようとしているのかということと、それをいかにして表現しようとしているのかということとの間の直接的な関係を私たちの魂の中で再び創造しなければならないということです。私たちはあらゆる領域において再び語学の芸術家を目覚めさせなければならないのです。今日の間は、もし彼らが言おうとすることがどんな形でも出て来さえすれば、それがどんな形を取っていても満足します。何かを表現しようとするときには言語に対する芸術的な感情が必要である、ということに（そしてこれは精神科学の分野においては絶対に必要なことなのですが）何人の人が気がついていのでしょうか？例えば、発表された真に精神科学的な文献を検証してみるならば、これらの文献を書いた精神科学者はそれぞれの文章を創造的に形成するため、動詞の位置を気ままに決定したりしないように真剣にそれらに取り組んだ、ということが分かるでしょう。各文章は、それぞれが単なる思考としてではなく直接的な形態として魂の中で内的に経験されなければならないことから、誕生として理解されることでしょう。そして各文章は単に順番に並べられているのではなく、三番目の文章は一番目のものと本質的に同時に作成されなければなりません。何故なら、それらはその効果において相互に関連しているからです。精神科学においては、言語に対する創造的で活動的な感覚なしに働くことは不可能です。他のものはすべて不十分です。自分を奴隷のように言葉に縛り付けられている状態から自由にすることが重要なのです。しかし、もし私たちがある一定の考えを表現するための単語としてどの単語でも適していると考えれば、それは不可能です。それは私たちの語学上の創造性において既に間違っているのです。超感覚的な事実についての表現を感覚世界の観点からのみ造り出された言葉から得ることはできません。もし、「エーテル体やアストラル体を言葉を使って実際に具体的な方法で表現するにはどうすればよいか？」という問いが寄せられるとすれば、このことが少しも理解されていないということです。次のように言う人だけがこのことについて何らかのことを理解しているのです。もし私がまずある特定の面を最初に探求し、つまり、そのとき私が芸術的に形成され反映されたイメージを扱っているというのは全く明白なことなのだが、それからさらにもう三つの面を探求するならば、私はエーテル体とは何かを理解するであろう、と。その時、その問題は四つの異なる側から示されました。その後でそれを言葉で、つまり、いわばその話題の周りを歩き回るような方法で表現するとき、私たちはその問題の芸術的なイメージを提示しているのです。もしこのことが気付かれないならば、抽象化と、そして以前から知られているものの動脈硬化的な再

生産以外のものは何も達成されないでしょう。これが、精神科学における発達はいつでも「内的な感覚の発達と言語の内的、創造的な力の発達」とでも呼べるものに結びつけられているであろう、と言われる理由です。この意味で、精神科学は言語の形式に実りある影響を及ぼし、言語の創造性について何も知らない今日のひどい語学的形式を変化させることでしょう。そして、ほとんど話すことも書くこともできない人たちが文筆活動に乗り出すということも少なくなるでしょう。今日では例えば散文を書くということは韻を踏んで書くよりも何かはるかに高尚なことであるというようなことに関する意識は失われてしまいました。今日書かれる散文ははるかに低いレベルのものにすぎません。人間の最も深い秘密に関わるこれらの分野においてひとつの刺激として働く、というのが精神科学の目的なのです。と申しますのも、精神科学はこれらの領域において、最も偉大な人物達のビジョンを実現する、というような仕方では活動的であるはずだからです。精神科学は超感覚的な世界を思考を通して征服するでしょう。それは、私たちの言語が再び魂の超感覚的な世界における経験を伝える手段になる、というような仕方では思考を音の構成の中に移すことができるようになるでしょう。そして精神科学は内的な人間の重要な領域に関して次のような言葉で表現されたところのものを実現するための実行者となっているでしょう。

測り難く、奥深いものは思考である、

そして、その翼をもった実行者とは言葉である（シラー）。

第2講「笑うことと泣くこと」

(1910年2月3日)

精神科学に関する連続講義の中でも、今日のテーマは確かに重要なものではないように見えるかも知れませんが、けれども存在の高次の領域へと導くような考察においては、人生の細事や身近な毎日の現実を切り捨てることはしばしば間違いなのです。永遠の生命や魂の最高の性質、あるいは世界や人間の進化に関する大いなる疑問が講義で取り上げられるとき、人々は満足し、喜んで私たちが今日検証するような明らかにありきたりの事柄を放っておくことに甘んじます。けれども、精神的な世界へと貫き至るためにここで示された道に従う人であれば誰でも、よく知られたものからあまり知られていないものへと一步一步前進することは非常に健全な道である、ということを確認するでしょう。

さらに言えば、傑出した人たちは決して笑いと涙を単にありきたりのものと見なしてきたわけではない、ということも多くの例を挙げて示すことができます。いずれにしても、東洋の文化にとって途方もなく重要になった偉大なるツアラツウストラに有名な「ツアラツウストラ・スマイル」を付与したところの意識すなわち伝説と人類の偉大な伝統の中で達成される意識（それはしばしば個々の人間の意識よりもはるかに賢いのですが）にとっては、この偉大なる精神が微笑みながら世界にやって来たということがとりわけ意義深いことだったのです。そして、世界の歴史に関する深い理解を持つ伝統によって付け加えられるのは、この微笑みのために世界の生き物たちが狂喜する一方、地上のあらゆる場所の邪悪な精神と敵対者たちはそれから逃げ出した、ということです。

もし、私たちがこれらの伝説や伝統からひとりの偉大な天才の仕事に目を移すとすれば、ゲーテが彼自身の多くの感情や考えを注ぎ込んだファウストという人物像を思い出すかも知れません。あらゆる存在に絶望したファウストが今にも自殺しようとするとき、イースターの鐘の音が響き、「涙がわき出て、再び地球が我を抱く。」という叫びが聞こえます。ここで涙はゲーテによって、ファウストが最も苦しい絶望を経験した後、彼が世界に戻る道を見出すのを可能にするところの魂の状態を象徴するものとして用いられています。

こうして私たちは、ただそれについて考えてみるだけで、笑うことと泣くことが大いなる意義を持つものに関連している、ということを理解します。精神の本性についてあれこれ考えてみるの方が、私たちの周りの身近な世界に現れるところの精神を追求するよりも容易なのですが、私たちが精神を（まず第一に人間の精神を）見出すことができるのは他にもなく私たちが笑うことと泣くことと呼ぶあの魂のしぐさの中においてなのです。私たちがそれらのしぐさのある人の内的な精神生活の表現であると見なすのであれば、それらを理解することはできません。しかしそうするためには、私たちは人間を精神的な存在として受け入れるだけでなく、彼を理解しなければなりません。この冬の連続講義はすべてこの目的のために費やされました。ですから、今はただ、精神科学から見た人間の存在について、ざっと見るだけにしましょう。しかし、これは私たちが笑うことと泣くことについての理解を築く上での基礎となるものです。

私たちは、人間をその全体性において観察することにより、彼がその肉体を鉱物界と共有し、そのエーテル体もしくは生命体を植物と共有し、そして、そのアストラル体を動物界と共有していることを見ました。アストラル体は楽と苦、喜びと悲しみ、恐れと驚き、そして、人間が起きてから寝るまでの間、彼の魂の中に流れ込み、流れ出るあらゆる考えをも担っています。これらは人間の永遠なる三つの鞘であり、その中には人間をして創造における最高のものにしたところの自我が生きています。自我は魂的生活の中で、その三つの構成部分である感覚魂、悟性魂そして意識魂に働きかけます。そして私たちは、いかにそれが人間をしますますその成就へと近づけるために働いているかを見ました。

では、人間の魂の内における自我の活動の基礎とは何なのでしょう？それがどのように作用するか、いくつかの例を見てみましょう。

自我すなわち人間の最も奥深い精神生活の中心が外的な世界において何らかの対象もしくは存在に出会うと仮定して下さい。自我はその対象もしくは存在に対し、無関心のままに留まることはありません。自我はその出会いが自分を喜ばすかあるいは不機嫌にするかによって何らかの反応を示し、何かを内的に体

験します。それは何らかの出来事に狂喜し、また最も深い悲しみへと落ち込むかも知れません。それは恐怖でしり込みし、またその出来事の源泉を愛情を込めて見つめ、抱きしめるかも知れません。そして自我は何であれそれに関係するものを理解し、また理解しないという経験を有することもできます。

私たちは、起きてから寝るまでの間の自我の活動についての観察から、それがいかに自らを外的な世界との調和へともたらそうとしているかを見て取ることができます。もし何らかの存在が私たちを喜ばし、ここには何か私たちを暖めるものがあると私たちに感じさせるならば、私たちはそのものとの絆を織りなし、私たちの中から何かそれがそれに結びつきます。私たちが私たちの環境全体に行っているのはこのようなことなのです。私たちは起きている時間の全体を通じて、私たちの内的な魂的生活に関して、私たちの自我とそれ以外の世界との間に調和を創り出すことに関わっているのです。外的世界の対象や存在を通して私たちのところにやって来る経験は、そしてそれは私たちの魂的生活の中で反射されるのですが、自我の住居である魂の三つの構成体だけではなく、アストラル体、エーテル体そして肉体にも働きかけます。私たちは、自我と何らかの対象もしくは存在との間に自我によって確立されるところの関係がアストラル体の感情をかき立て、エーテル体の流れと動きを正すだけではなく、いかに肉体にも影響を及ぼしているかということについて、既にいくつかの例を挙げました。人は何か恐ろしいものが近づいて来るときには青くなるということに気がついていない人がいるのでしょうか？これは自我によって形成された自我とその脅かす存在との間の絆が肉体の中に作用し、その当人が青くなるように血の流れに影響を与えた、ということの意味しています。

私たちは逆の効果についても、つまり恥ずかしさで顔を赤らめるということについても触れました。私たちが周囲の誰かと自分との関係はしばらく身を隠したいようなものであると感じるとき、血は顔へと上って来るのです。これらふたつの例によって、自我と外的世界との関係により一定の影響が血に対して生じることが分かります。自我がアストラル体、エーテル体そして肉体の中でいかに自分を表現するかについて、他にも多くの例を挙げるができるでしょう。

自我はそれ自身とその環境との間に調和もしくはある一定の関係を求め、そしてこのことは何らかの結果をもたらします。私たちは、ある場合には、自我と対象もしくは存在との間に正しい関係を打ち立てた、と感じるかも知れません。たとえある存在に恐れを抱くもっともな理由があったとしても、それでもなお、私たちの自我は恐れそのものを含むその環境との調和的な関係にあったと（私たちは後になってからでなければそれをそのような光の下に見ることはできないにしても）感じるかも知れません。

自我が外的な世界の中で何らかの事物を理解しようとしてそれに最終的に成功するならば、それはその環境と特に正しい調和の中にあると感じます。そのとき自我はそれらの事物との一体性を、あたかもそれがそれ自身から抜け出し、それらの中に自らを浸しているかのように感じ、それ自身がそれらに正しく関係づけられていると感じることができるのです。それは言い換えれば、自我が他の人々と愛情に満ちた関係の中で生き、周囲との調和の中で、幸せと満足を感じている、ということでしょう。これらの満足の感情は次いでアストラル体そしてエーテル体の中に移行します。

しかしながら、自我がこの調和を確立することに失敗し、そのためある意味で普通と呼べるようなものに達しないということが起こるかも知れません。そのときそれは難しい状況にあるところの自分を見出すでしょう。自我が何か理解できない対象もしくは存在に出会う、つまり、それがその存在との正しい関係を見出そうと努力するけれどもうまく行かず、それでもそれに対してはっきりした態度を取らなければならないと仮定しましょう。ひとつの具体的な例として、外的な世界において、私たちの自我がその本性の中に貫き至るほどの価値がないように見えるためにそれを理解したいとは思わないような存在、つまり、そうすることは私たちの知識と理解のための力をあまりに多く引き渡すことを意味すると私たちに感じさせるような存在に私たちが会おうと仮定して下さい。そのような場合、私たちは私たち自身をそれから自由にしておくために、それに対する一種の障壁を打ち立てなければなりません。私たちは、それらから私たちの力をそらすことによってそれらを意識するようになる一方、私たち自身の自意識を高めるのです。そのとき私たちのところへとやって来る感情が解放の感情なのです。

このことが生じるとき、超感覚的な観察には、いかに自我がアストラル体をその環境もしくは存在がそれに与えるであろう印象から引き揚げるかが見えます。もちろんその印象は私たちが目を閉じたり耳をふさいだりしない限り、私たちの肉体に刻印されるでしょう。肉体はアストラル体に比べて私たちのコントロール下にあることが少ないために、私たちはアストラル体を肉体から引き揚げ、外的な世界からの印象

に曝されないようにしておくのです。もしそうしなければ肉体に関わってそのエネルギーを消耗するであろうアストラル体をこのように引き揚げることは、超感覚的な観察には、アストラル体の膨張のように見えます。すなわち、それはその解放の瞬間に拡張するのです。私たちが私たち自身をある存在よりも上に引き上げるとき、私たちはアストラル体を弾力のある物質のように押し広げ、その通常の緊張を緩めるのです。そうすることによって、それから顔をそむけたいと思っている存在とのいかなる絆からも私たち自身を自由にします。私たちはいわば自分の中に引きこもり、その状況全体から自分を超越させるのです。アストラル体の中で生じるあらゆるものは肉体において表現されることになるのですが、このアストラル体の拡張の肉体的な表現が笑いあるいは微笑みなのです。

したがって、この表情は私たちが周囲で起こっていることから私たち自身を超越させていることを示しているのですが、私たちがそうする理由は、私たちが私たちの理解力をそれに適用したくないからであり、私たちの立場から見てそれが正しいことだからです。ですから、私たちがそれを理解しようと意図しないものは何であれ私たちのアストラル体に拡張をもたらし、そしてそれによって笑いを生じさせるというのは本当なのです。風刺新聞が著名人をしばしば巨大な頭と小さな体で描写しますが、これはその時代におけるこれらの人物の重要性をグロテスクに表現しているのです。これに何らかの意味を見出そうとするのは無駄です。何故なら、巨大な頭と小さな体を結びつける法則などないからです。私たちの理性をそれに適用しようとするいかなる試みもエネルギーと心的な力の無駄使いです。満足できる唯一のこととは、それが私たちの肉体に与える印象の上に私たち自身を引き上げ、自我の中で自由になり、そしてアストラル体を拡張させることです。と申しますのも、自我が経験するところのものはまず最初にアストラル体到手渡されますが、それに対応する表情が笑いだからです。

ところが、私たちが私たちの魂から必要とするような私たちの環境に対する関係を見出し得ないということが起こるかも知れません。私たちが、私たちの日常生活と密接に関係しているばかりではなく、その親密な愛情から生じる特別な魂的経験とも結びついているところの誰かを長い間愛してきたと仮定しましょう。それからこの人物がしばらくの間私たちから引き離されると仮定します。この喪失とともに私たちの魂的経験が奪われます。つまり、私たち自身と外的世界の存在との間の絆が断ち切られます。この人物と私たちとの関係によって創り出された魂的経験のゆえに、私たちの魂は、当然のことながら、長い間培われてきたこの絆が断ち切られたことによって苦しみます。何か自我から奪われ、そしてその自我に対する影響がアストラル体に移行します。この場合には、アストラル体はそれから何か取り去られるために収縮するのです。あるいはもっと正確には、自我がアストラル体を押し縮めるのです。

このことは誰かが何かを失ったことによって苦しみや悲しみを被るときにはいつでも超感覚的に観察することができます。ちょうど拡張したアストラル体が緊張を解き、肉体の中に笑いあるいは微笑みという身振りを創り出すように、収縮したアストラル体は肉体のすべての力の中にさらに深く貫き至り、それを自分とともに圧縮します。この収縮の肉体的な表現が涙を流すということなのです。アストラル体はいわば空隙とともに取り残されたため、収縮することによってそれを埋めようとしますが、そのときそれはその周囲にある物質を利用するのです。それは肉体をも縮小させ、そしてその物質を涙の形で絞り出します。では、このような涙とは何なのでしょう？

自我はその悲しみと剥奪の中で何かを失いました。それは貧しくされ、その自我性を通常よりも弱く感じるがゆえに、と申しますのも、この感情の強さはその周囲の世界における経験の豊かさに関連しているからですが、そのためそれは自分自身を引き寄せます。私たちが愛するものに何かを与えるだけでなく、そうすることによって私たち自身の魂を豊かにしているのです。そしてその愛が私たちに与える経験が取り去られ、アストラル体が収縮するとき、それは失った力を自分自身に対するこの圧力によって再び取り戻そうとするのです。それは貧困にされたと感じるがゆえに、再び自分を豊かにしようとします。涙というのは単に流れ出るものではなく、打撃を受けた自我に対する一種の補償なのです。自我は以前には外的な世界によって自分が豊かにされたと感じていました。そしてそれは今や自分で涙を流すことによって強められるのを感じるのです。もし誰かが自意識の衰弱に苦しむならば、彼は流れる涙によって表現される内的な創造行為へと自分を駆り立てることによってこれを補おうとします。涙は無意識的な健康の感情を自我に与えますが、これによって一定のバランスが取り戻されるのです。皆さんは誰でも、いかに人々が悲しみと悲惨の深みにあるときには、涙の中に一種の補償、慰めを見出すかを知っています。皆さんはまた、泣くことができない人々にとっては、いかに悲しみと苦しみがはるかに耐え難いものであ

るかを知っています。

ですから、もし自我が外的な世界との満足のいく関係を達成できない場合には、それは笑いを通して内的な自由へとそれ自身を引き上げ、あるいはまた、剥奪の後、力を獲得するためにそれ自身の中に沈み込むのです。私たちは、笑うことと泣くことの中で自分を表現するのは自我、すなわち人間の中心点である、ということを見てきました。このことからお分かりのように、ある意味で自我が笑いと涙の必要な前提条件である、ということが容易に理解されます。

もし私たちが新生児を観察するならば、それは生まれてからの何日間かは笑うことも泣くこともできない、ということが分かります。本当に笑ったり泣いたりするのは36日か40日程度経ってからにすぎません。それは、以前の受肉状態からの自我が、その子の中に生きていなくても、外的な世界との関係を直には持とうとしないという理由によります。人間は、ふたつの面から構築される、というような方法で世界の中に置かれます。彼は、一方では、遺伝によって獲得されるあらゆる性質や能力を、父、母、祖父その他から引き継ぎます。これらすべては個性すなわちそれ自身の魂的性質を自ら担い、転生を重ねる自我の作用を受けます。子供が誕生によって存在の中に入っていくとき、私たちは最初、不確かな表情しか見出しません、そして、全く不確かなのは、後になって現れてくる才能、能力そして特殊な性格も同様です。しかし、私たちはやがて、自我がいかに絶えず以前の生から携えてきたところの進歩する力をもって幼児期の組織に働きかけ、遺伝された要素を作り替えるかを観察することができるようになります。遺伝された性質はこうしてある受肉から別の受肉へと移っていく性質と混ぜ合わされるのです。

自我は子供の中でこのような仕方では活動的であるのですが、それが肉体と魂を変化させ始めるのにはいくらか時間がかかります。その最初の日々において、子供はその遺伝された特徴のみを示します。その間、自我は、以前の生から携えてきた性質をその不確かな表情に刻印づけることができるようになり、そして、毎日にそして年毎に発達するようになるのを待ちながら、深く隠されたままに留まります。

子供が自分に属する個人的な性格を身につけるまでは、笑いと言葉を通して外的な世界との関係を表現することはできません。と申しますのも、そのためには自分を外的な世界との調和の中に置こうとする自我もしくは個性が要求されるからです。自我だけが笑いと言葉の中で自分を表現することができるのです。ですから、私たちが笑うことと泣くことについて考察するときには、人間の最も奥深く、最も内的な精神性を扱っていることとなります。

人間と動物の間のいかなる真の違いも否定する人たちは、当然のことながら、動物の世界の中に笑うことと泣くことに似たものを見出そうとしましょう。しかし、これらのことを正しく理解する人は、動物はせいぜい吠える程度で、決して泣くまでには至らない、歯をむいて見せることはできても、決して微笑むことはない、と言ったドイツの詩人に同意するでしょう。ここには深い真実があり、私たちはそれを、動物はそれぞれの人間の中に住む個的な自我性へと自分を引き上げることはない、という言葉で表現することができます。動物は、人間の自我性に属する法則に似ているように見える法則によって支配されていますが、その法則はその動物にとって、その生涯を通して外的なものに留まります。人間と動物との間のこの本質的な差異については既にここで触れられています。すなわち、私たちに動物への関心を持たせるものはそれが属する種から構成されている、ということが語られたのでした。例えば、ライオンとその子孫との間には、人間の両親とその子供たちとの間に見られるような大きな差異はありません。動物の特徴の主なものは、その型あるいは種の特徴なのです。人間の領域にあっては、各人が彼自身の個性と自分史を持っており、これが私たちの関心を引くのですが、一方、動物にあってはそれは種の歴史なのです。確かに犬や猫の飼い主の中には、彼らのペットの伝記を書くことができると断言する人も多くいるかもしれませんが。また、私はかつて生徒たちに一本のペンの伝記を定期的に書かせていた校長を知っていました。ある考えがどんな事柄にでも適用できるという事実が重要なものではありません。問題は、私たちが存在や事柄の本質に理解を持って貫き至る、ということなのです。人間にとっては個人の伝記が重要ですが、動物にとってはそうではありません。何故なら、人間の本質的な部分は生から生へと生き続け、発展する個的なものであるのに対して、動物においては、生き続け、進化するのは種であるからです。

精神科学においては、それらの種に情報を伝えるところの持続する要素のことを動物の集合魂もしくは集合自我と呼び、それを現実的なものと見ます。このように私たちは、動物はその自我をそれ自身の外部に有している、と言います。私たちは動物が自我を持っていることを否定するものではなく、動物を外から方向づける集合自我について語るのです。それと対照的に、人間に関しては、私たちは彼の最奥の部分

へと貫き至り、彼の周囲の存在たちとの個人的な関係へと入っていくことができるような方法でそれぞれの人間を内側から方向づけるところの個人について語るのです。動物が外的な集合自我の指導を通して確立する関係は一般的な性格を有しています。動物が好んだり、嫌ったり、恐れたりするものはその種に特有のものであり、家畜や人間とともに生きる動物において、わずかに修正されているに過ぎません。人間においては、彼が彼の環境との関係で愛や憎しみ、恐れ、同情や反感として感じるところのものは、彼の個的な自我から湧き出して来ます。ですから、人間がそれによって彼の環境中の何かから自分を解放し、その解放を笑いの中に表現するところの特殊な関係、あるいは逆に、彼が見出し得ない関係を求め、その失望を涙の中に表現する場合、これらすべては人間においてのみ生じることができるのです。子供の個性が動物の段階を越えてそれ自身を明らかにすればするほど、それはますますその人間性を笑いと涙の中に示すようになります。

もし私たちが人生についての真の観点を獲得すべきであるならば、人間と動物における骨や筋肉あるいはその他の器官の類似性といったような粗雑な事実第一義的な重要性を置くべきではありません。私たちは、人間が地上存在の中で最高の地位を占めていることの証明として、彼の本質的な特徴とは何かを、その性質の隠された側面において追求すべきなのです。もし誰かが人間と動物の間の違いを明らかにするという点で、笑いや涙のような事実の重要性を理解できないとすれば、人間をその精神性において理解するようになるために最も問題となる事実へと上昇できないような人は救い難い、と言わざるを得ません。

今、私たちが精神科学の光の下に考察している事実はある種の科学的な発見を照らし出すことができるのですが、但し、それはその事実が精神科学的な文脈における大いなる全体性の中に置かれたときに限ります。私たちが笑う人、あるいは泣く人を観察するならば、その呼吸過程に変化が生じているのが分かります。嘆きが涙にまで深まり、アストラル体の収縮へと導くとき、そしてこれによって肉体も収縮するのですが、吸気がますます短く、そして呼気がますます長くなります。笑いにおいては反対のことが起こります。つまり、吸気が長く、呼気が短くなります。ある人のアストラル体が緩み、そしてそれとともに肉体の繊細な部分が緩むとき、その過程は中のすべての空気がポンプで排出された空虚な空間の中に直ちに外の空気が流れ込むのに似ています。笑いにおいては外的な身体性の一種の解放が生じるのですが、そのとき息が長く吸われるのです。泣くときには正反対のことが起こります。私たちはアストラル体を押し締め、それとともに肉体を押し締めますが、その収縮が一回の呼気を長く続くようにさせるのです。

これもまた、魂の経験が自我によって物理的なものと関係づけられるという、つまり、正に人間の肉体にまでもたらされるというひとつの例なのです。

私たちがこれらの生理学的な事実を取り上げるならば、それらは太古の人類の宗教的な文献の中に象徴的に記録されている出来事にすばらしい仕方です。皆さんはヤハヴェもしくはエホバが生命の息を人間に吹き込み、それによって彼に生きた魂を授けたとき、彼がいかに十全たる人間の地位に引上げられたかを告げる旧約聖書の一節を思い出されるでしょう。それは自我の誕生が私たちの意識に刻印される瞬間です。このように、旧約聖書の中では、呼吸過程が真の自我性の表現として示され、人間の魂的性質との関係へともたらされているのです。笑うことと泣くことがいかに自我の独特の表現であるかを思い出すとき、私たちは呼吸過程と人間の魂的性質との密接な関係を直ちに理解します。そしてそのとき、私たちは、深く、そして真実の理解が私たちの中に浸透しなければならないという謙遜の気持ちをもって太古の宗教的な文献をこの知識の光の下で眺めるようになります。

精神科学にとってはこれらの文献は不可欠ではありません。大災害によってこれらの記録がすべて破壊されたとしても、精神科学的な探求にとっては、それらの根本に横たわるものを自分で発見する手段があるのです。けれども、事実がこの手段によって確認され、そしてその後で、まぎれもなくその同じ事実が古い文献の象徴的で絵画的な言葉によって描写されているのが見出されるとき、それらの記録に対する私たちの理解は大いに高められるのです。私たちは、それらが精神科学的な探求者によって見出されるものに通じていた予言者に起源を有しているに違いないと感じます。精神的な洞察が精神的な洞察と何千年のときを超えて出会うのです。そしてこの知識から、私たちはこれらの記録に対する正しい態度を獲得します。いかに神が人間の中に神自身の生きた息を吹き込んだか、それによって彼が彼自身の内に住む自我を見出すことができるようになったかが語られるとき、私たちはこれらの記録に残された出来事が人間の本性にとっていかに真実であるかを私たちの笑いと涙についての探求に基づいて理解することができるのです。

もう一点触れておくことがあります。ただ簡単に触れるだけにします。そうでなければ、あまりに手

を広げすぎることになるでしょう。誰かが私に次のように言うかも知れません。あなたの出発点は間違っていました。あなたは外的な事実から出発すべきだったのです。精神的な要素はそれが純粋に自然の事象として現れるところに求められるべきです。例えば、人がくすぐられたときのようにです。それが笑いに関する最も基本的な事実なのです。あなたはこの事実とあなたの想像力豊かなアストラル体の拡張やその他のものとの折り合いをどのようにつけるのですか？と。

そうですね、アストラル体の拡張が生じるのは正にそのような場合であり、私が述べたようなことすべてが、ただし、低いレベルにおいてですが、生じることになります。もし誰かが自分の足の裏をくすぐるとしても、彼は何が起こっているかを良く知っており、笑いを強制されるようなことはありません。けれども、彼が誰か他の人にくすぐられるとすれば、彼はそれを見知らぬものの侵入として、理性では理解できないものとして拒絶するでしょう。それから彼の自我は自分を解放し、アストラル体を自由にするためにそれを超越しようとするでしょう。このような不適切な接触からアストラル体を自由にするということが動機のない笑いの中にそれ自身を表現するのです。それは正に解放を、私たちの足をくすぐるといふ私たちに對する攻撃からの基本的なレベルにおける自我の救出を意味しているのです。

冗談や何かこっけいなことに対する笑いも同じレベルにあります。私たちが冗談を聞いて笑うのは、笑いが私たちをそれとの正しい関係にもたらずからです。冗談はまじめな生活においては離ればなれになっているものを相関させます。もしそれらの間の関係を論理的に把握することができるならば、それはこっけいではあり得ないでしょう。冗談は理解ではなく、(私たちが混乱状態にない限り)単に一種の遊びを喚起するような関係を打ち立てるのです。私たちはすぐにその遊びの主導権を握っていると感じ、自分自身を自由にし、その冗談の内容から超越します。この解放、すなわち私たちが自身を何かの上に上昇させるということは、笑いが起こるときにはいつでも見出されることなのです。

しかし、外的世界に対するこの関係は正当なものであるかも知れないし、またそうではないかも知れません。私たちは笑いを通して正しく私たち自身を解放しようとしているのかも知れません。あるいはまた、それに向けられた私たち自身の心が、そこで起こっていることを理解したくないように、あるいは理解できないようにさせているのかも知れません。そのとき、笑いは事物の本性にではなく、私たち自身の限界に起因することになります。このことは、未発達な人間が誰かを理解することができないために彼のことを笑うときに起こります。もし未発達な人間が別の人物の中に、彼が正当で真正なものだと見なししているところのありきたりで俗物的な性質を見だし損ねるとすれば、彼はその人物を(多分、理解したくないために)理解しようとする必要がないと考えるかも知れません。ですから、笑いを通して自らを解放するということは、あらゆる場合に容易に習慣になり得るのです。本当にある種の人々にとっては、すべてのことを笑ったり、愚痴をこぼすだけで、とにかく何も理解しようとしなないということが当然のことになっているのです。彼らはふわふわとアストラル体をふくらまし、そして笑い続けるのです。あるいはまた、何か日常的な考えはそれを理解しようとするところのいかなる努力にも値しない、という態度が今流行になっているのかも知れません。そのとき人々はあれこれのものに対して優越感を感じ、思わずにんまりするでしょう。このことからお分かりのように、笑いはいつでも正当な留保の感情を表現しているというわけではないのです。留保が不当なものである可能性もあるのです。けれども、笑いに関する基本的事実がそのことによって影響を受けるわけではありません。

あるいは、誰かがこの人間の表現形式を計算ずくで利用するということが起こるかも知れません。話し手が聞き手に対して自分の言葉が持つ効果を、彼らが自分に賛成するかしないかにかかわらず、計算すると考えて下さい。さて、あまりにも取るに足らないことであり、あまりにも聴衆のレベルに比べて程度が低いために聴衆の魂といかなる密接な結びつきも織りなさない、というような仕方語られることに話し手が言及することが正当なものである場合もあるでしょう。実際、そうすることによって、彼は本当に理解してもらいたい主題を取り巻くところの些細な事柄から聴衆が自由になるのを手助けしているのかも知れないのです。けれどもまた、いつも笑いを自分たちの側に取り込みたいと思っている話し手もいます。私は、彼らが次のように言うのを聞いたことがあります。私が勝つとすれば、私は笑いを巻き起こし、それによって笑った人たちを私の味方につけなければならない。何故なら、笑った人たちを味方につけていれば、ほとんど勝ったようなものだから！と。このようなことは内的な不正直から出て来ます。何故なら、笑いに訴える人は誰でも、彼の聴衆を何らかのものを越えて上昇させるということを意図した反応を引き起こしているからです。けれども、彼が問題を提示するに当たって、もし、その問題がただ単に些細なこ

とのように見えるレベルにまで引き下げられているというだけの理由で、彼の聴衆がそれを理解しようとせず、それを笑うことができるというような仕方では提示するならば、たとえ聴衆がそれに気付いていないとしても、彼は人間の虚栄心を当てにしているのです。ですから、お分かりのように、この笑いを当てにするということはある種の不正直を含んでいる可能性があるのです。

同様に、私が述べたような涙に結びついた満足や幸福の感情を人々の中でかきたてることによって彼らを手中にすることもときとして可能なのです。ある人の前にイメージーションの中だけで何らかの喪失感が持ち出されるような場合です。そのとき、その人はその何らかのものを見出すことができないのを知りつつそれを渴望することに耽るかも知れません。彼は彼の自我を収縮させることによって自分の自我性が強められるのを感じます。そしてこの種の感情への訴えかけは本当は人間の利己主義への訴えかけなのです。このように、これらの訴えかけの形態はひどく乱用される可能性があるのです。何故なら、涙や笑いつきもの苦しみや悲しみ、からかいやさげすみはすべて自我の強化や解放に、したがって、人間の自我性に関連しているからです。ですから、そのような訴えかけがなされるとき、それが標的としているのは私たちの利己主義であり、その利己主義が人と人との結びつきを破壊するのです。

私たちは、別の連続講義の中で、自我が感覚魂、悟性魂、そして意識魂に働きかけるだけではなく、その働きを通してそれ自身ますます強化され、成就に向けて近づく、ということを見てきました。このことから、泣くことと笑うことが自我の自己教育とその力を強化するための手段になり得るということが容易に分かります。ですから、笑いと涙の中に表現される魂の力を刺激するところのあの演劇の創作が人間の発達に向けての大いなる教育の源泉のひとつとして位置づけられるのは確かです。

私たちが悲劇的なドラマを体験するということは、実際、本当にアストラル体を押し縮め、それによって自我に確かさと内的な凝集力を与えるという効果を有しているのです。喜劇はアストラル体を拡張させます。それはそれを見る人が愚行や偶然の一致から自分を超越させるからです。このことから、芸術的な創作行為を通して私たちの魂の前にもたらされるところの悲劇や喜劇がいかに人間の発達と密接に結びついているかを見ることができるのです。

人間の本性をその最も詳細な面に至るまで観察する人は誰でも、毎日の経験が最も偉大な事実の理解へと導くということを見出すでしょう。芸術的な作品は、例えば、人生には笑いと言涙の間で行ったり来たりしている一種の振り子がある、ということ私たちに教えます。自我は動きの中にあることによってのみ発達することができるのです。もし振り子が静止しているならば、自我は拡張したり、あるいは発達したりすることができず、内的な死に屈することになるでしょう。人間が発達する上で、自我が笑いを通して自らを自由にし、一方では涙を通して自らを追求することができる、というのは正しいことなのです。確かに、これらふたつの極の間にはバランスが見出されなければなりません。それはつまり自我がバランスの上においてのみ完成を見るからであって、決して狂喜と絶望の間を行ったり来たりすることの中においてではないからです。それは、一方の極端へと同じく別の極端へも振れて行く可能性があるような静止点においてのみ自らを見出すことになるでしょう。

人間は徐々に彼自身の発達を導く指導者にならなければなりません。もし私たちが笑いと涙を理解するとすれば、私たちはそれらを精神の顕現と見ることができるでしょう。と申しますのも、私たちが、いかに人間が内的な解放の外的な表現を笑いの中に求めるかを、そして一方では、その自我が外的な世界の中である喪失を被った後、いかに彼が涙の中で内的に強められるのを経験するかを認識するときには、人間はいわば透明になるからです。

笑いとはそもそも何なのか、というような問いに対して、私たちは次のように答えることができます。それは、人間が自分に値しないものに巻き込まれることなく、決してとりこにされるべきではないものから笑いととも超越するために、彼が解放に向けて苦闘していることの精神的な表現である、と。同様に、涙は、彼を他の誰かと外的な世界において結びつけていた糸が断ち切られたとき、それでも、彼がその涙のただ中で同様の結びつきを求めているという事実の表現なのです。彼が泣くことを通して彼の自我を強化するとき、彼は実際、自分に次のように言っているのです。私は世界に属している。そして世界は私に属している。何故なら、私はそれから引き離されていることに耐えられないのだから、と。

さて最後に、私たちはいかにこの解放、つまり、あらゆる下劣で邪悪なものからの超越が、それを見た地上のすべての生き物が狂喜し、一方、邪悪な精神が逃げ出したところの「ツアラツウストラ・スマイル」の中に表現され得たかを理解することができます。この微笑みは、それを窒息させたかも知れないあらゆる

るものからの自我の超越を世界史的に象徴するものなのです。そして、存在することは価値がない、もう世界とは関わりたくないというような場面に自我が遭遇し、その後、「世界は私に属し、私は世界に属す。」ということ肯定させるような力が魂の中にわき上がって来るならば、そのとき、この感情は、「涙が溢れて、地球が再び我を抱く。」というゲーテの言葉に直されるのです。

この言葉はある確信を、つまり、私たちは地球から締め出されることはできない、私たちは私たちの涙の中でさえ世界との密接な結びつきを、それが正に私たちから取り上げられたように見える瞬間にこそ主張するのだという確信を声にしたものなのです。そしてこの主張はその正当性を世界の深い秘密の中に有しているのです。

私たちは人間と世界との結びつきを彼の顔を流れる涙から、あらゆる下劣なものからの解放を彼の表情に浮かんだ微笑みから知るのである。

* 本連続講義の第2講は以上ですが、シュタイナーがこの前年の1909年に同じくベルリンで行った連続講義「人間存在とその未来の進化」の第7講も「笑うことと泣くこと」と題されています。この講義は上記の講義とほぼ同じ内容ですが、最後のところが少し異なっています。そしてその部分は大変印象深いところなのですが、何故か上記の1910年の講義では触れられませんでした。そこでその部分だけを付録として以下に訳しておきます。両方の講義を比べてみると、内容はほぼ同じなのに何か少し雰囲気が違うような気がします。英訳のせいなのか、元々そうなののかはよく分かりません。

偉大な詩人は傲慢や自我の萎縮に根ざすような種類の悲しみや喜びではなく、自我とその環境との間の関係から生じ、そのバランスが外部から妨害された場合の悲しみや喜びに対して、そしてそれだけが何故人間が笑ったり泣いたりするのかを説明するのですが、しばしば美しい表現を見出します。私たちがそのことを理解することができるのは、自我と外的世界とのバランスが妨害されるのは外的世界においてであり、そして外的世界によってである、ということを理解するからです。それこそが、人間が笑ったり泣いたりする理由なのです。一方、その理由が人間の中だけにあるとすれば、私たちは彼が何故笑ったり泣いたりするのかを理解できません。何故なら、それはいつでも何も根拠のないエゴイズムだからです。したがって、ホームーがアンドロマッヘについて、彼女がその夫と赤ん坊の二重のしがらみに捕らわれる場面で、「彼女は泣きながら笑うことができた。」と言うとき、それが心を打つのはこの理由によるのです。これは泣くことに関して何か正常なものを記述するすばらしい方法です。彼女は自分のために笑うのでも泣くのでもありません。彼女が一方では彼女の夫を、他方では彼女の子供を気にかけるとき、外的な世界との正しい関係がそこにあります。そしてここに笑うことと泣くことがお互いにバランスを取るという本当の関係、すなわち、泣きながら微笑み、笑いながら泣くという関係があるのです。純真な子供はしばしばこのような方法で自分を表現します。何故なら、その子の自我は、後に大人になってからのようには硬化しておらず、笑いながら泣き、泣きながら笑うということがまだできるからです。そして、これらのことを理解する人は次のような事実を再び確かめることができます。つまり、笑ったり泣いたりする原因をもちや自分自身の中に求めず、外的な世界の中にそれを見出すという地点に至るまで彼の自我を克服したすべての人もまた泣きながら笑い、笑いながら泣くことができる、という事実をです。実際、私たちの周囲で毎日起こっていることの中に、もし私たちがそれを理解しさえすれば、精神的なものの真の表現があるのです。笑うことと泣くことは何か最高の意味で人間における神的なものの表情と呼ばれ得るものです。(Rudolf Steiner, The being of man and his future evolution, Rudolf Steiner Press, P108-9)

第3講「神秘主義とは何か」

(1910年2月10日)

本日取り上げますのは、それに関する広範な混乱がみられるようなテーマです。少し前に、私はひとりの教養ある学者が、暗く、不可解で、知識の範囲を超えた要素の存在を容認していたという理由で、ゲーテを神秘家の内に数えるべきだと断言するのを聞きました。そして多くの人がこの意見に同意するでしょう。一体、今日では神秘主義あるいは神秘的と呼ばれないものがあるのでしょうか？何かはっきりしないものがあるとき、もし、それに対するその人の態度が「知らない」と「ぼんやりと感じる」の間を漂っているならば、彼はそれを神秘的であるとか不思議だとか言うでしょう。人々が何らかのことについて、ある種の無思慮や心理学的な知識によって、何も信頼に値するようなことは知り得ないと断言したい誘惑に駆られ、そしてそればかりではなく、それが今日の習慣になっているように、他の誰かがそれについての知識を有しているかもしれないということをも否定するならば、彼らはそれを神秘的であるとして退けるのです。

けれども、もし神秘主義という言葉の歴史的な起源を研究するならば、私たちは偉大な人物たちがそれについて理解していたことや、彼らがそれによって自分たちに提供されていたと信じていたものについて全く異なる考えを持つようになるでしょう。私たちは、不明瞭で不可解であることを神秘主義の内容であるとは全く見なさず、その目標を高次の明晰さ、より明るい魂の光を通してのみ達成可能であるものとして語った人たちがいたということ、そしてその明晰さの程度は神秘主義の明晰さが始まる地点で科学の明晰さが終わるといほどのものであったということを理解するようになるのです。真の神秘主義を経験したと信じる人たちの確信とはそのようなものなのです。

人間進化の最初期の時代にはいくつかの神秘主義が見出されますが、エジプトやギリシャそしてアジアの人々の秘儀において神秘主義と呼ばれたところのものは私たちの概念的な思考とは非常に隔たっています。そのため、たとえ私たちが神秘的な経験が取ったそれらの古い形態の横を通り過ぎたとしても、神秘主義という考えはほとんど浮かんでこないでしょう。

神秘主義のかなり最近の形態、すなわちマイスター・エックハルトに始まり、13世紀から14世紀を通して、あの比類なき神秘家、アンジェラス・シレジウスにおいてその絶頂をむかえるドイツ神秘主義の形態から出発するならば、私たちは今日の概念に最も近づくことができます。もし、彼らの神秘主義を検証するならば、それは純粹に内的な魂的経験により、とりわけその魂をすべての外的な印象や知覚から自由することにより、世界の最も深い出発点に関する真の知識に到達することを求め、そしてそのため、その魂は外的な世界から引きこもり、それ自身の内的な生活の深みに沈潜しようとした、ということが見出されます。言い換えれば、このタイプの神秘主義者は、どんなに努力して自然現象を分析しても見出すことができないような、また彼の知性をもってそれらを把握しようとしてもできないような世界の神的な基盤をこの方法によって見出すことができる、と信じていたのです。彼の観点は、外的な感覚印象が世界の神的な基礎の探求において、人間の認識力をもってしては貫くことができないようなヴェールを形成する、というものです。ところが、魂の内的な経験ははるかに薄いヴェールを形成し、そして、外的に現れているものの基礎にも横たわっているところの神的な基盤に向けて、このヴェールを貫くことは可能である、というのがあの世紀におけるマイスター・エックハルト、ヨハネス・タウラーそしてスーソ等からアンジェラス・シレジウスへと至る神秘家の秘儀の方法になっているのです。

これらの神秘家たちが、彼らの内的な探求の直接的な結果と見なされ得るであろうものだけではなく、それ以上のものを見出すことができるということを知っていたのは明らかです。私たちは、この冬の連続講義の中で、この内的な探求をそれらすべての様々な側面において扱いました。もし、私たちが人間の内的な存在と正当に呼ばれるものの中をのぞき見るならば、私たちはまず第一に魂の最も暗い深みに行き着きます。そこでは魂がまだ恐れや恐怖、不安と希望、そして楽と苦、楽しみと悲しみの全領域にわたる感情に左右されています。私たちはこの魂の部分を感じ魂と呼びました。さらに私たちはこれらの魂的経験の暗い基礎の中から、私たちが悟性魂と呼ぶところのものを区別しました。そしてそれは、自我が外的な印象を取り入れ、感覚魂の中に現れるところのものにその生命を全うさせ、そして平衡を見出させるとき

達成されるようなものです。私たちはまた、悟性魂の中に、私たちがそう呼ぶところの内的な真実が生じる、ということをお話ししました。そして自我がその悟性魂への途上において獲得したところのものにさらに働きかけるとき、それはそれ自身を意識魂へと高めます。そしてそこで初めて、自我についての明確な認識が可能となり、人間は内的な生活から真の世界認識へと導き出されるのです。もし私たちがこれら三つの魂的生活の構成体を私たちの前に保持するならば、私たちが私たちの内的な存在の中に私たち自身を沈めるときに私たちが見出すところのものの概要がそこにあり、私たちは自我がその魂の三つの構成体にどのように働きかけるかを見出すのです。

既に述べたような方法で知識を追い求めたあの神秘家たちは、この魂の深みへの沈潜によって、何か別のものを見出すことができると信じていました。と申しますのも、彼らにとっては、魂的生活の内的な経験というのは存在の源泉に至るためには通り過ぎなければならないヴェールに過ぎなかったからです。とりわけ彼らは、もしその源泉に到達するならば、外的な歴史がキリストの生と死として提示するものをさらなる内的な経験として彼ら自身が経験するだろう、と信じていたのです。

さて、たとえ中世的な意味においてではあっても、魂へのこの神秘的な下降が起こるならば、その過程は次のようなものになります。外的な世界がその光や色の領域、あるいはそれが彼の感覚に与えるその他のあらゆる印象とともに神秘家の前にあります。彼はこのすべてに彼の知性をもって働きかけるのですが、その外的な世界にとらわれたままに留まり、その外観を貫いてそれらの源泉に至ることはできません。彼の魂は外的世界の概念的なイメージ、とりわけそれが受け取る印象から来る経験を、苦であろうと楽であろうと、あるいは共感であろうと反感であろうと保持するのです。人間の自我は彼の興味や内的生活の全体とともにあり、彼を外的世界およびそれが彼に刻印づける印象へと向かわせます。ですから、最初に神秘家が外的世界から目を逸らそうと試みる時には、外的世界が朝から晩まで彼の魂の中に生じさせたところのあらゆるものを計算に入れなければなりません。そして彼には、最初、彼の内的生活が外的生活の繰り返し、あるいはその投影のように見えるのです。

では、その魂が外的世界からその中に投影されたあらゆるものを忘れようとして、つまり、その世界から引き出されたすべての印象や概念的なイメージを消し去ろうとして奮闘するならば、その魂は空虚なまま取り残されるのでしょうか？ 真の神秘的な経験は魂が別の可能性を有しているという事実依存しているのです。そのため、それがその内に有する記憶だけでなく、共感や反感という感情をも消し去るとき、それでもそれは何らかの内容を有しています。神秘家は外的世界の印象がその色鮮やかな像とそれが魂に与える影響により、魂の隠れた深みに存在する何かを抑圧するような効果を持っていると感じます。彼が外的世界に向かうとき、その生活はより繊細な魂の経験をうち消すように輝き出る力強い光のようなものであると感じられます。しかし、外的世界からのすべての印象が消し去られるとき、エックハルトがそう呼んだような内的な閃光が輝き出るのは、そのとき彼は、目もくらむような外的世界を前にしては知覚不可能であったために、何か以前はそこになかったように見えたところのものを魂の中で経験するのです。

神秘家はそのとき、それをはっきりさせるため、彼の魂の中で経験するところのものは外的世界において彼が会うようなものと比較され得るのかと問います。いいえ、大変な違いがあります。外的世界における私たちの事物に対する関係は、それらの事物がその外的な側面しか私たちに見せないために、私たちはそれらの内面性へと貫き至ることができない、というようなものなのです。私たちが色や音を知覚するとき、私たちはさしあたり、その背後にそれらの隠された側面と見なさざるを得ないような何か横たわっている、ということに気づくことができます。けれども、私たちが外的世界の印象や概念的なイメージを消し去るやいなや、魂の中に生じる経験に関しては、事情が異なってきます。つまり、私たちは、それらがそれらの外的な側面だけを私たちに見せている、とは言えなくなるのです。何故なら、私たちはそれらの内にいて、それらの一部であるからです。そして、もし私たちに内的な光へと私たち自身を開く才能があるならば、それらは私たちにその真の存在において自らを示すとともに、私たちはそれらを外的世界において会うようなものとは全く異なるものとして見るのです。と申しますのも、外的世界は至るところで成長と衰退、開花と萎縮、誕生と死から逃れられないからです。そして、小さな閃光が輝き始めるとき、魂の中に自らを現すところのものを観察するならば、すべての成長と衰退、誕生と死に関する考えがそれには適用できない、ということが分かります。何故なら、ここで私たちは何か独立したものに会うのであって、内と外というような外的世界に属する概念はそれにはふさわしくないからです。ここで私たちが把握するのはもはや事物の表面もしくは外面ではなく、その真の存在における事物そのものなのです。

私たちが私たち自身の内にある不滅の要素を確かなものとし、そしてその要素と精神、すなわちすべての物質的なものの主要な基盤として考えなければならないものとの緊密な関係を確認するものは、正にこの内的な知識を通してなのです。この経験はその神秘家に、自分は以前の経験を克服し、抹殺しなければならない、通常の魂的生活は終わり、そして生と死に対する勝利者である真の魂が自分の内に生じる、と感じさせるように導きます。神秘家は通常の魂的生活が死んだ後に生じるこの魂の内的な核の目覚めを内的な再生として、つまりキリストの死と再生という歴史的な経過に似たものとして経験します。こうして、彼はキリスト事件が内的で神秘的な経験として彼の魂と精神の中で生起するのを見るのです。

もし私たちがこの神秘主義的な道を最後まで迎えるとすれば、すべての経験の統合とでも呼べるようなものに行き着くに違いない、ということが分かります。何故なら、その道は感覚知覚の多様性、すなわち知覚と感情の潮の満ち引きや思考の豊かな多様性が単純化されるという私たちの魂的生活の本質に属しているからです。と申しますのも、私たちの生活の中心点である自我は私たちの魂的生活の全体に統一を創り出そうとして絶えず働いているからです。ですから、これは明らかなことですが、神秘家が魂的经验の道を歩むとき、それらの経験は、あらゆる種々雑多なものが、自我によって処方された統一に向けて努力する、というような方法で彼の前にやって来ます。したがって、私たちはすべての神秘家の中に精神的な一元論とでも呼ばれ得るものを見出すのです。神秘家が、内的な存在であるところの魂は外的世界において見出されるようなものとは極端に異なる性質を有している、という知識へと自分を上昇させるとき、彼は魂の核と世界の神的・精神的な地盤との調和を自分の存在の内部で経験するのですが、そのために彼はそれらをひとつの統一体として表現するのです。

私が今お話ししていることは単に記述的なものと見なされなければなりません。それは、魂によってその最も親密な関心事として手渡されてきた個々の神秘的な経験という形によるのでなければ、神秘家が明らかにするところのものを現代的な意味で再構成することは不可能だからです。ですから、神秘家が私たちに語る場所の奇妙なことがらを私たち自身の経験と比べてみることもできるのですが、もし自分で経験するのではなく、他の人が個人的に経験したことについての記述に頼らなければならないとすれば、外面的な批判をすることはできないのです。けれども、神秘家が歩む道についてははっきりとした像を今回の連続講義の基本的な立場から構成することはできます。それは本質的に内的な生活へと入っていく道であり、人間の発達歴史が示すところによると、それは人間の精神がその啓蒙へと向かう探求の中で取る道のひとつです。どれが正しい道であるかについては様々な意見があるかも知れませんが、もし私たちが「神秘主義とは何か？」という問いにはっきりとした答えを与えるべきであるならば、追求され得る別の道の上になにがしかの光を当てなければなりません。

神秘家の歩む道は彼を統一へと、すなわちひとつの神的・精神的な存在へと導きます。彼がこれを行うのは自我によって魂的经验の統一がそこで与えられるところの彼の内的な存在へと導く道に従うことによってです。もうひとつの道は人間の精神が外的世界のヴェールを貫いて存在の根底に至ろうとするとき、いつも取られてきた道です。そこでは、とりわけ人間の思考がその他の多くのものと合同して感覚によって知覚することができ、通常の知性によって把握することができるものを貫いて、表面的な事物の背後に横たわるところのものより深い理解へと到達しようとしてきたのです。そのような道は、神秘主義の目標とは対照的に、必然的にどこに導くのでしょうか？それは、すべての妥当な関連が考慮されるならば、多種多様な外的な現象からみて、精神的な根底にも同様の多様性が存在しなければならない、という結論に導くのです。近代において、このような思考方法に従ったライブニッツやハーバートのような人たちは、豊かな外的現象をその根底に横たわっているであろういかなる種類の統一性によっても説明することはできない、ということを見てきたのです。要するに、彼らはあらゆる神秘主義に対するアンチテーゼ「単子論」を見出したのです。彼らは、世界が単子もしくは精神的な存在たちの多様性のある活動に基礎づけられている、という観念に達したのです。

こうして、17、8世紀における偉大な思索家であるライブニッツは自らに次のように言いました。私たちが時空の中で出会うところのものを、そのすべてがひとつの統一体から湧き出してくると信じるならば、私たちは道に迷う。それは共同して働く多くのユニットに由来しているに違いない。そして、この単子の相互作用、つまり単子もしくは精神的な存在の世界が人間の感覚によって知覚される現象を引き起こすのだ、と。

これについて今日は詳しくお話しすることはできませんが、精神的な発達深い探求が示すのは、外に

向かう道を取りながら統一性を求める人は誰でも幻覚を免れないということです。つまり、彼らは神秘主義において内的に経験された統一性を一種の影のように外に向かって投影し、そしてこの統一性が外的世界の基礎であり、思考によって理解可能なものである、と信じたのです。けれども、健全な思考は、外的世界にはいかなる統一性も見出されることはなく、その多種多様性は様々の存在もしくは単子相互の働きから生じる、ということに気づきます。神秘主義は統一へと導くのですが、それは自我が魂の唯一の中心として私たちの内的な存在の中で働くからです。外的世界を通る道は、必然的に多様性、多元性、単子論に、すなわち世界についての人間の知識が器官や観察の多様性を通して達成される一方、多くの精神的な存在たちが私たちの世界を生じさせるために、ともに働いているに違いないという観点に導くのです。

さて、思考の歴史において、はるかな重要性を持っているにもかかわらず、あまりにもわずかな注目しか集めていない地点へと私たちはやって来ました。神秘主義は統一へと導きます。けれども、世界の神的な基礎をひとつの統一体として認識するのは自我の本性、つまり魂の内的な構成に由来します。神秘家が神的・精神的なものを見上げるときには、自我がその統一の印を与えるのです。外的世界についての考察は単子の多様性へと導くのですが、それは単に私たちが世界を観察し、それが私たちに会うその方法が多様性へと導き、そしてライブニッツやハーバートをして世界の基礎としての多様性を仮定させるように促したからに過ぎないのです。より深い探求は、統一性も多様性も世界の神的・精神的な基盤に適用できるような概念ではない、ということ私たちに気づかせてくれます。何故なら、私たちはそれを統一性によっても多様性によっても性格づけることはできないからです。私たちは、神的・精神的なものはこれらの概念を超越しており、これらによって推し量ることはできない、と言わなければなりません。

哲学的な論争の中で、しばしば反対のものとして示される一元論と多元論の間の争いに光を当てる原則のひとつがこれです。もし、言い争う人たちが、彼らの概念は世界の神的な基盤に近づくには不十分である、ということに気づきさえすれば、彼らは彼らが何を論争しているかを正しい光の下に見るようになるかも知れません。

さて、私たちは真の神秘主義の本質とは何かを学びました。それは神秘家を真の知識に導くような種類の内的な経験です。その経験が統一的に見えるのはそれが彼自身の自我に由来しているからです。ですから、彼はその統一性を客観的な真実と見なすことにおいて正当化されることはないでしょう。しかし、彼は本当に、精神の実体性がその統一の中に生きているところのものとして経験される、と言うことはできるかも知れません。

もし、私たちがこの神秘主義の一般的な説明から個々の神秘家に移るとすれば、私たちはしばしば神秘主義の反対者たちによってそれに反対する証拠として持ち出されるところの事実に出会います。個々人の内的な経験は様々な形態を取り、そのため、ある神秘家の経験は別の神秘家のそれと完全には一致しないかも知れないのです。けれども、二人の人間が、あることについて異なる経験をしたからといって、彼らの報告が正しくないということには決してなりません。ある人がある木を右から、そして別の人が左から見て、それぞれが彼ら自身の観点からそれを記述するならば、それは同じ木であり、それらの記述は両方とも正しいかも知れないのです。神秘家の魂的な経験が何故異なっているかについて、この簡単な例が示すことでしょう。つまり、結局のところ、神秘家の内的な生活は完全に空虚なものとして彼の前に現れるのではないのです。外的な経験を消し去り、それらから完全に注意を逸らそうとする神秘家の理想がどんなに大きなものであっても、それらはそれでも彼の魂の中に痕跡を残しますが、このことがひとつの差異を形成するのです。神秘家は彼の出身国の性格からも何らかの影響を受けずにはいられないでしょう。たとえ彼が有していたあらゆる経験を彼の魂から投げ出すにしても、彼の内的な経験は彼自身の人生から得られた言葉と概念によって記述されなければなりません。二人の神秘家が正確に同じ事柄を経験することもあるかも知れませんが、彼らは彼らの以前の人生の結果として、それを異なって記述するでしょう。私たちが、神秘的な経験の現実というものは基本的に同じであるということに気づくことができるようになるのは、私たちが私たち自身の個人的な経験を通して、記述と描写におけるこれらの個人的な違いを許容することができるときだけなのです。それはちょうど私たちが色々な角度から一本の木を写真撮影するよなものです。それらの写真は異なっているかも知れませんが、すべて同じ木の写真に違いはないでしょう。

ある意味で、神秘的な経験に対する異論と考えられるかも知れない別の点がありますが、私はあれこれの偏見なしに、客観的にお話ししなければなりませんから、この異論は正当なものであり、あらゆる形態の神秘主義に当てはまる、と言わざるを得ないのです。神秘的な経験は非常に親密で内的なものであり、

神秘家が経てきた以前の年月から導かれた個人的な性格を有しているという正にそのことのために、神秘主義的な生活について彼が語るいかなることも必然的に彼自身の魂と密接に結びついており、別の魂によって正しく理解されたり、同化されたりすることがきわめて困難なのです。神秘主義の最も親密な側面は、語られたことをどんなに熱心に理解し、その中に入れていこうとしても、いつでも親密なままに留まらざるを得ず、伝えられることが非常に困難なのです。問題になるのは次のような点です。つまりそれは、二人の神秘家が、もし両方が十分に進歩しているならばですが、同じ経験を持ちながら（その時、良心的な人なら誰でも、彼らが同じことについて話しているということに気づくでしょう）彼らが彼らの以前の年月において異なった経験を通じてきたために、そのことが彼らの神秘主義に独自の色合いを与えるであろう、ということです。このことから、ある神秘家によって用いられる表現や彼の口振りは、それらが神秘主義以前の彼の生活に由来するゆえに、私たちが彼の個人的な背景を理解しようと努力し、そうすることによって、彼が何故そのような話し方をするのかを理解するようにならない限り、いつでも、いくらか理解しがたいものに留まるでしょう。そのため、私たちの注意は普遍的に有効であるものから神秘家自身の個性へと逸らされます。この傾向は神秘主義の歴史の中で観察することができます。

私たちは、最も奥深い神秘主義者に関しては特に、彼らが得た知識が他の人たちに告げられ、同化されることができる、などという考えを持たないようにしなければなりません。神秘主義的な知識を一般的な人間の知識の一部にすることは全く簡単ではないのです。しかし、だからこそ、私たちはその神秘家に対する興味をますますそそられます。そして、彼を研究することは、彼の中に普遍的な人間のイメージが反映されているために、無限に興味深いことなのです。神秘家が記述し、評価するところのものは、そして彼はそれが彼を存在の根底や源泉に導くという理由でそうするのですが、それ自体、世界の客観的な本性という点では、ほとんど私たちの興味を引きません。私たちが興味を引かれるのはその主観的な面であり、個人としての神秘家に対するその関係なのです。したがって私たちは、神秘主義を研究するとき、正にその神秘家が克服しようとしたことの中に、つまり世界に対する彼の個人的で、直接的な態度の中に価値を見出すのです。もし私たちが、いわば神秘家の側面から、人類の歴史を観察するならば、私たちは確かに人間の本性について多くのことを学ぶことができるでしょう。しかし、神秘家が表現するような言葉の中に（これはあまり強く主張することは決してできないのですが）、私たちにとって直接的な価値があるような何らかのものを見出すというのは非常に難しいことなのです。

神秘主義とは単子論もしくは二元論の反対側にあるものです。後者はすべての人間が共通に有している外的世界を観察し、熟考することから導かれます。その結果得られる体系は、間違いにつぐ間違いを含んでいるかも知れませんが、それを議論したり、どんな段階にせよ各人が到達した地点からそれらを基にしてなにかの何をなすことは可能なのです。

ですから、ここで議論してきた神秘主義は大変に魅力的なものではありますが、それについて今まで述べられたことを私たちの魂に吸収させるとすれば、私たちは全く客観的にその限界に気づくこととなります。もし、私たちが精神科学の方法、すなわち存在の主要な基盤へと貫き至るという目的を持って今日の精神生活のより深い水準から導かれるところの方法との関連で神秘主義を評価するならば、その上にさらなる光が投げかけられます。もし、ある主題がその考え方の微妙さゆえに理解し難いものになっているならば、それを理解する最良の方法とは、しばしばそれを何らかの関連する主題と比較することです。

皆さんは、この連続講義の中で、高次の世界へと上昇する道について何回も聞きました。ある意味で、それは三重の道なのです。私たちは外的な道について、それから中世の神秘家によって取られた内的な道について記述し、後者についてはその限界を明確にしたのでした。今、私たちは精神科学もしくは精神的な探求の適正な道と呼ばれ得るものへと向かうことにしましょう。

私たちは既に、この認識の道がそれを学ぶ人に対し、感覚世界の精神的な基礎に、したがって多元論に導く外的な道も、あるいはその人自身の魂のより深い基盤、そして最終的には世界の神秘的な統一へと導く内的な道も、どちらも取ることを要求しない、ということを見てきました。精神科学は、すぐ手の届くところにある知識によって開かれるこれらの道だけに人間が従わざるを得ないというわけではなく、彼には隠されたまま眠っている認識能力があり、それらから出発することにより、今述べられたようなふたつの道以外の道を見出すことができる、と語ります。

これらふたつの道のいずれかに従う人は感覚世界のヴェールを貫き、存在の根底へと至ることを求め、あるいはまた外的な印象を消し去り、内的な閃光が輝き出るようにさせるかも知れません。しかし、その人

はその人が既にそうであるところのままに、そしてそのようになっている状態のままに留まります。ところが、精神科学における基本は、人間が、既に存在している認識能力とともに、今日そうであるような状態に留まる必要はないということです。人間はちょうど彼が今日の段階に進化してきたように現在彼が有している認識能力よりも高次の能力を適切な方法により発達させることができるのです。

もし、この方法を神秘主義的な認識様式と比較するならば、私たちは次のように言わなければなりません。もし、私たちが外的な印象を取り去るならば、私たちは内的な閃光を見出し、それ以外のものすべてが消し去られたとき、それがいかに輝くかを見るであろう。しかし私たちはそれでも既にそこにあるものを引き寄せているに過ぎないのだ、と。精神科学はそれでは満足しません。それは閃光に至るのですが、そこで立ち止まりません。それは小さな閃光をもっと強い光に変える方法を発達させることを求めます。私たちは外的な道も内的な道も取ることができるのですが、新しい認識能力を発達させるべきである限り、どちらの道も直ちに取ることはないのです。精神科学的探求の現代的な形態は内的な認識能力を内的な道と外的な道が統合されるというような仕方発達させる点で、中世の神秘主義からも、多元論からも、そして古い秘儀の教えからも区別されます。こうして私たちはいずれの目的地にも等しく導くような道に従うのです。

このことが可能なのは精神科学の方法による高次の能力の発達が人間を認識における三つの段階へと導くからです。通常の認識から進み出て、それを越えていくところの最初の段階はイマジネーションと呼ばれます。第二の段階は言葉の真の意味でインスピレーションと呼ばれます。最初の段階はどのようにして達成され、より高次の能力が生じるために、魂の中で何が成し遂げられるのでしょうか？それらがどのように発達させられるかというその方法が皆さんに示すのは、いかにこの道において多元論と神秘主義が超越されるかです。イマジネーションもしくはイマジネーション的な認識を理解するために最も役立つ例については既に一度ならず触れられました。それは精神科学者が自分に適用する方法の中から引用されます。それは多くのそのような方法の内のひとつであり、師と弟子の間で交わされる会話の形で最もよく表現されます。

弟子をイマジネーションへと導くところの高次の能力に向けて教育しようとする師は次のように言うでしょう。「植物を見よ。それは土から生え出て、葉から葉へと展開し、花に至る。それをお前の前に立っているような人間と比較せよ。人間は植物以上の何かを有している。何故なら、彼の思考と感情と感覚の中に世界が照らし出されるからである。すなわち、彼は人間的な意識を有していることにおいて、植物を超越している。しかし、彼はこの意識を購うため、彼を錯誤と不正と悪徳に導くであろう熱情、衝動そして欲望を自分の内に吸収しなければならなかったのだ。植物はその自然法則にしたがって成長する。それはその存在をこれらの法則にしたがって展開しながら、純粋な存在としてその緑の樹液とともに我々の前に立つ。もし我々が幻想に耽るのでなければ、我々はそれを正しい道から逸らせるであろういかなる欲望や熱情や衝動をもそれに帰すことはできない。もし今、我々が人間を貫いて循環するような血を、すなわち人間意識の、あるいは人間自我の外的な表現であるところの血を観察し、それを植物に浸透するみずみずしい葉緑素に満ちた樹液と比較するならば、我々はこの脈打ちながら流れる血がより高い段階の意識へと人間が上昇したことの表現であるのと同じくらい、彼を墮落させる熱情と衝動の表現であることに気づくであろう。」

「それから」 - と、師は続けるでしょう - 「人間がさらに発達し、彼の自我を通して、錯誤、悪徳、醜悪さや彼を悪徳へと引きずり下ろそうとするあらゆるものを克服するとともに、彼の熱情や情愛を純化し、洗練すると想像しなさい。人間が追い求める理想、つまり彼の血が、もはやいかなる熱情の表現でもなく、単に彼が彼を引きずり下ろすかも知れないすべてのものを内的に支配していることの表現にすぎなくなる時実現されるような理想を思い描きなさい。彼の赤い血はそのとき、赤い薔薇の中で変化した緑の樹液に比較されるであろう。ちょうど薔薇が植物の樹液をその本当の純粋性において私たちに示すように、赤い人間の血は、それが純化され、洗練されたとき、人間を引きずり下ろすかも知れないあらゆるものを彼が支配するならば、彼がどのようになるかを、ただし植物の中で達成されたよりもより高次の段階において示すことができるのだ。」

これらは師が弟子の心と魂の中に呼び起こすことができる感情やイメージです。もし弟子が乾いた棒きれでないならば、もし彼がこの比較によって象徴的に示される秘密全体に彼の感情をもって参入することができるならば、彼は魂をかき立てられ、その精神的な視野の前に象徴的な像として現れるものを経験す

るでしょう。それは薔薇十字の像、すなわち低次の人間本性の内で抹殺されたものを象徴する黒い十字架と、純化され、洗練されたことによって彼のより高次の魂の本性を純粹に表現するようになった赤い血を表す薔薇かも知れません。このように、赤い薔薇の花冠を架けられた黒い十字架はこの師と弟子の間の会話において魂が経験するところのものを象徴的に要約しているのです。

もし弟子が薔薇十字を彼にとっての真の象徴となすような感情とイメージに対して彼の魂を開いているならば、つまり、彼が単に薔薇十字を彼の内的な視野の前に置いたと主張するだけでなく、その本質に関する高い次元での経験に向かって苦悶の内に勝ち進んでいたとするならば、彼はこの像や同様の像が単に小さな閃光ではなく、世界に対する新しい見方を彼に可能にするところの新しい認識の力といったようなものを彼の魂の中に呼び起こす、ということを知るようになります。このように、彼は以前の彼に留まっているのではなく、さらなる発達段階へと彼の魂を上昇させたのです。そして、もし彼がこのことを何度でも行うならば、彼は、最終的には、目にとまる以上のものが外的な世界の中にはあるということを彼に示すところのイマジネーションに到達するでしょう。

さて、このような認識方法がどのようにして存在するようになったのかを見ることにしましょう。私たちは自分に次のように言ったのではなかったでしょうか？私たちは外的な道を取ろう、そして事物の根底を求めよう、と。私たちは外なる世界へと乗り出すのですが、事物の基礎あるいは分子や原子を求めたりはしません。つまり、私たちは外的な世界が直接に私たちの前に置くところのものに関わることをせず、それから何かを留保するのです。世界に木がなかったとすれば、魂の中に黒い十字架が生じることはできなかったでしょう。そして、その魂が周囲の世界から赤い薔薇の印象を受け取っていなかったとすれば、それを思い浮かべることができなかったでしょう。ですから、私たちは、神秘家が言うように、あらゆる外的なものを忘れ去り、完全に自分の注意を外的な世界から逸らした、とすることはできません。私たちは外的な世界に従い、それだけが与えることができるものを取り入れます。しかし、私たちはそれを、ただそれがやって来るままに取り入れるものではありません。何故なら、薔薇十字が自然の中に見出されるということはないからです。では、どのようにして外的世界から取り出された薔薇と木が結びつけられて象徴的な像になったのでしょうか？それは私たち自身の魂の働きだったのです。私たちは、私たちが私たち自身を外的世界に、しかも単にそれを眺めながらではなく、それに心を奪われながら捧げるときに私たちのところにやって来るところの経験や、植物と発展していく人間とを比較することによって私たちが学ぶことができるところのものすべてを内的で神秘的な経験にしたのです。けれども、神秘家がするように、私たちの経験を直ちに自分のものにすることはありませんでした。私たちはそれを外的世界に捧げ、そして、世界が外的に、魂が内的に与えることができるものの助けを借りて、外的な神秘的な生活と内的なそれがその中で溶け合うような象徴的な像を作り上げるのです。その像は直接的には外的な世界にも内的な世界にも導くことはなく、力として働くというような仕方、私たちの前に立ちます。もし私たちが瞑想の中で私たちの魂の前にそれを置いたら、それは新しい精神的な目を開きます。そしてそのとき、私たちは以前には外的な世界にも内的な世界にも見出すことができなかった精神的世界を見ることができます。そのとき、外的世界の根底に横たわり、今やイマジネーション的な認識を通して経験することができるものが、私たち自身の内的な存在の中に見出すことができるものと同じである、ということ私たちが見定めることができるのです。

さて、もし私たちがインスピレーションの段階へと上昇するならば、私たちは私たちの象徴的な像の内容を脱ぎ捨てなければなりません。このことは内的な道を取る神秘家が辿る経過にきわめて似たところのものに関連があります。私たちは薔薇と十字架を忘れ去り、その像全体を私たちの魂の目の前から消し去らなければなりません。これはいかに困難なことであってもなされなければならないのです。私たちの魂は植物と人間との象徴的な比較を私たちの前に内的に呼び出すために自らを奮い立たせなければなりません。今や、私たちは私たちの注意をこの活動に、つまり人間の内の克服されるべきものの象徴としての黒い十字架のイメージを呼び出すために魂が行わなければならないことに集中しなければなりません。私たちが、この活動を通しての魂的経験の中で、私たち自身を深めるとき、私たちはインスピレーションあるいはインスピレーション的な認識へと至るのです。

この新しい能力の目覚めは私たちの内的な存在の中に小さな閃光の出現をもたらすばかりではありません。私たちはそれが認識の強力な力として輝き出すのを見るのです。そして私たちは、それを通して私たちの内的な存在に密接に関係しているにもかかわらず、それからは完全に独立しているものとして自らを

現すところの何かを経験します。と申しますのも、私たちは私たちの魂的生活が内的な過程であるというだけでなく、何か外的なものに対してもいかに自らを働かせるかを見てきたからです。ですから、ここには神秘主義の残滓としての私たちの内的な存在についての知識があるのですが、それは外なる世界についての知識でもあるのです。

さて、私たちは神秘家の仕事とは反対の仕事へとやって来ました。私たちがなすべきことは通常自然科学が行うところのものに似た何かです。つまり、私たちは外的な世界の中に出ていかなければなりません。これは困難なことです、インテュイションあるいはインテュイシヨンの段階に上昇するためには不可欠なのです。

私たちの仕事は今や私たちの注意を私たち自身の活動から逸らすということ、つまり、私たちの内的な視野の前に薔薇十字をもたらすために私たちが行ったことを忘れるということです。もし、私たちが忍耐強く、そしてその訓練を十分長く、しかも正しいやり方で遂行するならば、私たち自身の内的な経験とは全く関係がなく、いかなる主観的な色合いも持たないにもかかわらず、その客観的なあり方によって、人間存在の中心点、すなわち自我と同族であることを示しているのが確認されるような何かが残る、ということが分かるでしょう。こうして、インテュイシヨンの段階に至るために、私たちは私たち自身から出ていくのですが、それでも私たちの内的な存在と非常に密接に関係するところの何かへとやって来るのです。こうして、私たちは私たち自身の内的な経験から精神的な経験へと上昇するのですが、これは私たち自身の内部ではなく、外的世界の中で経験されます。このように、私たちはイマジネーション、インスピレーションそしてインテュイションを通過していくところの精神科学的な道の途上で、多元論が有する影の部分と通常的神秘主義が有する影の部分の両方を克服します。

私たちは今や、神秘主義とは何か？という問いに答えることができます。それは、人間の魂がそれ自身の内的な存在の中に自らを沈潜させることを通して、存在の神祕・精神的な源泉を見出そうとするその試みなのです。基本的には、精神科学的な認識もまたこの神秘主義的な道を取らなければならないのですが、それは最初にまず準備が必要であり、未成熟なまま乗り出すべきではない、ということをよく知っています。ですから、神秘主義とは人間の魂の中にある正当な衝動に発し、原則的には完全に正当化されるとはいえ、もしその魂がまず最初にイマジネーション的な認識において進歩することを求めなかったならば、あまりに早く取りかかれた企てなのです。もし、私たちが神秘主義によって私たちの通常の生活を深化させようとするならば、私たちは私たち自身を私たち自身から十分に自由にし、独立させることができないことから、私たちの個人的な色合いに染められていない世界像を形成することができない、という危険があるのです。私たちは、インスピレーションの段階へと上昇するとき、私たちの内的な存在を何らかの外的世界から取られてきたものに注ぎ出します。そしてそのとき、私たちは神秘家となる権利を獲得します。ですから、すべての神秘主義は人間の発達における適切な段階で取りかかるべきものなのです。もし私たちがそのための準備ができる前に神秘主義的な知識を達成しようとするならば、それは害があるのです。

したがって、精神科学は正当な神秘主義の中に、精神科学的な探求の真の目的と意図を私たちに理解できるようにさせるところの段階を認めることができます。この点で、献身的な神秘家の研究から私たちが学ぶことができるほど多くのことをそれから学ぶことができるようなものはほとんどないのです。精神科学者が神秘主義の中に何らかの正当化されるべきものを認めるからといって、彼がさらなる進歩の必要性を否定していると考えべきではありません。神秘主義が正当化されるのは、それが一定の発達段階にまで引き上げられ、そのためその方法が単に主観的な結果を産み出すのではなく、精神世界に関する真実に対して有効な表現を与えるときだけなのです。

神秘主義的な方法に未熟なまま没頭することによって引き起こされる危険については多くを語る必要はないでしょう。それには、神秘家はその内的な存在を外的世界の中へと成長させるというような仕方で、彼自身の準備ができる前に人間の魂の深みへと降りていくことが含まれます。そのとき、彼は外的世界に対してしばしば自分自身を閉ざしがちになるのですが、これは基本的には単に洗練され、隠された形のエゴイズムなのです。このことがよく当てはまるのは、外的世界に背を向け、そしてこの黄金の気分がその内的な生活に浸透するとき、その魂の中に溢れるあの有頂天、意気軒昂、解放の感情に耽る神秘家です。このエゴイズムが克服され得るのは、自我が自らを外部に手渡し、その活動を象徴の形成によって外的世界の中に流れ込まざるを得ないときです。こうして、イマジネーション的な象徴主義がエゴイズムとは無

縁の真実の表現へと導くのです。神秘家はその発達の過程で、あまりに早く知識を追い求めることによって引き起こされる危険とは、常軌を逸した人、あるいは洗練されたエゴイストになるということなのです。神秘主義は正当化されます。そして、アンジェラス・シレジウスが次のように言うのは正しいのです。あなたが神の優越の中で、あなた自身を超越するなら、

その時、あなたの中で上昇が支配するだろう！

人間が、その魂を発達させることによって、自分自身の内的な存在に至り、そればかりではなく、外的世界の下に横たわる精神の王国にも到達する、というのは本当です。しかし、彼は十分な熱心さをもって、彼自身を超越するという仕事にかからなければなりません。そしてこのことを、正に今あるような自分自身の中で単にくよくよ考えることと混同するべきではありません。彼はアンジェラス・シレジウスの言葉を最初の行、二番目の行ともに深刻に受け取らなければなりません。もし、私たちが神の顕現の何らかの側面にしり込みするならば、私たちはこのことに失敗するでしょう。すなわち、私たちは私たちが外的世界からの顕現として私たちの中に流れ込むものすべてに私たちの内的な存在を捧げることができるときにだけ、神の統治を許すのです。もし、この考え方が私たちの精神科学的な認識と関係づけられるならば、私たちは正しい意味で第二の路線を取っていることになります。私たちは、私たちの中で、内的世界と外的世界の神的・精神的な基盤による統治を許すのです。そして私たちは、そのときにだけ、「天国への道」にあることを望むことができます。これは、私たちが私たち自身の内的世界や外的世界の色合いに染められていない精神の領域、つまり、私たちの上に輝く無限の星の世界、地球を包む大気、生い茂る緑の植物、海に流れ込む川と同じ基盤を有する領域にやって来るということを意味しています。そしてその一方で、その同じ神的・精神的な要素は私たちの思考、感情、そして意志の中にも生きており、私たちの内的及び外的な世界に浸透しているのです。

これらの例は、アンジェラス・シレジウスが語ったような格言はそれを読むだけでは不十分である、ということを示すでしょう。つまり、私たちは、そこで初めてそれが真に理解できるようになるところの正しい段階においてそれを取り上げなければならないのです。私たちはそのとき、神秘主義が、その有している正しい核のゆえに、私たちを、私たちが徐々に精神的な領域をのぞき見ることを学ぶことができるほどに成熟しているであろう地点へと本当に導くことができ、そして、アンジェラス・シレジウスの美しい言葉の中に見出され得るものを私たちにとって最高の意味で現実のものにすることができる、ということを理解するでしょう。

あなたがあなた自身をあなた自身の上に引き上げ、世界の神的・精神的な基盤があなたの中で統治するのを許すとき、あなたは存在の神的・精神的な源泉へと続く天国の道を歩んでいます。

第4講「祈りの本性」

(1910年2月17日)

神秘主義に関する講義の中で、私たちはマイスター・エックハルトからアンジェラス・シレジウスに至る中世の神秘主義において現れたところの内的深化に関する特別な形態についてお話ししました。その特徴は、神秘家が外的世界からやって来る経験のすべてから彼自身を自由にし、独立させることを求める、ということにあります。彼は、通常の生活に関係するあらゆるものが消し去られ、魂がそれ自身の中に引きこもるとき、それでも、それはいわばそれ自身の世界をその中に有している、ということに彼に明らかにするであろう経験へと押し進もうとするのです。この世界はいつでもそこにあるのですが、外的な経験が人間をあまりにも力強く照らし、そのため、大部分の人々が決してそれに気づかないほど弱い光のように見えるのです。このため、神秘家はしばしばこれを小さな閃光と呼びます。けれども彼はそれを存在の源泉とその根底を照らし出す力強い炎へと燃え上がらせることができる、言い換えれば、それは人をして彼自身の魂の道を通り、彼の起源についての認識に導くと確信しているのですが、それは正に「神の認識」と呼ばれ得るものなのです。

私たちは、同じ講義の中で、いかに中世の神秘家たちがその小さな閃光を、その本性は不変のまま、自然に成長するべきものと考えていたかを観察しました。これとは反対に、現代の精神的な探求においては、これらの内的な魂の力を意識的なコントロールの下で発達させることによって、イマジネーション、インスピレーション、インテュイションと呼ばれるところのより高次の形態を有する認識へと上昇させることが要求される、ということを強調しました。ですから、この内的な献身がそれに向けられる中世の神秘主義は、真の精神的な探求への一種の第一段階として私たちの前に現れるのです。もし、私たちが、私たち自身をマイスター・エックハルトの内的な熱情の中に沈めることができるならば、もし、この神秘主義的な献身がヨハネス・タウラーに与えた精神的な知識の測りがたい力を認めるとすれば、もし、ヴァレンチン・ワイゲルやヤーコブ・ベーメがこの物理的な献身を通して（とはいえ、彼らは明らかにそれ以上に進んでいたのですが）達成されるものすべてによって、いかに深く存在の秘密へと導かれたかを認めるならば、もし、アンジェラス・シレジウスが、いかにこのおなじ献身を通して、精神的な世界秩序に関する一般法則への開明的な洞察を獲得できたばかりではなく、世界の秘密に対し、その著作の中で、心温まるような美しい表現を与えることができたかを理解するならば、もし、このすべてを心に留めるならば、私たちは、この中世の神秘主義の中に潜む力と深み、そしてそれが精神科学的な道を自ら辿ることを望むすべての人に与えることができる無限の手助けを実感することになるでしょう。このように、中世の神秘主義は、特に前回の講義の光に照らされたとき、精神科学的な探求のためのすばらしく偉大な準備のための学校と見なされ得るものなのです。そして、そうではないということがあり得るのでしょうか？ 結局のところ、精神科学者の目的とは、その小さな閃光を彼自身の内的な力を通して発達させるということなのです。異なるのは、神秘家が、魂の安らぎの中で、その小さな閃光に彼ら自身を捧げることができ、そして、それが、それ自身の調和の中で、ますます明るく輝き出さるだろうと信じていたのに対し、精神科学者は、その閃光を明るい炎へと点火するするためには、私たちの意志に仕えさせるために世界の叡知によってそこに置かれるところの私たちの能力と力を使用しなければならないと確信している、という点だけなのです。もし、そのとき、その神秘的な心の炎が精神科学のためのよい準備となるのであるならば、私たちは、今度は、神秘的な献身のための準備となるところの、真の意味で祈りと呼ばれ得る魂の活動を有することになるのです。ちょうど神秘家が、たとえ無意識的にではあっても、彼の魂をそれに向けて訓練することによって、内的な献身に到達することができるように、もし、私たちが物理的な瞑想に向かう同様の道に沿って歩みを進めたいと望むならば、私たちは、真の祈りの中に、ひとつの準備段階を求めることができるのです。

ここ何世紀かにわたって、祈りの本性は、あれこれの精神運動によって、実に様々な方法で誤解されてきました。そして、それに関する真の理解を獲得することは簡単ではないかも知れませんが、もし、これらの世紀が、特に利己的な精神的潮流が幅広い人々の集団を捉えたという点で特徴づけられる、ということをおぼえれば、私たちは、祈りが利己的な望みや欲望のレベルにまで引きずり下ろされたのは驚く

べきことではない、ということを見出すでしょう。そして、祈りは、それが何らかの形のエゴイズムに浸透されているときほどひどく誤解されることはほとんどない、ということをお願いしなければなりません。今回の講義では、もっぱら、いかなる宗派からも、あるいはその他の影響からも自由な精神科学という光の下に、祈りについて探求してみることにしましょう。

私たちは、最初のアプローチとして、次のように言うことができるかも知れません。神秘家は、彼の神秘的な献身によってどこまでも明るく輝くようにさせられるであろうある種の閃光が彼の魂の中に見出されるはずである、と考えており、祈りとはその閃光を生じさせるために意図されたものである、と。そして、祈りとは、それがいかなる前提から出てきたものであれ、正に、その魂をかきたて、徐々にその小さな閃光を、つまり、もし、それがそこにあればですが、そのきらめきながらも隠された閃光を見出させることによって、あるいはそれを点火させることによってこそ、その有効性を証明するものなのです。

もし、私たちが祈りの必要性とその本性を探求すべきであるならば、私たちは、以前の講義でも引用した古いギリシャの聖人、ヘラクリトスの「あなたがいかなる道を探求したとしても、魂の境を見出すことは決してできないであろう、魂の存在とはそれほど包括的なものなのだ。」という、普遍的な妥当性をもつ言葉を心に留めながら、その魂についての深い記述へと入っていかねばなりません。そして、私たちは、最初、祈りの中に、魂の内的な秘密を探し求めるだけなのですが、祈りによってかき立てられる親密な感情は、最も素朴な人に対してさえ、魂的生活の無限の広がりについて、何らかの示唆を与えることができるのです。私たちは、魂が生きた進化の過程にたずさわっている、ということに気づかなければなりません。それは、単に過去からやって来るだけでなく、絶えず未来に向けて旅しています。過去からの影響が現在の瞬間瞬間へと展開するように、ある意味で、未来からの影響もそうなのです。

魂の生活を深く洞察する人は誰でも、これらふたつの流れ、過去からの流れと未来からの流れが絶えずそこで出会っている、ということを理解するでしょう。私たちが過去からの影響を受けているというのは明らかな事実です。昨日の活力あるいは怠惰が今日の私たちに何らかの影響を持つ、ということ誰が否定できるでしょうか？けれども、私たちは未来の現実性もまた否定すべきではありません。と申しますのも、私たちは、未来の出来事が、それがまだ生起していないにもかかわらず、魂の中に侵入するのを観察することができるからです。結局のところ、明日起こりそうな何かに対する恐れや心配とは、一種の未来に関する感情や知覚ではないでしょうか？魂が恐れや心配を経験するとき、それがその感情という現実によって示しているのは、それが、過去だけではなく、未来からそれに向けて急ぎ来るところの何かをも、非常に生き生きとした方法で計算に入れている、ということなのです。もちろん、これらは単純な例ですが、魂を探求する人は誰であれ、未来はまだ存在していないゆえに現在にその影響があるはずがないという抽象的な論理に矛盾するところの無数の例を見出すであろう、ということを示唆するには十分でしょう。このように、ふたつの流れ、ひとつは未来からの、もうひとつは過去からの流れが、魂の中で出会い（自分を観察する人ならば、誰がこのことを否定するのでしょうか？）、そして、ふたつの川の合流点に比べられるような一種の渦巻きを形成するのです。もっと詳しい観察は、過去の経験から私たちに残された印象が、そして、私たちはその印象の中でそれらの経験を処理してきたのですが、現在あるような魂を形作ってきた、ということを示します。私たちは、私たちが過去に行い、感じ、そして考えたことの名残を私たちの内に担っているのです。私たちがこれらの過去の経験を、とりわけ、私たちがその中で活動的な役割を演じた経験を振り返ってみるとき、私たちは、非常にしばしば、私たち自身の評価を強いられることとなります。私たちは、過去に生起したある行いに対し、私たちの現在の立場から同意しないというような、私たちの過去における行いのいくつかについて、恥じらいをもって振り返ることさえできるというような段階に到達しているのです。

もし、このようにして、私たちの過去を私たちの現在と比べてみるならば、私たちは、私たちが私たち自身の力によって、私たち自身から創り出したところのいかなるものよりも、はるかに豊かで、はるかに重要な何かが私たちの内にある、ということを感じるようになるでしょう。もし、私たちの意識的な自我を超えて広がるその何かがなかったとすれば、私たちは、私たち自身を非難したり、あるいは、私たち自身を知ることさえできなかつたでしょう。ですから、私たちは、私たちが、過去において、私たち自身を形成するために用いてきたところのいかなるものよりも偉大なものを、私たちの内に有しているに違いないのです。もし、私たちがこの意識を感情にまで変化させるならば、私たちは、私たちの過去の行いにおけるあらゆること、つまり、記憶が私たちの前にはっきりともたらすことができるところの経験を振り返

ることができるようになり、そして、これらの経験を何かより偉大なものと、つまり、私たちの魂の中にあるところの私たちをして私たち自身に直面させるように、そして、現在の立場から私たち自身を評価させるように導く何かと比較することができるようになるでしょう。要するに、過去から私たちの中に流れ込むものを観察するとき、私たちは、私たち自身を超えて広がる何かを私たちの内に有していると感じるのです。これに親しむことが、私たちの内の神についての感情、つまり、私たちのすべての意志の力よりも偉大な何か私たちにひそんでいるという感情への最初の目覚めなのです。こうして、私たちは、私たちの限定された自我を超え、神的・精神的な自我に向かうように導かれます。このことが過去を凝視することから生じます。そして、それは知覚的な感情へと変化しているのです。

では、未来からの流れは、やはり知覚的な感情という意味で、私たちに何を語るのでしょうか？それはより明確で、もっと強い言葉で私たちに語りかけます。それは、私たちが、ここでは、恐れや心配、希望や楽しみといった感情に直接関わっているからです。と申しますのも、それに関する出来事はまだ起こっておらず、ただそれらに結びついた感情だけが魂の中に打ち込んで来ているだけだからです。そして、私たちは、この未来からの流れが、私たちの期待とは異なる影響や責任をもたらすかも知れない、ということを知っています。もし、私たちが、私たち自身を、それがいかなる経験であろうとも、未来の暗い子宮から確実に私たちに向かってやって来るものに正しく関係づけることができるならば、私たちは、いかにそれが絶えず魂を刺激しているか、ということを理解するでしょう。私たちは、魂が、未来においては、いかに現在よりもはるかに豊かに、はるかに広い範囲を見通すようになるかということ、つまり、私たちは、既に、近づきつつある未来に関係づけられており、私たちの魂は、それが何をもちたらずにしても、それに調和していなければならない、ということを感じるのです。

もし、私たちが、このようにして、いかに過去と未来とが現在へと流れ込んでいるかを観察するならば、いかに魂の生活がそれ自身を超えて成長するかを理解します。魂が過去を振り返るに際して、現在へと働きかける過去からの力、魂自身よりも大きな力を意識するとき、この認識は、それが評価であったとしても、後悔や恥じらいをもって振り返るにしても、神的なものに対する尊敬の念をその中に引き起こすのです。そして、この尊敬の念、つまり、私たちが私たちに働きかけているのを感じながらも、私たちが意識的に把握することができる以上の尊敬の念がひとつの祈りの形式（と申しますのも、ふたつの形式があるからですが）を引き起こし、それが魂を神との親密な関係へともちたらずのです。と申しますのも、もし、魂が、最も内的な平静の中で、過去によって引き起こされる感情に自らを捧げるならば、それは、今や、それが使ってこなかった力、自我をもって浸透しないままになっていた力を現実のものにすることを欲し始めるであろうからです。そのとき、魂は自らに次のように言うことができます。もし、この力が私の内にあるとすれば、それは今や別のものになっていなければならない。私が希求する神的な要素は私の内的な生活に属してはいなかった。私が私自身を、今日私が肯定できるであろうような何かにすることができなかったのはそのためなのだ、と。このことを認識できるようになった魂は次のように続けるでしょう。私は、どうすれば、私のすべての活動や経験の中に、私がそれに気づくことな生きていたところの見知らぬものを、何故なら、私はそれを私の自我によって把握することができなかったからなのだが、私自身の中に引き込むことができるのだろうか？と。魂が、感情を通して、言葉あるいは考えを通して、この心の炎の中へともちたらずされるとき、私たちは過去に向けて祈りを捧げるのです。このことは、魂が「ひとつの」献身の道を通して、神的なものに近づこうとしていることを意味しています。

さて、今度は、見知らぬ未来からの流れとともにやって来る神的なもののきらめきについて見てみましょう。ここでは異なった心の炎が喚起されます。今まで見て来ましたが、私たちが過去を振り返るときには、私たちは、私たちの内的な能力を発達させてこなかったということに気づきます。すなわち、私たちは、いかに私たちの欠点が、私たちの上に輝く神的な光に私たちが応えるのを妨げて来たかを見るのですが、この感情が、過去によって促されるところの献身の祈りへと私たちを導くのです。では、同様に、私たちが精神的なものへと上昇するのを制限するような欠点に気づかせてくれるところの影響であって、未来からやって来る影響とは何でしょうか？

それを知るには、私たちが不確かな未来に直面したとき、私たちの魂生活を悩ますところの恐れと不安の感情を思い出しさえすればよいのです。この状況において、魂に安心感を与えるものが何かあるのでしょうか？そうですね、それは、未来の暗闇の中から魂へとやって来るところの何らかのものに対する謙遜の感情とも呼べるものです。けれども、この感情が有効なのは、ただそれが祈りの性格を有しているとき

だけです。誤解を避けるために申し上げますが、私たちはあれこれの意味で謙遜と呼ばれ得るかも知れないところの何かを賛美しているわけではありません。私たちはその一定の形態、すなわち、未来がもたらすであろう何らかのものに対する謙遜について記述しているのです。不安と恐れをもって未来を見つめる人は誰でも、自分の発達を妨げ、彼の魂の力が自由に展開するのを妨害しているのです。不確かな未来に直面したとき、恐れと不安ほどこの発達を妨げるものは、実際、何もないのです。しかし、未来を甘受することの結果は、経験によってのみ評価され得ます。この謙遜とは何を意味しているのでしょうか？

それは、理想的には、自らに次のように言うことを意味しているでしょう。次の一時間、あるいは次の日が何をもたらそうとも、恐れや心配によってそれを変えることはできない。何故なら、それは、まだ見ぬものなのだから。したがって、私は完全な内的平穩、完全な心の平靜をもってそれを待ち受けることにしよう、と。活動的な力とエネルギーを損なうことなく、このように静かでリラックスした仕方未来に出会う人は誰でも、彼の魂の力を自由に、力強く発達させることができるでしょう。魂がこの迫りくる出来事に対する謙遜の感情に浸透されればされるほど、まるで障害が次から次と崩れ去るかのようです。

けれども、何らかの命令や、確固とした基礎を持たない気ままな決定によって、この感情が魂の中に呼び出されることはありません。それは、未来とそこで生じる叡知に満ちた経過に向けられる第二の祈りの形式の中から湧き出してくるのです。この神的な叡知に私たちを委ねるということは、私たちが、来るはずのものは来なければならない、それはひとつの方向、あるいは別の方向において良い影響を及ぼすに違いないのだという認識を伴うところの思考、感情そして衝動を何度でも呼び出す、ということの意味しています。この心の炎を呼び出すということ、そして、それに言葉、知覚、そして考えによる表現を与えるということが、祈りの第二の形式、献身的な甘受の祈りなのです。

祈りへの衝動はこれらの感情からやって来なければなりません。と申しますのも、それらの感情は、魂そのものの中に存在しており、基本的には、目前に迫るものから少しでも自らを上昇させる魂の中で、それを祈りに向けて導くものだからです。祈りの前提条件が整うのは、魂がその眼差しを移ろいゆく現在から過去、現在そして未来を包含するところの永遠なるものへと向けるときである、と言ってもよいでしょう。ゲーテがファウストに次のような偉大な言葉をメフィストフェレスに向けて語らせたのは、自らを現在から上昇させるということが、それほどまでに必要なことだったからです。

もし、急ぎ過ぎる現在という瞬間に

「拘泥する」ならば、私は叫ぶ、「お前の勝ちだ！」

これは次のことを意味しています。もし私が現在に生きることに満足するならば、

そのときには、お前は私を足かせにつなぐがよい、

私を消滅させるがよい、それが何ほどのことであろうか！

ここでは、次のように言うこともできるでしょう。ファウストが彼の同行者、メフィストフェレスの足かせから逃れるために乞うたのは、祈りの力を求めてである、と。

したがって、祈りの経験は、一方では、過去から現在までその歩を進めてきた狭量な自我を観察することへと私たちを導くとともに、私たちの中には、私たちが用いてきたよりもいかに遙かに多くのものがあるかをはっきりと示し、他方では、私たちを未来へと導き、これまで自我が把握することができたものに比べて、いかにもっと多くのものが未来から流れてくることができるかを私たちに示すのです。もし、私たちがこのことを理解するならば、私たちは、あらゆる祈りの中に、私たちに私たち自身を超えさせるところの力を見出すこととなります。祈りとは、現在そうであるような私たちの自我を超えることを求めるところの力を私たちの内に点火すること以外のものであり得るのでしょうか？そして、もし、自我がこの衝動に捉えられているならば、それはそれ自身を発達させる力を既に有しているのです。私たちが私たちの内に有しているのは、私たちが今まで用いてきたところのもの以上のものなのだ、ということを経験が私たちに教えているならば、祈りとは、神的なものの存在が私たちに満ちたことを求める、その神的なものに対する叫びなのです。私たちが、私たちの感情と知覚を通して、この認識へと至ったとき、私たちは祈りを、私たちの自我の発達を助ける力のひとつとして数えることができるようになります。

このことは未来へと向けられる祈りについても同様です。もし、私たちが、近づきつつある未来に関して、恐れと不安の中に生きるならば、私たちは祈りがもたらすことができる謙遜の態度に欠けているのです。私たちは、私たちの運命が世界の叡知によって秩序づけられている、ということに気づき損ないます。しかし、もし、私たちが謙遜と献身をもって未来を迎えたとすれば、私たちは、実り多い希望の中で、それ

に近づくこととなります。私たちを小さくするように見えるかも知れないところの謙遜が、魂を豊かにし、私たちがより高い発達段階に運び上げる強力な力になる、というのはそういうことなのです。

私たちは、いかなる外的な結果も祈りに期待する必要はありません。何故なら、私たちは、祈りを通して、私たちの魂に、光と熱の源泉を植え付けたのだということを知っているからです。それは、未来との関係では、魂を自由にし、未来の暗い子宮の中から現れ出であろういかなるものをも受容できるように配置するがゆえに光の源泉なのであり、そして、確かに、過去においては、私たちは、私たちの自我の中で、神的な要素を突りへともたすことができなかつたけれども、今や、それが私たちの内で有効な力となるように、私たちの感情をそれで満たしたのだ、ということ私たちに気づかせてくれるがゆえに熱の源泉なのです。過去を振り返ることからわき上がってくるところの祈りが、祈りをその真の意味において理解するすべての人によって語られるあの熱を生じさせるのです。そして、内的な光がやって来るのは、未来に向けた謙遜の祈りを理解する人たちのところへなのです。

この観点からすれば、最も偉大な神秘家達が、内的な瞑想を通して達成しようと望んだことに対する最良の準備を、彼らの祈りへの没頭の中に見出した、というのは驚くにはあたらないことのように見えてしょう。彼らは、彼らの内の小さな閃光が明るく輝くようになる地点にまで彼らの魂を導きました。真の祈りが与えることができるあのすばらしい親密さの感情への道が開けるのは、正に、過去への参入を通してなのです。外的世界に関する気遣いは、ちょうど、過去において、それが私たちの内のより力強い要素、すなわち自分自身を意識した自我の出現を妨げたように、私たちが私たち自身から疎遠にします。私たちは外的な印象や様々な外的生活からの要請に明け暮れました。それらは、私たちがバラバラに引き裂き、静かさの中で私たち自身を回想することができないようにします。これが、私たちの内にある力強い神的な力の展開を妨げたものなのです。しかし、もし今、私たちが、親密な祈りの中で、それを展開させるならば、私たちは、外的世界の破壊的な影響に曝される、ということがなくなるでしょう。私たちは、私たちが内的な祝福で満たし、真に神的なものと呼ばれ得るところのあのすばらしい内的な熱を感じることでしょう。外的なものの中で自己を失いつつある魂は、それらを経験することを通して、自らを奮い立たせることができるようになるのです。祈りの間、私たちは「神」の感情の中で暖められますが、私たちは、単に熱を感じるだけではなく、心の底から、私たち自身の中で生きるのです。

他方、私たちが外的世界の事物に向かうとき、私たちはいつでも、それらが未来の暗い子宮と呼ばれてきたところのものに包含されているのを見出します。詳細に観察は、私たちが外的世界で出会うところのあらゆるものの中には、いつでも未来のヒントがある、ということを示します。私たちが、私たちに降りかかってくるものに関して、恐れや不安を感じる時にはいつでも、何かが私たちが遠くへ押しやり、外的世界は、貫き難いヴェールのように、私たちの前に立ちはだかります。もし、私たちが、未来から私たちのところへやって来るものが何であれ、それに対する献身的な謙遜の感情を発達させるならば、私たちは、あらゆる外的世界の事物に、この感情が生じさせるところの確信と希望をもって出会うことができる、ということを見出します。そして、そのとき、私たちは、すべての事物の中には、叡知の光が私たちにに向けて輝いているのだ、ということを知るのです。これができないとき、私たちは、私たちが行き当たるあらゆるものにおいて、私たちの感情の中に広がる闇に出会います。ですから、献身的な帰依の祈りの中で、私たちのところにやって来るのは、世界全体から光が輝き出ることに対する希望なのです。

もし、私たちが夜の闇に囲まれてどこかに立っていたとしますと、私たちは、打ち捨てられ、私たち自身の中に押し込められているように感じるでしょう。朝が光をもたらすとき、私たちは解放されたと感じるのですが、単に、私たちが自分自身から逃げ出すことを欲するかのようではなく、私たちが、今や、私たちの最良の望みや熱望を外的な世界にもたすことができるかのように感じるのです。同様に、私たちは、私たちが私たち自身から遠ざけるところの世界に対する自らの放棄が、私たちが私たち自身に結びつけるところの祈りの熱によって、いかに克服されるかを感じることができます。そして、この祈りの熱を謙遜の感情へと私たちがもたらすとき、それは光になります。そして、今や、私たちが、私たち自身から歩み出て、私たち自身を外的世界に結びつけ、それを眺めるとき、私たちは、もはや私たちがそれによって引き裂かれたり、疎遠にされたりしているのではなく、私たちの魂からその最良のものが流れ出し、それが、私たちが、外的世界から私たちの上に輝くところの光に結びつける、と感じるのです。

これらふたつの祈りの形式は、概念によってというよりも、イメージの中でよりよく表現されます。私たちは、例えば、旧約聖書にあるヤコブとその魂を震撼させる夜の試練についての物語に思いを馳せるこ

とができます。彼は、まるで私たち自身が世界の様々の圧力に曝され、そこでは、最初、魂が失われ、それを取り戻すことができないでいるかのような仕方で、私たちの前に現れます。私たち自身を見出そうとする努力が始まる時、それは、私たちの高次の自我と低次の自我の間の衝突を引き起こすのです。そのとき、私たちの感情は大きく波打つのですが、祈りは私たちが自分の道を歩み通すのを助け、ついには、ヤコブの物語の中であらかじめ示されているような瞬間、すなわち、昇る太陽が彼を照らすとき、夜中中続いた苦しみが解消され、調和がもたらされた、と告げられる瞬間がやって来るようにするのです。これは、実際、祈りが魂のために為すことができることなのです。

この光の中で見るとき、祈りはいかなる迷信からも自由です。何故なら、祈りは私たちの中の最良のものを取り出し、魂の中のひとつの力として直接に働くからです。こうして、祈りは、ちょうど神秘的な思索そのものが、精神的な探求として私たちに知られているもののための準備であるように、その神秘的な思索のための準備なのです。祈りについての私たちの議論は、私たちがここで何度もお話ししてきたことを例証するでしょう。つまり、もし、私たちが、神秘的な方法によって、私たち自身の中に、神的なもの、「神」を見出すことができると信じるならば、私たちは、間違いにつく間違いを繰り返すことになる、ということなのです。この間違いは、中世を通して、神秘家により、あるいは普通のキリスト者によってさえ、何度も繰り返されてきました。そのようなことが起こったのは、祈りの実践がエゴイズムによって浸透されるようになったからです。エゴイズムは、魂に対し、次のように言うように強いるのです。私はますます完全になるのだ、そして、私自身が完全になること以外は考えないようにするのだ、と。私たちは、間違っ指導された神智学の形態が、あらゆる外的なものから単に目をそむけさえすれば、私たちは私たちの中に「神」を見出すことができるのだ、と断言するとき、この利己的な願望の残響を聞くことができます。

私たちは、祈りにはふたつの形式があるのを見てきました。ひとつは内的な熱に導きます。未来に向かっての謙遜の感情に色づけられたもうひとつの祈りは世界へと導き、それによって開明と真の認識に導きます。祈りをこのように見る人であれば誰でも、通常の知的な方法によって獲得された知識は、別の種類のそれに比べると、不毛であることがすぐに分かります。祈りとは何かを知っている人は誰でも、魂を自らの中に取り戻すことに精通するでしょう。そして、そのとき、魂は、その思考を現在の瞬間から引き上げ、それらを過去と未来に捧げることによって、世界の破壊的な多元性から自らを自由にし、内的に集中するのです。もし、私たちがこの状態について知っているとするならば、私たちが有することができる最も繊細な思考と感情だけが魂の中にあるときには、多分、これらさえも消え去り、ただふたつの方向、すなわち、過去から自らを告げる「神」と、未来から自らを告げる「神」とを指し示す基本的な感情だけが残っているときには、もし、そのとき、私たちがこの感情の中に生きようになっているならば、あの偉大な瞬間がその魂に訪れ、魂が自らに次のように言うのが分かります。私は、私の利口者の思考が私の意識の中に創り出したあらゆるもの、私の感情と知覚がもたらしたあらゆるもの、そして、私の意志の力と私の教育が設定したすべての理想から目をそむけた、これらすべてを一掃したのだ。私は、私の最も高次の思考と感情に没頭し、そしてこれらさえ、私は今や消し去った。そして、既に述べたような基本的な感情だけを保持しているのだ、と。もし、私たちがこの段階に到達しているならば、これまで私たちには知られていなかった新しい感情が、私たちが純粋な目をもってそれを見るとき、自然の驚異が私たちの前に現れるのと同じ仕方で、魂の中に輝き込むのが分かります。私たちの知らない意志衝動と理想が魂の中にわき上がり、その基盤から、最も実り多い瞬間が生じるのです。

祈りが私たちの手近な能力を超えたところにある叡知を最良の意味で私たちに吹き込むことができる、というのはそういうことなのです。つまり、それは私たちがまだ達成していない感情や知覚の可能性を私たちに与えるのです。そして、もし、祈りが私たちの自己教育をさらに進めるならば、それは私たちがそこまではまだ上昇できないでいるところの意志の力を私たちに付与することができるのです。確かに、もし、私たちがこのすべてを成し遂げるべきであるならば、私たちは、まず、最も繊細な感情と衝動を私たちの魂の中に養成し、育む必要があるでしょう。そして、私たちは、ここでもまた、最も初期の時代における最も厳粛な機会に、人類に与えられたところの祈りに対して注意を促さなければなりません。

皆さんは、私の小冊子、「主の祈り」の中に、その中の七つの祈願が世界のすべての叡知を包含していることを説明する記述を見出されるでしょう。さて、皆さんは次のように言いたい気持ちになるかも知れません。この小冊子の中では、七つの祈願は、宇宙のより深い源泉を知るようになった人によってのみ理解

され得る、ということが告げられている。しかし、明らかに、素朴な人は、その祈りを繰り返すときにも、それらの深みを推し量ることはできないだろう、と。しかし、それができる必要はないのです。主の祈りが存在するようになるためには、包括的な世界の叡知が、人間と世界の最も深い秘密と呼ばれ得るものを言葉の中に定着させなければなりません。これが主の祈りの内容であるわけですから、それは、その深みを理解するというにはほど遠い人々のためにさえ、その言い回しについて記述するのです。実際、これが真の祈りの秘密なのです。それは、世界の叡知から引き出されなければならないのですが、だからこそ、それが理解されないときでさえ、効果的であり得るのです。私たちがそれを理解することができるようになるのは、私たちがより高次の段階に上昇するときです。そして、祈りと神秘主義はそのための準備なのです。祈りは、私たちにとって、神秘主義のための準備となり、神秘主義は瞑想と集中のための準備となります。そして、その地点から、私たちは精神科学の真の働きへと向かうのです。

祈りが真に効果的であるためには、私たちはそれを理解しなければならない、と言うならば、それは本当ではありません。誰が一本の花の叡知を理解するのでしょうか？にもかかわらず、私たちは皆、その中に喜びを見出すことができるのです。同様に、祈りの創造の中に、世界の叡知が入り込んでいるならば、その秘密が把握されなくても、それはその熱と光を魂の中に注ぎ込むことができるのです。しかし、それが叡知から創造されたのではないとすれば、それはこの力を有することはないでしょう。祈りの中の叡知がどれほど奥深いものであるかは、その効果によって示されるのです。

魂は、この力の影響下に、本当に自らを発達させることができるとはいえ、真の祈りは、私たちがいかなる発達段階に到達していても、私たちに与えるべき何かを持っている、ということもまた申し上げなければなりません。多分、祈りの言葉以上のことは何も知らないような、最も素朴な人であっても、その祈りが彼の魂に及ぼす影響を受け取ることができ、そして、彼を高めへと上昇させる力を呼び出すことができる、というのが祈りなのです。けれども、私たちがどんなに高い段階に達していたとしても、ひとつの祈りで終ることは決してありません。それは私たちをさらに高い段階へと絶えず上昇させるのです。そして、主の祈りは単に話すためのものではありません。それは神秘的な心の炎を呼び出すことができるとともに、より高次の瞑想と集中形式の主題であることができるのです。このことは他の多くの祈りについても言うことができるでしょう。

けれども、中世以降、何か前面に出てきました。それは、祈りの純粹さとそれに伴う心の状態を損なうところの一種のエゴイズムです。もし、私たちが祈りを、多くのキリスト者達が中世を通じて行い、そして、多分、今日でも行っているように、私たち自身の中に引きこもり、そして、私たち自身をより完全にするという目的だけをもって利用するならば、そして、もし、それが何であろうと、私たちが受け取っているであろう何らかの光をもって、私たちが私たちの周りの世界に目をやることに失敗するならば、そのとき、祈りは、私たちを世界から切り離し、私たちをその中のさまよい人であるかのように感じさせる、ということにのみ成功するでしょう。これは偽りの厭世主義や隠遁に関連して祈りを用いてきた人たちにしばしば起こったことです。これらの人々は、薔薇の意味で完全になりたいと望んだわけではありません。薔薇は庭に美しさを付与するために自らを飾るのですが、そうではなく、彼ら自身のために、彼ら自身の魂の内に祝福を見出すためにそうしたのです。

自分の魂の中に「神」を求め、自分の得たものを世界にもたらすことを拒否する人は誰でも、彼の拒絶が報復として自分に返ってくるのを見出すでしょう。そして、皆さんが、内的な熱を与える祈りだけを知っている聖人や神秘家の多くの著作の中で（スペインの神秘家、ミゲール・デ・モリノスの著作の中でさえ）出会うのは、魂が内的な祈りを通して完成を求め、自分が「神」であると考えるところのものに対する完全な帰依を求めるとき、それが経験するところのあらゆる種類の熱情や衝動、戦い、誘惑や荒々しい願望についての注目すべき記述です。もし、誰かが一方的な方法で「神」を見出し、精神世界に近づこうとするならば、もし、彼が彼の祈りに内的な熱に導く種類の献身だけをもち、光へと導くもうひとつの種類の献身をもちたらないならば、そのもうひとつの側が復讐するのです。もし、私が後悔と羞恥の感情をもって過去を振り返り、私の中には何か偉大なものがある、しかし、私はそれに十分な見通しを与えなかった、しかし今、私はそれを私に浸透させ、私を完全にするのだ、と自分に言うとするならば、ある意味で、正に完成の感情が生じます。しかし、魂の中に残る不完全さが抗力に変化し、その分よけいに激しく、誘惑や熱情の形で荒れ狂うのです。しかし、内的な熱と親密な献身の中で自らに集中した魂が、彼が露わにされるところのあらゆる働き、彼が光を求めて努力するあらゆる働きの中で、「神」を求めるやい

なや、魂はそれ自身から踏み出し、狭く、利己的な自我から目を逸らします。そして、熱情の嵐は静まります。神秘的な献身と瞑想にエゴイズムが入り込む余地を与えることがそれほど悪いことであるというのは、この理由によるのです。もし、私たちが「神」を見出すことを欲するとき、彼を単に私たち自身の内に留めておくためにだけそうするならば、それは、私たちの最も気高い努力の中に、不健康なエゴイズムが忍び込んだことを示しているのです。そのとき、そのエゴイズムは私たちに復讐するでしょう。私たちは、私たちの内に「神」を見出した後、私たちが内的に獲得したところのものを、私たちの思考と感情、私たちの意志と行いを通して、世界の中へと注ぎ出すときにのみ、癒されることになります。

今日、私たちは、しばしば、特に、間違っ理解された神智学の基盤から（そして、これに対する警告があまりにしばしば与えられるということは決してないのですが）、次のように告げられます。あなた方は外的世界の中に神秘的なものを見出すことはできない、何故なら、「神」はあなた方の内にあるのだから。あなた方は、ただ、あなた方の内的な生活への正しい道を取ればよいのだ。そうすれば、あなた方はそこに「神」を見出すだろう、と。私はある人物までもがそれを言うのを聞いたことがあります。彼は彼の聴衆に次のように言ってご機嫌を取るのを好んでいました。あなた方は、宇宙の偉大な秘密について何も学んだり経験したりする必要はありません。あなた方はあなた方自身の中を見るだけでよいのです。あなた方はそこに「神」を見すのですから、と！

私たちが真実に近づくことができるようになるためには、これと反対の観点が明確にされなければなりません。ある中世の思索家が内的な献身について言うべき正しいことがらを見出しましたが、それは、実際、その適用範囲内にある限り、正当なものです。私たちが決して忘れてはならないのは、不真実が最も害を及ぼすというわけではないということです。何故なら、魂はすぐにそれを検知するであろうからです。もっとずっと悪いのは、一定の条件下では真実であるけれども、間違っ適用された場合には、完全に偽りになるような陳述です。私たちは私たち自身の内に「神」を求めなければならない、というのは、ある意味で真実なのです。けれども、正にそれが真実であるがゆえに、もしもそれがその範囲内に留められないとすれば、それだけよけいに害があるのです。ある中世の思索家は次のように言いました。「それが自分の家の中に確かにあると分かっているのに、誰がその必要な道具をどこか家の外に探すだろうか？そんなことをするのは愚か者であろう。同様に、「神」についての認識を獲得するための装置が彼自身の魂の中にあると分かっているとき、それを外的世界の中に探すのも愚か者である。」彼が使っている言葉、道具あるいは装置に注意して下さい。自分の魂の中に探すべきは「神」自身ではないのです。「神」はある装置を使って探します。そして、少なくともそれは外的世界の中に見出されることはありません。それは魂の中に、真の祈りを通して、様々の段階がある神秘的な献身、瞑想そして集中を通して見出されなければならないのです。私たちはこの装置の助けを借りて世界の領域に近づかなければなりません。そのとき、私たちは至るところに「神」を見出すでしょう。何故なら、「神」は世界のすべての領域と存在のすべての段階に顕現するからです。このように、私たちはその装置を私たち自身の中に求め、そして、その助けを借りて、至るところに「神」を見出すことになるのです。

今日では、祈りの本性について、このような観察を行うことは一般的ではありません。一体全体（と人々は言います）私たちが何を願うにしても、祈りが何かを変えられるだろうか？世界の経過は必然の法則にしたがっており、私たちはそれを変えることはできませんが、もし、私たちが力を認めたいのであれば、私たちはそれを、それがあある場所で、探さなければなりません。今日、私たちは、祈りの力を人間の魂の中に求めました、そして、それがその魂の前進を助けるような何かである、ということを見出しました。そして、世界の中で働いているのは精神（想像上の、抽象的な精神ではなく、実際の活動的な精神）であり、人間の魂はその精神の領域に属している、ということを知っている人は誰でも、世界の中で働いているのは、変えることのできない法則に従う物質的な力だけではなく、精神的な存在たちもまたそこで働いている、ただ、彼らの活動は通常では見ることができないのだ、ということを知るでしょう。もし、私たちが私たちの精神生活を祈りを通して強化するならば、後は、その効果を待つだけです。つまり、それらは確かにやって来るでしょう。とはいえ、祈りの効果を外的世界において追求できるのは、まず、祈りの力を現実のものとして認めた人だけです。

このことを本当に認める人は、次のような実験を試みてもよいでしょう。祈りを退けていた十年間をずっと振り返り、そして、祈りの力を認めていた次の十年間を振り返るのです。それから、これらふたつの期間を比べてみるならば、祈りが魂の中に注ぎ込んだ力の影響によって、人生の経過がいかに変化

したかがすぐに分かるでしょう。力はその効果によって明らかにされます。力を呼び出すために何もなされないならば、その存在を否定するのは容易です。自分の中で、祈りの力を有効なものにしようと全くしてこなかった人が、どうして、それを否定することができるのでしょうか？もし、私たちが光を点火したり、求めたりすることを全くしてこなかったとすれば、私たちは光について知っているのだ、と考えることができるのでしょうか？私たちが、魂の中で、そして、魂を通して働く力について、その認識を学ぶことができるのは、それを利用することによってのみです。

私は、どんなに公平な議論をするにしても、祈りがより広い範囲で有効になるには、まだ期が熟していない、ということ認めないわけにはいきません。参加者すべての力が合流するような集団的な祈りの中には、高められた力と、そのため、高められた現実の強さがある、というような考えは、今日の思考の把握するところではないのです。ですから、祈りの内的本性に関しては、私たちは私たちの魂の前にもたらしたもので満足しなければなりません。そして、それで十分なのです。と申しますのも、そのことを理解する人は誰でもそのことを確かに見通すことができるのですが、今日では、祈りに対して、それほど容易に多くの異議が持ち出されるのです。

これらの様々な異議とはどのようなものでしょうか？例えば、仲間を助けるために力を行使する人間と、自らの中に静かに引きこもり、祈りを通して彼の魂の力に働きかける人間とを比べるとします。私たちは、確かに、最初の人物に比べて、二番目の人物はより怠け者であると見なすに違いありません。私が、別の観点が存在する、ということ、精神科学の認識に対する一定の感情から申し上げるとしても、皆さんはお許し下さるでしょう。私はいくらか誇張して言うかも知れませんが、それはそれなりの理由があるからです。今日、人生の奥に潜む原因に通じている人であれば誰でも、こじつけのように聞こえるかも知れませんが、影響力のある新聞記事を書く記者達が、彼らの魂を改善するために祈り、働くならば、彼らは人々のためにより良い仕事をするようになる、と感じるでしょう。もっと多くの人に、祈ることは記事を書くことよりも道理にかなっている、ということを知ってほしいのです。他の多くの知的な仕事についても同じことが言えるでしょう。

さらに言えば、人生全体を理解するためには、祈りを通して働く力についての理解が必要なのですが、この理解は、私たちが文化生活のある特別な側面を見るとき、特別な明晰さをもって生じるのです。一方的で、利己的な意味においてではなく、今日、私たちが取ったような、より広い観点から祈りを見たとき、それが芸術の構成要素になっている、ということを見誤る人がいるのでしょうか？確かに、芸術の中には、お笑いの中で表現されるような全く異なった側面、それが表現するものの上にそれ自身を上昇させるところのユーモラスな取り組みの中で表現されるような側面も見出されます。しかし、賦（ふ）や賛美歌は、祈りからそれほど遠く隔たっているとはいえません。そして、描写的な芸術でさえ、「絵画の中の祈り」とでも呼べるような例を示します。そして、荘厳な大聖堂においては、天までとどくような祈りに似た何か石の中に表現されている、ということを知りたくありませんか？

もし、私たちが、人生の文脈の中で、このすべてを把握することができるならば、私たちは、祈りが、その真の本性の通りに見られたとき、人間を限定的で、一時的なものから、永遠なるものへと導くもののひとつである、ということに気づくでしょう。このことは、今日の、そして以前の講義の中で触れたアンジェラス・シレジウスのように、祈りから神秘主義への道を見出した人たちによって、特に強く感じられたのです。彼は、例えば、「ケルビニアン・トラベラー」に示されているような、彼の神秘思想の内的な真実と輝かしい美、暖かい親密さと輝く明晰さを、あれほど力強く彼の魂に働きかけていたところの祈りの自己訓練に負っている、と感じていました。そして、彼のような神秘主義者すべてを浸し、照らし出したのは、そもそも、何なのでしょう？祈りが彼らをしてそれに向けて準備させたところの永遠の感情ではないとすれば、それは何なのでしょう？祈る人は誰でも、もし、彼が真に内的な落ち着きと内面性を祈りを通して達成し、次に、自分自身からの解放を達成するならば、この感情についてのいくらかの示唆を得ることができます。過ぎ去る瞬間を超え、永遠へと私たちの目を向けさせ、そして、過去と現在と未来を私たちの魂の中で結びつけるのがこの示唆なのです。私たちは、祈りの中で、そこにおいて「神」を（私たちがそれに気づいていようといまいと）求めるところのあの人生の側面に向かうとき、私たちの祈りの中に入ってくる感情と思考と言葉は、アンジェラス・シレジウスの次のような言葉によって表現されるような永遠への感情によって浸透されるでしょう。その言葉をもって、今日の締めくくりにしたいと思います。それは、たとえ無意識的にではあっても、すべての真に祈る人たちに、何か「神」の芳香と甘

美のようなものをもたらすことができるのです。

時間を捨てて、私は、私自身、永遠となる

そのとき、私は「神」と、「神」は私とひとつなのだ

第5講「病氣と治療」

(1910年3月3日)

恐らく、この冬の間、ここで私が開くことを許された講座に、多かれ少なかれ定期的に参加されている皆さんには、今回の連続講義は魂についての一連の遠大な疑問を取り扱ってきたのだ、ということが明らかになっていることでしょう。今日の講義でもそのような問題、つまり、病氣と治癒の本質に関する問題を取り上げようと思います。

それに関して、精神科学の立場から、精神的な存在の単に表現である限りにおいての人生の事実について述べるができるようなことは、以前ここで開催された連続講義、例えば「病氣と死の理解」、「偽りの病氣」、あるいは「熱に浮かされたような健康の追求」の中で説明しています。今日は、病氣と治癒について理解する上で、きわめて奥深い問題を取り上げたいと思います。

病氣、治癒、そして、ときとして死に至る何らかの病は人生に深い影響を及ぼします。私たちは、これらを考察するための基礎となる精神的な前提、基盤について繰り返し探求してきましたので、これらの遠大な事実の原因であり、人間が人間として存在することの結果であるところのものについても探求することが許されるでしょう。つまり、これらの経験に関して、精神科学が言うべきこととは何なのでしょうか？

人間の通常の発達過程との関連で、病氣、健康、死、そして治癒がどのように位置づけられるかを明確にするためには、発展していく人生の意味について、もう一度、深く探求しなければなりません。何故なら、これらのできごとは通常の発達過程に影響を及ぼすものである、と考えられているからです。それらは私たちの発達に何か貢献するのでしょうか？それらは私たちを前進させるのでしょうか？あるいは、遅らせるのでしょうか？これらのできごとについての明確な概念に至ることができるのは、ここでもまた、人間全体を考慮するときだけなのです。

しばしばお話ししてきたことですが、人間は四つの構成体から成り立っています。第一は、人間が彼の周りの鉱物存在すべてと共有している肉体ですが、その形態はそれが内に有する物理的、化学的な力に依存しています。人間の第二の構成体は、私たちがこれまでエーテル体あるいは生命体と呼んできたものですが、人間はこれをすべての生命あるもの、つまり、彼の周りの植物や動物と共有しています。そして、私たちは人間存在の第三の構成体としてアストラル体についてお話ししてきましたが、これは、楽しみや苦しみ、喜びや悲しみ、つまり、一日を通して溢れるすべての感動、イメージ、思考等を担うものです。人間はこのアストラル体を彼の周りの動物世界とだけ共有しています。そして、人間を被造物の頂点に立たせるところの最高の構成体、すなわち自我、自意識の担い手があります。私たちがこれら四つの構成体について考えるとき、まず第一に言えることは、それらの間には表面的に見ても一定の違いがある、ということです。私たちが、人間を、つまり、私たち自身を外側から見ると、そこには人間の肉体がありません。肉体は外的、物理的な感覚器官によって観察することができるのです。これらの器官に結びついた思考、すなわち脳という器官に結びついた思考によって、私たちはこの人間の肉体を理解することができます。それは私たちの外的な観察に対して明らかにされます。

人間のアストラル体に対する関係は全く違ってきます。既に以前の記述の中で見てきたことですが、真に超感覚的な意識にとって、アストラル体とは、単に外的な事実です。つまり、アストラル体は、しばしばお話ししてきたような仕方で意識を訓練しさえすれば、肉体と同じように見ることができるものなのです。通常の生活においては、人間のアストラル体を外側から観察することはできません。目で見ることができるのは、その中で波打つ本能、熱情、思考、そして感情の外的な表現だけです。しかし、これとは対照的に、人間はこれらのアストラル体の経験を自分の中で観察します。彼は、私たちが本能、欲望、熱情、楽しみや悲しみ、喜びや痛みと呼ぶところのものを観察するのです。このように、アストラル体と肉体の関係は、通常の生活においては、前者は内的に観察される一方、肉体は外的に観察される、というようなものなのです。

さて、ある意味で、その他の二つの構成体、人間のエーテル体、そして自我の担い手は、肉体とアストラル体というふたつの対極の中間に位置しています。肉体は純粋に外側から、アストラル体は純粋に内側

から観察することができます。肉体とアストラル体の間にある中間的な構成体がエーテル体です。それは外側から観察することはできませんが、外部に影響を及ぼします。アストラル体の力、内的な経験はまずエーテル

体に移行しなければなりません。それは、そうすることによってのみ、物理的な道具、肉体に働きかけることができるのです。エーテル体はアストラル体と肉体の間の仲介役として働き、外側と内側の結びつきを形成するのです。私たちはもはやそれを物理的な目で見ることができませんが、エーテル体が外に向かって肉体と関連づけられていることによってはじめて、アストラル体の道具を目で見ることができるようになっているのです。

さて、ある意味で、自我が内側から外側に向かって働くのに対して、エーテル体は外側から内側へ、アストラル体に向かって働きかけます。と申しますのも、人間は自我によって、そして、自我がアストラル体に影響を及ぼすその仕方によって、外の世界の、つまり、肉体自体がそこに起源を有するところの物理的な環境についての知識を獲得するからです。動物存在が個々の、個人的な認識を持つことなく生じるのは、動物が個的な自我を有していないからです。動物はアストラル体に関するあらゆる経験を内的に生き抜くのですが、その楽しみや苦しみ、共感や反感を、外なる世界の認識を獲得するためには使いません。私たちが楽しみや苦しみ、喜びや悲しみ、共感や反感と呼ぶところのものは、動物においてはすべてアストラル体の経験なのですが、動物は、その楽しみを世界の美に対する賞賛へと変換するかわりに、その楽しみを生じさせる要素の中に留まります。動物はその苦痛のただ中で生きるのに対して、人間は苦痛に導かれて自分を越え、世界を発見するのです。何故なら、自我が彼をそこから再び連れ出し、外なる世界に結びつけるからです。こうして、私たちは、一方では、いかにエーテル体が人間の内面、アストラル体の方向に向けられるかを、他方では、いかに自我が外なる世界、私たちを取り巻く物理的な世界に導くかを理解します。

人間は交互に入れ替わる生を生きています。このことは日々の生活の中で観察されます。私たちが、朝起きた瞬間から、魂の中へと流れ込み、流れ出すあらゆるアストラル体の経験 - 喜びや悲しみ、楽しみや苦しみ、感情、イメージ等々を観察するのです。夜には、アストラル体と自我が無意識の中に、あるいは、多分もっとまじな言い方をすれば、意識下の状態に入っていくために、いかにこれらの経験が漠然とした闇のレベルにまで沈み込んでいくかが見られます。朝から夜までの間、起きている人間を見ると、肉体、エーテル体、アストラル体、そして、自我が互いに織りなされ、それらの影響に関して、互いに結びつけられているのが分かります。秘教的な意識には、人間が夜眠りにつくと、肉体とエーテル体はベッドの中に残り、アストラル体と自我は精神的な世界の中の本来の場所に帰る、つまり、肉体とエーテル体から抜け出す、ということが分かります。私たちが今のテーマに適切に対処することができるように、このことをもっと別の方法で記述してみましょう。

肉体は、その外的な側面だけを私たちに示しているのですが、眠っている人間においては、外的な人間として物理世界の中に留まり、内と外の仲介者であるエーテル体を保持しています。眠っている人間の中に内と外の間を仲介するものがないのは、仲介者としてのエーテル体が外の世界にあるからです。このように、眠っている人間においては、ある意味で、肉体とエーテル体とは単に外的な人間に過ぎない、ということができます。エーテル体は内と外の仲介者ではありますが、肉体とエーテル体を「外なる人間」として記述することもできるでしょう。反対に、眠っている人間のアストラル体は「内なる人間」として記述することができます。これらの言葉は起きている人間にも当てはまります。何故なら、あらゆるアストラル体の経験は、通常の条件下では、内的な経験であり、人間は起きているときに自我が獲得する外の世界についての知識を内的に取り上げ、学びながら自分のものとしているからです。外的なものは自我を通して内的なものにされます。このことは、私たちが「外の」人間と「内の」人間について、つまり、前者は肉体とエーテル体から、後者は自我とアストラル体からなるものとして語るということを示しています。

さて、人間のいわゆる通常の生活とその本質的な発達について見てみましょう。何故、人間はアストラル体と自我を伴って、毎夜、精神的な世界に帰って行くのでしょうか？ 人間が眠りにつく何らかの理由があるのでしょうか？ これについては以前にも触れましたが、私たちが今日扱っているテーマに関して、つまり、病気と治癒において現れるような、一見異常な状態を認識するためにも、正常な発達についての理解が必要です。人間はどうして毎夜、眠りへと赴くのでしょうか？

これについての理解に至ることができるのは、「外なる人間」に対するアストラル体と自我の関係を十分に考慮するときだけです。私たちはアストラル体を、楽しみと苦しみ、喜びと悲しみ、本能、欲望、熱情、波打つイマジネーション、知覚、思考や感情の担い手として記述しました。けれども、アストラル体がこれらすべての担い手であるとするならば、肉体とエーテル体が存在していないとはいえ、実際の内的な人間がアストラル体と結びついている状態にもかかわらず、何故、人間は夜、これらの経験を持たないのでしょうか？ この間、これらの経験が漠とした闇の中に沈んでしまう、ということが何故あるのでしょうか？ それは、アストラル体と自我が、喜びや悲しみ、判断、イマジネーション等々の担い手であるにもかかわらず、これらのものを直接には経験できないからです。私たちの通常の生活においては、アストラル体と自我は、それら自身の経験を意識するために肉体とエーテル体を必要としているのです。私たちの魂の生活とは、アストラル体によって直接経験される、というものではないのです。もし、そうだとすれば、私たちがアストラル体と結びついている夜の間にもそれを経験することができるはずですが、昼間における私たちの魂の生活は残響あるいは鏡像のようなものです。肉体とエーテル体がアストラル体の経験を反射するのです。私たちが起きてから眠りにつくまでの間に、私たちの魂が私たちのために魔法のように出現させるあらゆるものを出現させることができるのは、それが肉体とエーテル体もしくは生命体という鏡の中にそれ自身の経験を見るからに他なりません。夜、私たちが肉体とエーテル体を後にする瞬間、私たちはまだアストラル体の経験のすべてを私たちの内に有しているのですが、私たちはそれを意識しません。何故なら、それらを意識するためには、肉体とエーテル体の反射する性質が必要だからです。

こうして、私たちは、朝目覚めてから夜眠りにつくまでの私たちの生活の全過程を通して、内的な人間と外的な人間、すなわち、自我とアストラル体、そして肉体とエーテル体が相互に作用しているのを見ます。働いているのはアストラル体と自我の力です。何故なら、いかなる条件下でも、物理的な特徴の総計としての肉体やエーテル体がそれら自身から私たちの魂の生活を生じさせることはできないからです。私たちが鏡の中に見る像が、鏡に発するものではなく、鏡の中で反射される対象物に由来しているのと同じように、反射される力はアストラル体と自我から生じるのです。このように、私たちの魂の生活を生じさせるすべての力はアストラル体と自我の中に、すなわち人間の内的な本性の中に横たわっているのです。そして、それらは、内的な世界と外的な世界との間の相互作用の中で活発になり、いわば肉体とエーテル体にまで手をのばすのですが、夜には、私たちが「疲れた」と呼ぶ状態に入っていくのが、つまり、それらが夜、消耗しているのが見られます。そして、もし、私たちが毎夜、朝から夜までの間そこで過ごすところの世界とは別の世界に入っていく立場になかったとすれば、私たちは自分の生活を続けることができなかつたでしょう。私たちは、起きている間に滞在する世界の中で、私たちの魂の生活を知覚可能なものにする、つまり、私たちの魂の前にそれを提示することができるのですが、それはアストラル体の力によって可能になるのです。しかし、私たちはこれらの力を使い果たします。目覚めている間の生活からそれを補充することはできません。私たちがそれを補充することができるのは、私たちが毎夜入っていく精神的な世界からだけです。私たちが眠るのはそのためです。夜の世界に入り、そこから昼の間に使う力を持ってくることなしに私たちが生きていくことはできないでしょう。こうして、エーテル体と肉体の中に入るとき、私たちは何を物理的な世界に持ち込むのか？ という問いに対する答えが得られました。

ところが、私たちはまた、夜にも何かを物理的な世界から精神的な世界へと運んでいくのではないのか？ これが第二の問いです。この問いも第一の問いと同じように重要です。

この問いに答えるためには、通常の間生活に属する数多くのことがらを取り扱わなければなりません。通常の間生活には、いわゆる経験と呼ばれるものがあります。これらの経験は私たちの誕生から死までの人生において重要なものです。ここでしばしば触れられてきたひとつの例、つまり、書くということを学ぶことについての例がこのことに光を当ててみましょう。私たちが自分の思考を表現するためにペンを取るとき、私たちは書くという芸術に携わっているのです。私たちは書くことができるのですが、そのために必要な条件とは何なのでしょう？ 私たちが誕生から死までの間に有する一連の経験のすべてが必要なのです。皆さんが子供として通過してきたことのすべて、ペンを持つという最初のぎこちない試みからそれを紙に当てる等々のことがらについて考えてみて下さい。これらすべてのことを思い出さなくてもよい、というのは神に感謝すべきことです。何故なら、もし、書くたびに、私たちが書道と呼ぶところの芸術を発達させようとして線を引き損ねたことや、多分それでしかられたことなどを思い出さなければならぬとしたら、ひどい状況に陥るであろうからです。何が起こったのでしょうか？ 誕生から死までの間の人

生において重要な意味を持つところの発達が起こったのです。私たちは一連の経験の総体を有していますが、これらの経験は長い時間をかけて生じたものです。それらはその後、いわば私たちが書くための「能力」と呼ぶところの本質的なものへと純化しました。他のすべてのものは、忘却の漠とした闇の中へと沈んでいきましたが、それらを思い出す必要はありません。何故なら、私たちの魂は、これらの経験から出発して、より高次の段階に達しているからです。つまり、私たちの記憶は、人生における受容力や能力として現れるところの本質的なものの中へと共に流れ込むのです。誕生から死までの存在状態における私たちの発達とはこのようなものです。経験は最初に魂の能力へと変容し、次にその能力は肉体という外的な道具を通して表現されます。誕生から死までの成達は、すべての個人的な経験が能力や、そしてまた叡智に変化させられる、というような仕方です。

もし、私たちが1770年から1815年までの期間を眺めるとすれば、この変容がどのようにして生じるかの洞察を得ることができます。重要な歴史的事件がこの間に生じました。多くの人がこの事件と同時代に生きていましたが、彼らはそれにどのように反応したのでしょうか？

彼らの内のある部分は、そのできごとがかたわらを通り過ぎるのに気づきませんでした。彼らはそのできごとが知識に、世界の叡智に変化するのを無感動に見過ごしました。他の人たちはそれらを深い叡智へと変化させました。彼らは本質的なものを抽出したのです。

どのようにして経験は魂の中で能力や叡智へと変化させられるのでしょうか？ それらは毎夜、そのままの形で私たちの眠りの中に、つまり、魂あるいは内的な人間が夜の間滞在するあの領域の中に取り込まれることによって変化させられるのです。ある期間中に起こった経験は、そこで本質的なものに変化するのです。人生を観察する人であれば誰でも、もし、誰かがあるひとつの活動領域における一連の経験を秩序づけ、自分のものにしたいのであれば、これらの経験を眠っている間に変化させる必要がある、ということを知っています。例えば、何かを一番よく学ぶことができるのは、それを学び、それとともに眠り、再びそれを学び、再びそれとともに眠ることによってです。経験は、眠りの中に沈められることがなければ、能力や叡智、あるいは芸術の形で現れてくるように発達させられることはないでしょう。

これは、私たちが低次のレベルで直面する必然的なものの高次のレベルにおける表現です。もし、今年の植物が暗い地球の覆いの中に帰って行かないとすれば、それは次の年に再び成長する植物にはなれないでしょう。この場合の成達は繰り返しに留まりますが、人間の精神に照らされることによって真の「発達」になります。経験は無意識の夜の覆いの中に降り、そして再び、さしあたりはまだ繰り返しとして取り出されるのですが、最終的には、叡智として、能力として、生きた経験として現れるほどに変化させられていることでしょう。

今日よりもより深く精神的な世界を観察することができた時代には、人生はそのように理解されてきました。古代文化における指導的な人物たちがイメージによって何かを話そうとすると、人生におけるこれらの重要な基礎が示唆されているのを見ることができるのはそのためです。もし、一連の昼間の経験が魂の中で火をつけられ、何らかの能力に変化するのを妨げたいのならば、何をすべきでしょうか？ 例えば、誰かが一定の期間中に、誰か他の人と何らかの関係を持つときには、何が起こるのでしょうか？ その人物とのこれらの経験は夜の意識の中に沈み、そこからその人物に対する愛として、つまり、それが健全なものである場合には、いわば連続した経験の本質として再び現れるのです。他者に対する愛の感情は、経験の総体がひとつの織物へと織られるように統合される、というような仕方です。さて、一連の経験が愛に変化するのを妨げるためには何をすべきなのでしょう？ 私たちの経験を本質的なもの、すなわち愛の感情に変化させるところの夜の自然過程が生じるのを妨げなければならないのです。私たちは、昼の経験から織られた織物を夜に再びほどこさなければなりません。もし、そうすることができたならば、魂の中で愛に変化する他者に対する経験は私たちに何の影響も及ぼさなくなるでしょう。

ホメロスはこの人間の魂の深みについて、ペネロペと彼女の求婚者のイメージの中で暗示しています。彼女はある織物を織り上げたときに結婚に応じることを皆に約束します。昼間に織り上げたものを、単に夜毎にときどきことによって、約束は回避されます。見ることができる人が芸術家でもある場合には、非常に深遠なものが明かされます。今日、このようなことに対する感情はほとんど残っていません。ですから、同時に見ることができる人である詩人がそのようなことを説明するとき、それは気ままな思いつきであると断定されるのです。それによって古代の詩人も、そして真実も害されることはありませんが、私たちの時代はそうはいきません。それはそのようにして人生の深みに入っていくことを妨げられるので

す。

このように、夜の間になにかが魂の中に取り込まれ、再び戻ってきます。魂の中に取り込まれたものは魂によって発達させられ、それをどこまでも高いレベルの能力へと上昇させます。けれども今、この人間の発達はどこにその限界があるのか、と問わなければなりません。この境界線を認識することができるのは、いかに人間が、朝起きる度に、同じ能力、才能、そして生まれたときから変わらない配置を持つ肉体とエーテル体に帰ってくるかを観察するときです。肉体とエーテル体の配置、その内的な構成と形態を変えることはできません。もし、私たちが肉体を、あるいは、少なくともエーテル体を眠りの状態に連れていくことができるのであれば、私たちはそれらを変えることができたでしょう。しかし、私たちは毎朝、それらが昨夜と変わっていないのを見いだします。

誕生から死までの人生において達成することができる発達に対する明確な限界がここにあります。誕生から死までの間の発達は本質的に魂の経験に限定され、身体的な経験にまでは拡張されないのです。

こうして、誰かが、その音楽的な鑑賞力を深化させるような、つまり、彼の魂の中に奥深い音楽的な生活を目覚めさせるようなあらゆる経験を通して機会を持ったとしても、もし、彼が音楽的な耳を持っていなかったとすれば、もし、彼の耳の物理的、エーテル的な形態が、外なる人間と内なる人間の間に調和が打ち立てられるのを許さないようなものであったとすれば、それらが発達させられることはありません。人間がひとつの全体であるためには、彼のすべての構成体がひとつの統一体を形成し、調和していなければなりません。音楽的な耳を持たない人が、自分をより高いレベルの音楽的な鑑賞力へと引き上げるであろうようなあらゆる経験を通して機会を持ったとしても、それは魂の中に留り、発達させられることはない、というのはこのためです。それらが実

りへともたらされないのは、毎朝、内的な器官の構造と形態によって境界線が引かれるからです。これらのことは単に肉体とエーテル体のより粗雑な構造だけに依存しているのではなく、その中に含まれる非常に微妙な関係にも依存しているのです。現在の通常の生活においては、あらゆる魂の機能は何らかの器官の中にその表現を見いださなければなりません。そして、もし、その器官が適切な仕方で形成されていないければ、それは妨げられるのです。生理学や解剖学によって示されることのないこれらのことがら、器官の中の微妙な刻印こそが、誕生から死までの間には変化させることができないものなのです。

では、人間は、彼のアストラル体や自我の中に取り込んだできごとや経験を肉体やエーテル体の中にそぎ込む、という点では全く無力なのでしょうか？ と申しますのも、人々を観察すると、限度はありますが、人間が自分の肉体を整えることさえできるのを見ることができからです。十年間にわたる生活を深い内的な思索の中で過ごしてきた人を見れば、その仕草や顔つきが変化しているのが分かります。とはいえ、このことが起こるのは非常に狭い範囲に限られています。しかし、それはいつでもそうなのでしょうか？

このことがいつも非常に狭い範囲に限られるわけではないということを理解することができるのは、私たちがここで何度も触れてきたこと、とはいえ、私たちの時代にはあまりにも遠いものになってしまっているために、何度も思い出されなければならないある法則、すなわち、17世紀において、より低いレベルで人類のために確立された法則を頼りにするときだけです。

17世紀に至るまで、より低次の動物や虫は川の泥から発生すると信じられていました。地虫や昆虫を生じさせるためには、純粋な物質以上のものはいらないと信じられていたのです。このことは素人だけではなく、学者たちにも信じられていました。以前の時代に遡ると、あらゆるものが、例えば、どうすれば環境から生命を創り出すことができるかが教えられる、という仕方で系統立てられていたのが分かります。紀元後7世紀の本には、蜜蜂を創り出すためには、畜殺された馬の胴体をどのように打ちなめすべきかについての記述が見られます。同様に去勢牛は雀蜂を、ロバはジガバチを創り出しました。偉大な科学者、フランチェスコ・レディが、「生命は生命だけから発生する」という公理を初めて宣言したのは17世紀のことだったのです！ 今日、あまりにも自明のこととされているために、誰も、何かそれ以外のことが信じられていたということさえ理解できないようなこの真理のために、17世紀においてさえ、レディは恐ろしい異端者と考えられ、かろうじてジョルダノ・ブルーノの運命を免れることになったのです。

そのような真理に関してはいつもそうです。それらを宣言する人たちは、最初、異端者の烙印を押され、審判の餌食にされます。過去には、人々は火あぶりにされたり、その危険にさらされました。今日、この種の審判は放棄され、誰も火あぶりにはされません。しかし、今日、科学を牛耳る人々は、新しい、より

高次のレベルの真実を宣言するすべての人を馬鹿者や夢想家と見なします。今日、フランチェスコ・レディが17世紀に宣言したところの生き物に関する公理を、別の方法で奉じる人々は馬鹿者や夢想家と見なされるのです。レディは、生命が死せる物質から直接発生すると信じるのは不正確な観察であり、それは生ける物質、自らの物質と力を環境から引き寄せるところの胎児にまで辿られなければならない、ということを描きました。同様に、今日の精神科学は、魂的、精神的な本質として存在することになるものも、魂と精神から発生するに違いない、それは遺伝された特徴の集合ではない、ということを描きなければなりません。地虫の胎児的な形態が周りにある物質を引き寄せて発達するように、魂的、精神的な核が発達するためには、同じくその周りにある実質を引き寄せなければなりません。もし、私たちが、人間の魂と精神の本質を逆方向に追っていくならば、誕生以前に存在する魂的、精神的な要素、遺伝とは関係のない要素に辿り着きます。魂的、精神的な要素は魂的、精神的な要素だけから生じるという公理は、結局は、繰り返される地上生という公理に必然的に帰着するのですが、これは綿密な精神科学的探求によって証明することができます。私たちの誕生から死までの人生は、私たちが以前に通過した別の人生にまで辿られます。魂的、精神的な要素は、魂的、精神的な要素にその起源を持ち、私たちが今回の人生の間に持つ経験は以前の魂的、精神的なあり方に起因しているのです。私たちは、死の門を通過していくとき、今回の人生において、原因を能力に変容させることによって吸収したものを携えていきます。私たちが誕生を通して、未来において存在するようになるとき、私たちはこれを携えて帰ってくるのです。

死から誕生まで間、私たちの状況は、夜毎の眠りを通して精神的な世界に入り、朝再びそこから目覚めるときとは異なります。朝目覚めると、私たちは前の晩に残っていた通りの肉体とエーテル体を見いだします。誕生から死までの間は、私たちは生活上の経験によってそれらを変化させることができません。つまり、完成されたエーテル体と肉体という限界があるのです。ところが、私たちが死の門を通過していくとき、私たちは肉体とエーテル体から去り、ただエーテル体の本質だけを保持して行きます。精神的な世界においては、肉体とエーテル体の存在について考慮する必要がありません。人間は、死から新生までの期間を通して、純粋に精神的な力に働きかけることができ、純粋に精神的な実質を取り扱っているのです。彼は、次の誕生に至るまで、新しい肉体とエーテル体の元型を創造する中で、以前の人生において肉体とエーテル体の中にいたときには使うことができなかったすべての経験を織り込みながらそれらを形成するために必要とするものを精神的な世界から取り出します。次に、この純粋に精神的な元型のイメージが完成し、彼が元型の中に織り込んだものを肉体とエーテル体の中に刻み込むことができる時がやってきます。それらの元型は人間が通過するこの特別な眠りの状態の中でこのようにして活動しているのです。

もし、人間が毎朝目覚めに際して、肉体とエーテル体を同様の方法で生じさせることができるとすれば、彼はそれらを精神的な世界から形成することになるでしょう。しかし、同時に、それらは変化させられなければならないでしょう。誕生とは、誕生以前の存在状態にある肉体とエーテル体を包含する眠りの状態からの目覚めを意味しています。この時点で、アストラル体と自我は、物理的な世界に、つまり以前の人生における完成された体の中には形成することができなかったあらゆるものを今や刻み込むことができる肉体とエーテル体の中に降ります。それらは今や、新しい人生の中で、以前、より高次の発達段階に上昇させていたとはいえ、完成された肉体とエーテル体がそれを不可能にさせていたために、実行に移すことができなかったあらゆるものを肉体とエーテル体の中に表現します。

もし、私たちが肉体とエーテル体を破壊することができなかったとすれば、もし、肉体が死の門を通過することができなかったとすれば、私たちは自分の経験を私たちの発達の中に集積することができなかったでしょう。私たちがどんなに死を恐ろしく、衝撃的なものであると見なすとしても、私たちにふりかかるであろう死に対してどんなに苦痛と悲しみを感じるとしても、世界を客観的に見るならば、それが私たちに教えるのは、私たちは死を望まなければならない！ということです。と申しますのも、死だけが、次の人生における新しい体を構築することを通して、地上に存在していた間のあらゆる果実を生へともたらずことを私たちに可能にさせるために、この体を破壊する機会を与えてくれるからです。

このように、人生における通常の過程においては、二つの流れ、内的な流れと外的な流れが共に活動しています。これら二つの流れは、一方では、肉体とエーテル体の中に、他方では、アストラル体と自我の中に平行して流れている、ということが分かります。人間は肉体とエーテル体に関して、誕生から死までの間に何ができるのでしょうか？ 魂の生活によって消耗するのはアストラル体だけではなく、肉体とエーテル体の器官もまた消耗します。私たちは今、次のようなことを観察します。アストラル体は、夜、精

神的な世界に滞在している間に、肉体とエーテル体を通常の状態へと回復させるためにそれらにも働きかけているのです。肉体とエーテル体の中で昼間に破壊されたものは眠りの中でだけ回復させることができます。ですから、精神的な世界は実際に肉体とエーテル体に働きかけるのですが、限界があります。誕生に際して与えられた肉体とエーテル体の能力と構造は、非常に狭い範囲を除いて、変わることができないのです。宇宙的な発達においては、いわば二つの流れが

活動しており、抽象的な方法によってそれらに調和をもたらすことはできません。もし、誰かがこれら二つの流れを抽象的な思索によって統一しようとするならば、つまり、「そうです、人間は調和していなければなりません。ですから、これら二つの流れは人間の中で調和していなければなりません」と言うような哲学を軽々しく発達させようとするならば、彼は大変な間違いをすることになります。生命は抽象的なものにしたがって働いているわけではありません。生命は、これらの抽象的な観点がただ長い発達の期間を経て達成されるような、平衡と調和の状態が何段階もの不調和を通過することによってのみ創り出されるような仕方働きます。これが人間における生きた関連であり、それは実際、思索によって調和させられるようにはなっていないのです。生命は不調和を通過することによって、バランス状態に向けて発達するという状況にあるのですが、抽象的で乾燥した思考はいつもそこに調和を想像するのです。ある一定の人間の発達段階を単に想像するだけでは到達し得ないような調和を持つ、というのが人間の発達における運命なのです。

さて、精神科学が、生命は内的あるいは外的な人間という観点から眺めるかどうかによって異なる側面を示す、と言うとき、皆さんは今、それをより容易に理解することができるようになっていくでしょう。

何ら

かの抽象化によってこれら二つの側面を結びつけようとする人は、たったひとつの理想、ひとつの判断があるのではなく、色々な観点があるのと同じくらい多くの判断があり、真実を見いだすことができるのは、これらの異なる観点がともに働くときだけである、ということを考えていないのです。内的な人間に関する生命の観点は外的な人間に関する観点とは異なっている、と仮定することができます。真実とは、どの観点から眺められるかに依存する相対的なものである、ということをはっきりと示すひとつの例があります。

小さな子供ほどの大きさの手を持つ巨人が彼の小さな指について語るの、確かに、全く適切なことです。小さな子供ほどの大きさのこびとが巨人の小さな指について語るかどうかは別の問題です。必然的なことからは相補的な真実です。外的な事物に関する絶対的な真実はありません。事物はすべての異なる観点から眺められなければなりません。そして、真実は互いを照らし出す個々の真実を通して見いだされなければなりません。人生の中で見られるように、外的な人間、肉体及びエーテル体と、内的な人間、アストラル体及び自我とが、ある一定の長さの人生においては、完全に調和した状態にある必要はない、というのはこの理由にもよります。もし、完全な調和があったとすれば、人間が夜、昼間のできごとを伴って精神的な世界に入っていくとき、それらを本質的な能力や叡智、あるいはその他のものへと変化させる一方で、彼が朝、精神的な世界から物理的な世界へともたらす力はただ魂との関連でのみ使われる、ということになるでしょう。けれども、私たちが記述したような肉体によって引かれる境界線は決して越えられることがないでしょう。そのときには人間的な発達もあり得ません。人間は自分でこの限界に気づくことを学ばなければならないのです。それらを自分の判断の一部にしなければなりません。彼には、これらの限界を最大限に突破するという可能性が与えられなければならないのです。

そして彼は絶えずそれらを突破します！ 現実の生活においては、これらの境界線は絶えず越えられ、そのため、例えば、アストラル体と自我が肉体に影響を及ぼすとき、それらは限界の範囲内には留まりません。けれども、そうすることによって、それらは肉体の法則を破棄するのです。そのとき、精神すなわちアストラル体と自我によって引き起こされる肉体の不調や混乱、つまり病気として現れるような法則の破棄が観察されます。その限界は別の方法でも破られます。つまり、内的な存在としての人間が外的な世界との関係づけに失敗し、折り合いをつけられないというような場合です。このことは非常に劇的な例で示すことができます。

中央アメリカのペレー山が噴火したとき、非常に注目すべき、また教えに富んだ書類が廃墟から後になって見つかりました。その内のひとつには、「もう恐れることはない、危険は去った、もう噴火しないだろう。このことは私たちが自然法則として認識するに至った法則によって示される」と記されていました。

自然に関する知識の現在の状況によれば、さらなる火山の噴火はあり得ない、と記されたこれらの書類は、その通常の学問的な知識に基づいてそれらを書いた学者たちとともに土に埋もれたのです。悲劇的なできごとがここで起こりました。けれども、正にこのことが、人間と物理的な世界との不調和を全くはっきりと示しています。これらの自然法則を探求した学者たちの知性が、もし、彼らが十分に訓練されていたとすれば、真実を見いだすのに十分なもので

あったことは確かです。彼らは知性に欠けていたわけではありません。知性は必要なのですが、それだけでは不十分なのです。例えば、もし、事態が差し迫ったものであるならば、動物たちはその地域を離れず。それはよく知られた事実です。ただ家畜だけが人間とともに消えるのです。ですから、いわゆる動物的な本能は、これらの未来のできごとに関する限り、今日の人間の叡智に比べて、はるかに偉大な叡智を発達させるのに十分なものであると言えます。「知性」は決定的な要因ではありません。私たちの現在の知性は最高に馬鹿げたことをする人たちの中にも存在しています。ですから、知性が欠如しているのではないのです。欠けているのは、できごとに関する十分に成熟した経験です。知性がその狭く限定された経験にとって可能と思われる何かを主張するやいなや、それは現実の外的なできごととの間で不調和に陥り、そして、外的なできごとがその周りで勃発することになります。と申しますのも、肉体と世界との間には、人間が徐々に認識するようになる、彼が今日既に有している力によって把握するようになる関係があるからです。けれども、彼がそれをできるようになるのは、一度、外的な世界についての経験を増加させ、自分のものとした後でだけなのです。そのときには、正に私たちが今日有しているような知性がこの経験の結果として発達する調和を創り出していることでしょう。と申しますのも、私たちの知性がある一定の段階にまで発達するのは、正に現時点においてだからです。欠けている唯一のものとは経験を成熟させることです。もし、経験の成熟が外部の状況と一致していなければ、人間は外の世界との不調和に陥り、外的な世界におけるできごとによって破滅させられることになるでしょう。

私たちは、極端な例ですが、いかに学者たちの肉体と、彼らがその魂の発達において内的に到達していた段階との間に不調和が生じたかを見てきました。そのような不調和は、私たちに重大なできごとがふりかかるときだけに生じるものではありません。つまり、そのような不調和は、原則として、また本質的に、何らかの外的な損害が私たちの肉体やエーテル体にふりかかるときには、つまり、外的な損害が、外的な人間に対して、彼の内的な力をもってしてはそれに太刀打ちできない、それを彼の人生から追放できない、というような仕方で影響するときにはいつでも生じるものなのです。このことは目に見える外的なものにも、内的な病気にも、とはいえそれは実際には外的なものなのですが、あてはまります。と申しますのも、もし、私たちの胃の具合が悪いとすれば、それは本質的には私たちの頭の上に煉瓦が落ちてきた場合と同じことだからです。これは内的な人間が外的な人間と一致しないときに、つまり、内的な人間と外的な世界との間に対立が生じる - 対立を生じさせてしまう - ときに陥る状況です。

すべての病気は、本質的には、そのような不調和、内的な人間と外的な人間の間仕切りの破壊なのです。はるかな未来においては調和的なものになるとはいえ、私たちの思考がそれを私たちの人生に課そうとしても抽象的なものに留まるところのこれらの仕切りの絶えざる破壊によって、何かが創り出されることになります。人間は、現段階ではまだ外的な生活に合わせるができない、ということに気づき始めることによってのみ、その内的な生活を発達させるのです。これは自我に関してだけでなく、アストラル体に関しても言えることです。人間は、起きてから眠りにつくまでの間、自我に浸透されるところのそれらのことがらを意識的に経験します。アストラル体の働きは、つまり、いかにそれがその限界を破るか、内的な人間と外的な人間との間に適切な調和を打ち立てるために、いかにそれが重要であるか、というようなことは、通常の人間の意識の外に横たわっているのです。にもかかわらず、それらは存在しています。病気のより深い内的な性質はこれらすべてのことによって明らかにされるのです。

病気が迎える二つの可能な道とは何なのでしょう？ 治癒と死のいずれかが生じるのです。生命の通常の発達においては、死はひとつの側面、治癒は別の側面として見られるに違いありません。

治癒が人間の発達にとって何を意味しているかを知るためには、まず第一に、人間の発達全体にとって病気が何を意味しているかを明らかにしなければなりません。

病気の中には、内的な人間と外的な人間の間不調和があります。ある場合には、内的な人間は外的な人間から退かなければなりません。簡単な例に、私たちが指を切ったときがあります。私たちが切ることができるのは肉体だけで、アストラル体を切ることはできません。けれども、アストラル体は絶えず肉体

に浸透するものですから、それが肉体の隅々にまで浸透するときに見いだすはずのものを切られた指の中には見いだすことができない、ということが起こります。それは指の物理的な部分から切り離されたと感じます。あらゆる病気の本質は、内的な人間が外的な人間から切り離されたと感じること、傷が仕切りを生じさせるために、内的な人間が外的な人間に浸透できないということにあります。さて、外的な方法によって健康が取り戻され、あるいは、内的な人間が外的な人間を治癒させることができるほどまでに強化されるということが起こり得ます。治癒の後では、多かれ少なかれ外的な人間と内的な人間との間の結びつきが回復され、内的な人間が再び外的な人間の中に生きることができるようになります。

これは目覚めに比較され得る過程です。内的な人間が故意に引き上げられた後、物理的な世界においてのみ持つことができる経験へと帰って行くのです。治癒とは、人間が、そうでなければ持ち帰ることができないであろうそれらのことを持ち帰ることを可能にするものなのです。治癒過程は内的な人間の中に同化され、この内的な人間の枢要な部分になります。健康への帰還、治癒とは、何か私たちが満足感をもって振り返ることができるようなものです。何故なら、眠りが内的な人間を前進させるのと同様の方法で、内的な人間を前進させる何かが治癒によって与えられるからです。たとえ直ちに見ることはできないとしても、健康への帰還によって、私たちは魂の経験において引き上げられ、私たちの内的な人間において高められるのです。私たちは、眠りの中で、治癒を通して獲得したものを精神的な世界に持ち込みます。ですから、私たちが眠りの中で発達させる力に関する限り、それは私たちを強化するような何かなのです。もし、時間があれば、治癒と眠りの間の不思議な関係についてのこれらの考察のすべてを十分に展開することもできるのですが、それでも、いかに私たちが夜、精神的な世界に持ち込むもの、私たちの発達過程の中に前進をもたらすもの、つまり、誕生から死までの間、とにかくその過程を前進させることが可能な限りにおいてそれに前進をもたらすものと治癒とを等価なものであるとするのが可能であるかを理解することはできるでしょう。通常の生活においては、私たちが外的な経験からそれに近づくところのこれらのことからは、私たちの誕生と死の間における魂の生活の中で、より高次の発達として表現されるに至ります。けれども、治癒を通して同化されるものがすべて再び現れるわけではありません。私たちはそれを死の門を通るときに伴っていくこともできます。それは次の人生で私たちの役に立つかも知れませんが、けれども、精神科学が私たちに示すのは、私たちは治癒する度に感謝しなければならない、何故なら、それぞれの治癒は、私たちが内的に同化した力をもってしてのみ達成することができるような内的な人間の向上を意味しているのだから、ということです。

死をもって終わる病気は人間にとってどのような意味があるのか？というもうひとつの質問があります。

ある意味で、それは正反対のこと、つまり、内的な人間と外的な人間の間で妨げられたバランスを回復できない、つまり、この人生においては、内的な人間と外的な人間の間にある境界を正しい方法で越えられない、ということの意味をしています。私たちが朝目覚めたとき、変化していない健康な体を受け入れなければならないように、病気が死をもって終わり、それを変化させることができないときには、私たちは変化していない損傷を受けた体を受け入れなければならないままに留まり、朝私たちが受け入れますが、損傷を受けた体はもはや私たちを受け入れません。ですから、結局私たちは死ぬこととなります。私たちは体から去らなければならないませんが、それはもはや再びその調和を確立することができないからです。私たちは私たちの経験を外的な体にとっては利益がないままに精神的な世界に持ち込むのですが、もはや私たちを受け入れることのない体を受けた損傷の結果として獲得されたこの果実は、死と新生の間の生活を豊かにするものになります。ですから、私たちは死で終わる病気にもまた感謝しなければならないのです。何故なら、それは私たちの死と新生の間の生活を豊かにし、その間にだけ成熟することができる力と経験を集める機会を私たちに与えるからです。

ですからここにあるのは、死に終わる病気と治癒する病気に関する魂にとっての結論です。それは私たちに二つの側面を示します。私たちは、内的な自己がそれによって強化されるために、治癒に終わる病気に感謝しますが、死に終わる病気にも感謝することができます。何故なら、私たちは、私たちが死と新生の間の生活の中で入っていくところのより高次の段階においては、死は私たちにとって大いなる重要性をもっているということ、あるいは、私たちが未来のために自分の体を構築するときには、その体は異なったものでなければならないということ、それから学んでいるであろうからです。私たちはそのとき、以前には私たちを失敗させる原因になった有害な側面を回避することができるようになっていくでしょう。

治癒過程は私たちの内的な生活を前進させ、死は外的な世界における発達に影響するのです。

したがって、私たちは必然的に二つの異なる視点を持つこととなります。精神科学の観点から次のように言うことは正しいだろう、と考えるべきではありません。つまり、もし、病気によって生じる死が私たちにとって何か感謝すべきものであるとすれば、もし、病気の経過が次の人生において私たちを上昇させるような何かであるとすれば、私たちは本当にすべての病気を死で終わらせなければならない、いかなる治療の試みもすべきではない！と。このように言うことは、精神科学の精神に反しています。何故なら、それは、抽象的なものではなく、様々な観点から到達され得るような真実に関係しているからです。私たちには、入手できるあらゆる方法で治療を試みるという義務があります。最善をつくして治療するという使命は人間の意識の中に根ざしているものですから、死は、それが生じるときには、感謝すべき何かであるという観点は、通常の人間の意識の中には存在していません。それは私たちがそれを超越することができるときに初めて勝ち取られるような観点なのです。「神の観点」からは病気を死で終わらせることが正当化されるのですが、人間の観点からは治癒を生じさせるためにあらゆることを行うことだけが正当化されるのです。死で終わるすべての病気を同じレベルで評価することはできません。当面、これら二つの観点到に折り合いをつけることはできず、両方が平行して発達していかなければなりません。いかなる抽象的な調和もここでは役に立ちません。精神科学はある特別な人生の側面からやってくる真実や別の側面を代表する別の真実の認識に向けて前進していかなければならないのです。

「治療は善である、治療は義務である」と言うのは正しいのですが、同様に、「死は、病気の結果として生じるときには、善である、死は人間の全体的な発達にとって有益である」と言うのもまた正しいのです。これらの言葉はお互いに矛盾しているとはいえ、両方とも生きた知識によって認識することができる生きた真実を包含しているのです。未来においてのみ調和させることができる二つの流れが正に人間の生活の中に入っていくとき、型にはまった考えの間違いと、人生をより広い観点から眺めることの必要性を理解することが可能になります。いわゆる矛盾は、経験と事物に関するより深い知識にのみ関係するときには、私たちの知識を制限するものではなく、生命そのものが調和に向けて前進するものであるからには、私たちを徐々に生きた知識へと導くものである、ということをはっきりと理解していなければなりません。

通常の生活は、経験から能力が創造さるというような仕方、誕生から死までの間に私たちが同化できないものは、私たちが死と新生の間で使用する織物へと織り込まれるというような仕方で行われます。治癒や死に至る病気は人生のこの通常の過程に織り込まれています。つまり、すべての治癒に終わる病気は人間がより高いレベルに上昇するのに貢献し、あらゆる死に至る病気もまた人間をより高いレベルに導く、というような仕方、織り込まれているのです。前者は内的な人間に関する限り、後者は外的な人間に関する限り、そのようなのです。ですから、世界における進歩はひとつの流れに乗って行くのではなく、ふたつの対抗する流れの中にあるのです。人生の複雑さは、正に病気と治癒の中で目に見えるものになります。もし、病気と健康がなかったとすれば、人間は、その存在の糸にぶら下がりながら、決してその限度を超えることなく人生をつむぎ出す、というような仕方でのみその通常の人生を送ったことでしょう。そして、彼の体を新しく構築する力は、死と新生の間に、精神的な世界から与えられたことでしょう。そのような状況下では、人間は決して彼自身の働きによる果実を世界の発達の中で展開させることができません。人間がこれらの果実を展開できるのは、ただその中でのみ間違いが犯される可能性があるところの人生というしっかりと区切られた境界線の内側においてだけなのです。と申しますのも、真実に到達することができるのは、ただ間違いを知ることによってのみだからです。魂の一部となるような真実、発達に影響するような真実を自分のものとするのができるのは、それが間違いの肥沃な土壌から抽出されるときだけです。もし、人間が限界を破棄することからくる間違いや不完全さをもって人生に介入しなかったとすれば、彼は完全に健康であったことでしょう。しかし、内的に認識された真実と同じ起源をもつ健康、人間がひとつの人生から別の人生へと彼自身の生命をもって追い求めるべき健康、そのような健康が生じることができるのは、ただ間違いや病気という現実を通してだけなのです。人間は、一方では、癒されることで彼の間違いや失敗を克服することを学び、他方では、死と新生の状態にある間に、生きている間には打ち勝つことができなかつた間違いに出会うことによって、次の人生でそれらを乗り越えることができるようになるのです。

さて、あの劇的な例に戻りますと、その時、あのよう間違い判断を下した学者たちの知性について言えることは、単に、簡単に結論にとびつかないようにより注意深くなるだろう、ということだけではな

く、人生との調和を少しずつ創り出せるように経験を成熟させるようになるだろう、ということです。

このように、病気と治療は、人間が、それらなしに、自分の努力だけでその目標を達成することは決してできない、というような仕方では人生に影響を及ぼす、ということを観察することができます。もし、私たちの目標が真実を認識することであるならば、過ちがそうであるように、私たちの発達に対するこれらの一見普通でない介入も、私たちの存在そのものに属しているのだ、ということが分かります。私たちは、偉大な詩人が重要な時代に人間の過ちについて語ったのと同じことを、病気と治療についても語る事ができるでしょう。「努力する人間は間違いを犯す！」 私たちは、その詩人が次のように言いたかったのではないかという印象を受けます。「人間はいつも間違いを犯す！」しかし、この言い方は逆転させることができます。そうすると次のようになるかも知れません。「人間がまだ間違いの間は、努力させておこう！」間違いが新たな努力を産み出すのです。ですから、「努力する人間は間違いを犯す！」という言葉は、必ずしも私たちを絶望で満たすわけではありません。何故なら、あらゆる間違いは新たな努力を呼び起こし、人間はその間違いを克服するまで努力し続けるであろうからです。これは、間違いがそれ自体の中でそれを超えた地点を指し示し、人間的な真実に導く、と言うのと同じです。そして、同様に、人間の中では病気が生じるかも知れないけれども、彼は発達していかなければならない、と言うことができます。彼は病気を通して健康へと発達していくのです。こうして、病気は治療において、そして、死においてさえ、それ自体を超えた地点を指し示し、健康な状態を作り出します。そして、その状態は人間にとって疎遠なものではなく、人間との調和の中で、人間を超えて成長していくものなのです。

このような文脈の中で立ち現れてくるあらゆるものは、いかにその存在の叡知の中に置かれた世界が、あらゆる発達段階にある人間に、アンジェラス・シレジウスの言葉の意味で、彼自身を超えて成長していく機会を提供するか、を示すのに適しています。私たちは、その言葉で「神秘主義とは何か？」の講義を終えたのでした。そのとき、私たちは、より親密な発達領域に言及していたのですが、今や、その意味するところは病気と治療の全領域に広げられ、次のように言うことができます。

あなたが神の優越の中で、あなた自身を超越するなら、

その時、あなたの中で上昇が支配するだろう！

第6講「ポジティブな人とネガティブな人」

(1910年3月10日)

もし、人間の魂を、ある人を別の人と比較するという方法で検証するならば、そこには考えられる限り最高度の多様性が見出されます。この連続講義では、いくつかの典型的な差異とその理由を、性格や気質、能力や力などに関連づけながらお話ししました。今日は、ひとつの重要な差異、つまり、ポジティブな人とネガティブな人の違いについて考えてみましょう。

始めるにあたり、この主題の取り扱いが（そして、これは私の他の講義とも完全に調和することになるでしょう）ポジティブあるいはネガティブなものとして人々を描写するところの表面的ではあるけれども一般的な方法とは何も共通したものを有していない、ということを確認しておきたいと思います。私たちの記述は完全にそれ自体の基盤の上に立っているのです。

まず、ポジティブな、あるいはネガティブな人というとき、それが何を意味しているかについての明確な定義づけといえるようなものをくまなく探してみるのもいいでしょう。すると、私たちは次のように言うかも知れません。人間の魂に関する真正で洞察力のある教えという意味では、ポジティブな人とは外的世界から彼の上に注ぎ込まれるあらゆる印象に直面したとき、彼の内的存在の堅固さと確かさを少なくともある程度まで保持できる人として定義づけできるだろう。したがって、彼は一定の嗜好とともに、外的な印象がそれを妨害することができないようなはっきりとした考えと概念を有しているだろう。また、彼の行動は彼が日常生活の中で出会うところのいかなる一時的な印象によっても影響されないような衝動によって駆り立てられる、と。

一方、ネガティブな人は移り変わる印象に左右されやすく、あれこれの人やグループから彼にもたらされる考えに強く影響されるような人であるということが出来ます。したがって、彼は、彼が考えていたことや感じていたことを容易に変更させられ、何か異なったものを彼の魂の中に取り込むようにさせられます。彼は、その行動において、他の人々からやって来るあらゆる種類の影響によって彼自身の衝動から引き離されるのです。

これが私たちの大まかな定義であり得るのですが、もし、人間本性に深く根ざしたこれらの特徴が実生活においてどのような働きをしているかを調べてみるならば、私たちは、私たちの定義から得るものはほとんどない、そのような便利なレッテルをいくら探してみてもほとんど役に立たない、ということにすぐ確信するでしょう。と申しますのも、もし、それらの定義を実際の生活に適用してみるならば、私たちは次のように言わざるを得ないからです。子供時代からずっと持続してきたある一定の特徴を示す強い熱情と衝動を有する人間はあらゆる種類の善き凡例や悪しき凡例を、それらが彼の習慣に影響を及ぼすことを許さないままに、やり過ごしているであろう。彼は、あれこれのことについて、何らかの考えや概念を形成しており、他のいかなる事実が彼の前にもたらされようともそれにしがみついているだろう。彼が何か他のことを確信できるとしても、その前に無数の障害が山のように積み重なっているだろう、と。そのような人間は確かにポジティブかも知れませんが、それは彼に退屈な人生以外のものをもたらさないでしょう。彼は、彼の経験を豊かに広げるかも知れないものを見もせず、聞きもしないことにより、新しい印象から閉ざされるのです。

別のタイプの人間、いつでも新しい印象を歓迎し、事実が彼の考えに反するならば、いつでもそれを訂正する容易ができていく人間は、（多分、比較的短い間に）全く異なった存在になるでしょう。彼は、彼の人生の経過の中で、ひとつの興味から別の興味へと急ぎ、そのため、彼の人生の特徴は時間の経過とともに全く変化するように見えるかも知れません。「ポジティブ」なタイプの人間と比較して、彼は、確かにより良く人生を理解しているにもかかわらず、私たちの定義づけにしたがって、私たちは彼を「ネガティブ」と呼ばなければならないのです。

もう一度、頑強な性格を有する人間についていえば、彼の人生は習慣と慣例に支配されており、芸術の宝庫のような国を旅するときにも、彼は、彼の魂にあまりにも多くの型にはまった反応を背負わせているために、芸術作品の前を次々に通り過ぎるか、せいぜい、ベデカー旅行案内書を開いて、どれが一番重要かを調べる程度で、結局、美術館から美術館、景色から景色へとずっと見て歩いた後で、少しも豊かにな

っていない魂をもって家に帰ることになるのです。それでも、私たちは彼を非常にポジティブな人間と呼ばねばならないでしょう。

反対に、誰か別の人がちょうど同じコースを旅するとしても、彼の性格は、どの絵にも没頭するというようなもので、ある絵に熱中して自分を見失うかと思えば、次の絵についても、そしてその次の絵についてもという具合です。こうして彼は、あらゆる些細なことに捕らわれる魂とともに歩き通し、その結果、どの印象も次の印象によってぬぐい去られ、そして、彼の魂の中に一種のカオスをもって家に帰るのです。彼は非常にネガティブな人間であり、もうひとりの人間のちょうど対極にあります。

この二つのタイプについて、私たちはもっと様々な例を挙げることもできるでしょう。あまりにも多く学んだために、どんなことについても確かな判断ができないほどネガティブな人物についても記述することができます。彼はもはや何が真実で何が偽りなのかを知らず、人生と認識に関して、厭世主義者になりました。もうひとりの人間も同じ印象をちょうど同じだけ吸収しましたが、彼はそれに働きかけるとともに、彼が獲得している叡知の全体にそれらをどのように適合させればよいかを知っています。彼は、言葉の最良の意味で、ポジティブな人間でありましょう。

子供は、もし、自分の生来の性質を主張して、それに反するものすべてを拒絶しようとするならば、大人達に対して暴君的にポジティブになり得ます。一方、多くの経験や間違い、絶望を経てきた人間でも、あらゆる新しい印象に捕らえられ、相変わらず、元気づけられたり、打ちひしがれたりするかも知れません。彼はその子に比べるとネガティブなタイプといえるでしょう。要するに、私たちが、ポジティブあるいはネガティブな人とは、というような決定的な問いに正しく接近することができるのは、その人の人生全体を、何らかの理論的な考えにしたがってではなく、その多様性のすべてにおいて私たちに作用させ、人生における事実やできごとを整理するためにのみ概念を用いるときだけです。と申しますのも、人間の魂をその個人的な特色において議論する場合には、私たちは最高度の重要性をもつ何かに触れることになるからです。もし、私たちが、人間を考察するにあたって、私たちがそう呼ぶところの（この場で、しばしば議論されるような）進化を免れることのできないところの生きる実体としての彼を、その完全な存在性のすべてにおいて考察するのとなければ、これらの問いはずっと単純なものになるでしょう。

私たちは人間の魂をひとつの進化段階から次の進化段階へと移っていくものとして見るのですが、真の精神科学の意味で言うならば、ある人物の誕生から死までの人生をいつも単一の経過を辿るものとして思い描くことはありません。と申しますのも、私たちは、彼の人生が以前の各地上生の続きであり、後の各地上生の出発点であることを知っているからです。人生をその様々な受肉の全体を通して観察するならば、ある地上生においては発達がいっくらかゆっくりしているため、その人は同じ様な性格や考えをずっと保持する、というようなことが容易に理解できます。別の地上生において、彼は、それだけよけいに、彼を新しい段階の魂的生活へと導くような発達に追いつかなければならないでしょう。たったひとつの人生を探求するということは、いつでも、最高度に不十分なのです。

さて、ポジティブあるいはネガティブなタイプに関するこれらの示唆が、これまでの講義の中で敷かれた路線に沿って人間の魂を探求する際に、どのように私たちの役に立ち得るのか、と問うてみましょう。私たちは、魂というものが、何気ない一瞥によってそのように見えるような、概念、感情、そして考えの混沌とした流れでは全くない、ということを示しました。そうではなく、それは明確に区別されるべき三つの構成体を有しているのです。これらの内、最初の、そして、最も低次のものを、私たちは感覚魂と呼びました。その基本的な姿を最もよく見ることができるのは、比較的低い発達段階にあり、完全に熱情や衝動、欲望や願望のままに生き、自分の内に生じるあらゆる欲望や願望をひたすら追求する人間においてです。このタイプの人間の中では、人間の魂の自意識的な核である自我は熱情、欲望、そして共感と反感の波打つ海の中にあり、魂の中を嵐が吹き抜けるたびに彼はその影響を被るのです。そのような人間が彼の性向にしたがうのは、彼がそれらを支配しているからではなく、それらが彼を支配しているからです。そのため、彼はあらゆる内的な要求にそのはけ口を与えます。彼の自我がこの波打つ欲望を超えて自らを上昇させることは滅多にありません。私たちは、魂がさらに発達していくとき、いかに自我が力強い中心点から働くかをますますはっきりと見ることとなります。

進化が進むに連れて、当然の成り行きとして、誰の内にもある魂のより高次の部分が感覚魂に対して一定の支配力を獲得するようになります。私たちはこの高次の部分を悟性魂あるいは心魂と呼びました。人があらゆる性向や衝動にしたがうときにも絶えずそこに存在しているとはいえ、自我が彼の性向や欲望を

コントロールし、彼が受け取るところの絶え間なく変化する印象に彼の内的な生活におけるある種の一貫性を賦課し始めるときにのみ効果的になることができるような何かが彼の魂の中に現れます。こうして、この魂の第二の構成体、悟性魂が優位になるとき、私たちの人間についての表象はより深いものになるのです。

私たちは、次に、魂の最も高次の構成体、意識魂について語りました。そこでは、自我が十全なる力強さをもって前面に出てきます。そのとき、内的な生活は外的世界に向かいます。その概念的な表象や考えは、もはや、単に熱情をコントロールするためにそこにあるものではありません。何故なら、この段階において、魂の内的な生活の全体は、外的世界を映し出し、その認識を獲得するように自我によって導かれるからです。このことは意識魂が魂の生活を支配するようになったことを示しています。これら三つの魂の構成体はどの人間の内にも存在しているのですが、いずれの場合にも、それらの内のひとつが支配的になっているのです。

前回の講義では、魂は発達においてさらに先に進むことができるということ、実際、もし、私たちが言葉の真の意味で人間であるべきであるならば、それは日常生活においてさえ先に進まなければならない、ということが示されたのでした。彼の行動への動機が完全に外的な要求に由来するような人間、ただ共感と反感のみによって行動へと駆り立てられるような人間は、彼の内にある人間本性の真の性質に気づこうと努力したりはしません。精神的な世界から導き出される道徳的な考えや理想へと自分自身を上昇させるような人だけがこれを達成するのです。何故なら、私たちが新しい要素によって魂の生活を豊かにするのはこのようにしてだからです。人間は、彼の内的な存在によって知られざる深みから引き出し、外的世界に刻印するところの何かを人生に持ち込むことができるからこそ、「歴史」を有しているのです。同様に、もし、私たちが外的な経験のある考えに結びつけることができなかつたとすれば、決して世界の秘密についての真の認識に到達することはないでしょう。私たちはそれらの考えを私たち自身の中にある精神から取り出し、それらを外的世界に対置します。そして、私たちは、そうすることによってのみ、外的世界をその真の姿において把握し、説明することができるのです。このように、私たちは私たちの内的な存在に精神的な要素を注ぎ込み、外的世界だけからは決して得られないような経験で魂を豊かにするのです。

神秘主義についての講義で述べられたように、私たちは、しばらくの間、外的世界の印象や刺激から自分自身を切り離すことによって、つまり、魂を空にするとともに、通常は日常生活の絶え間ない経験によってうち消されているけれども、今や炎へと燃え上がらせることができるような（マイスター・エックハルトが言うところの）小さな炎に没頭することによって、魂的生活のより高次の形態へと上昇します。この階級にある神秘家は、日常のレベルを超えた魂的生活へと上昇します。つまり、彼は、世界の神秘が彼の魂の中に置いたもののヴェールを取り除くことによって、彼自身がその世界の神秘の中に沈潜するのです。その次の講義では、私たちは、もし、人がそれを静かに受容する態度で未来を待ち受け、そして、過去を振り返るにあたっては、彼の日常生活において明らかになるようないかなるものよりも偉大な何かが彼の内にはある、ということを感じるならば、彼は、祈りの中で、この彼の上にそびえ立つより偉大なものを見上げざるを得ないようにさせられるであろうということ、つまり、彼は、その中で、彼の通常の生活を超越する何かに向けて、自分自身を超えて内的に上昇するのだ、ということを見てきました。そして、最後に、イメージーション、インスピレーション、そして、インテュイションという3つの段階を通じて人間を導くところの真の精神的な訓練によって、彼は、光と色の世界が盲目の人には閉ざされているように普通の人々には知られていない世界へと成長することができる、ということを見てきたのでした。こうして、私たちは、いかに魂が通常のレベルを超えて成長することができるかを見ることによって、それが限りなく多様な段階を経て発達していく様子を垣間見ることができたのです。

もし、私たちが周囲にいる人たちを見回してみるならば、彼らはきわめて異なった発達段階にある、ということが分かります。ある人は、自分の魂をある一定の段階にまで上昇させており、自分が獲得したものを死の門を通過して運んで行くことができる可能性を有している、ということを示すでしょう。もし、人々がある段階から別の段階へと移っていく様子を研究するならば、私たちはポジティブな性質とネガティブな性質という概念へと至るのですが、あるひとりの人がポジティブ、あるいはネガティブであると言うことはできません。何故なら、彼は彼の発達段階に応じて両方の特徴を示すであろうからです。

ある人は、当初、最も強固で最も頑固な衝動を彼の感覚魂の中に有しているかも知れません。そのとき、

彼ははっきりとした衝動、熱情、欲望に駆られる一方、彼の自我中心は比較的ぼんやりしたものとどまり、しかも自分でそのことに気がつかないかも知れません。この時点で、彼は非常にポジティブであり、ポジティブなタイプの人間としてその人生を追求します。しかし、もし彼がその状態にとどまるならば、彼は進歩することができません。彼は、その発達過程において、ポジティブな人間からネガティブな人間に変化しなければならないのです。何故なら、彼は、彼の発達が要求するものが何であれ、その受容に向けて開かれていなければならないからです。もし、彼が彼の感覚魂の中のポジティブな性質を抑制し、それによって新しい印象が流れ込むことができるようにする準備をしていないとすれば、つまり、もし、彼が彼に自然に備わったポジティブな性質から抜け出し、ある種のネガティブな受容性を獲得することができないとすれば、彼はそれ以上先に進むことができないでしょう。

ここで私たちは魂にとって必要であるとはいえ、危険の源泉ともなり得る何か、つまり、私たちの人生を安全に導くことができるのは魂に関する親密な知識のみである、ということをはっきりと示すような何かに触れることとなります。もし、私たちが魂の生活に影響を及ぼすようなある一定の危険から逃れようとするならば、私たちは進歩することができない、というのが実際のところなのです。そして、ネガティブな人間にとって、彼が外的な印象の流れ込みに対し、そして、それらと一体になることに対して開かれているために、この危険は絶えず存在しているのです。このことは、彼がよい印象ばかりではなく、危険で悪い印象もまた取り込むであろう、ということの意味しています。

非常にネガティブな人間が別の人間に出会うとき、彼は簡単に我を忘れ、判断や理性とは何の関係もないありとあらゆることに聞き入り、その人間が言うことばかりではなく、彼がすることにも影響を受けるでしょう。彼は、その人間に非常によく似てくるほどまでにその行動やお手本を真似するかも知れません。そのような人物は確かによい影響に対して開かれているかも知れませんが、あらゆる種類の悪い刺激にも応答し、それを自分のものにするという危険にさらされることになるでしょう。

もし、私たちが普通の生活から私たちの周囲で活動する精神的な事実や存在とは何かを見ることができると水準へと上昇するならば、ネガティブな魂の性質を有する人間は、外的な生活においてはほとんどそれとは分からないようなあの曖昧で漠然とした印象からくる影響にとりわけ開かれている、と言わざるを得ません。例えば、実際、人間が独りでいるときには、多人数の集団の中にいるときの彼とはかなり異なっている、その集団が活動的であるときには特にそうである、というようなことがあります。彼が独りでいるときには、彼は彼自身の衝動に従い、たとえ弱い自我といえどもその活動の源泉をそれ自身の中に探求するでしょう。しかし、多人数の集団の中では、一種の集団魂が存在しており、そこにいる人たちに発するあらゆる種類の衝動や欲望、評価がともに流れているのです。ポジティブな人間はこの集合的な実体に容易に自分を明け渡すことはないかも知れませんが、ネガティブな人間は絶えずそれに影響されるでしょう。ですから、私たちは方言で詩を書いたローゼガーが二、三の言葉で表現したところの真実を何度でも経験することができるのです。彼の次のような言葉は乱暴ですが、そこには真実の核心以上のものがあります。

ひとりで人間

ふたりで皆の衆

もつといりゃあ畜生だ

人は独りでいるとき、仲間といるときよりも賢い、ということに私たちはしばしば気がつきます。と申しますのも、そのとき、彼らは、ほとんどいつでも、そこで支配的な平均的雰囲気にと左右されるからです。こうして、ある人ははっきりとした考えや感情を持たずに集会に出かけ、以前は特に気にも留めなかった何らかの論点を、講演者が熱心に語るのを聴きます。彼は、その講演者からは、その講演に応える聴衆の歓呼からほどには影響されなかったかも知れませんが、その歓呼にはしっかりと心をつかまれ、全くの確信を持って家に帰るのです。

この種の集団心理は人生において大変大きな役割を演じます。それはネガティブな魂がさらされる危険、特に、党派主義の危険を示しています。と申しますのも、私たちが誰かに何かを確信させようとして失敗するにしても、もし、彼を党派やグループの影響下に置くことができるならば、そこには魂から魂へと広がる集団心理が働いているために、そうすることは比較的容易だからです。ネガティブなタイプの人にとっての大いなる危険がここにあるのです。

私たちはさらに先に進むことができます。これまでの講義で、いかに魂が、精神生活において、より高

次の領域に自ら上昇することができるかを見てきました。そして、私の「神秘学概論」の中で、魂がこの段階を追った上昇を達成するために、どのように自らを訓練しなければならないかが説明されているのを皆さんは見出されるでしょう。魂は、まず最初に、自らの中のポジティブな要素を抑制し、故意にネガティブな雰囲気にすることによって、新しい印象に向けて自らを開放しなければなりません。そうする以外に、それは進歩することができないでしょう。私たちは、精神的な探求者が存在のより高次の段階に到達することを望むならば、彼が何を為すべきかについて、何度も説明してきました。彼は、通常は眠りにおいてもたらされるような、魂が外的な刺激を全く受容しない状態を故意に、そして意識的に生じさせなければなりません。つまり、彼は、彼の魂が全く空になるように、すべての外的な印象を締め出さなければなりません。そして、彼は、もし、彼が初心者であるとすれば、彼にとって最初は全く新しいものに見える印象に向けて彼の魂を開かなければなりません。これは、彼が自分自身をできるだけネガティブにしておかなければならない、ということの意味しています。そして、神秘主義的な生活におけるあらゆるもの、そして、私たちが内的な観想、内的な瞑想と呼ぶところのより高次の世界の認識が魂の中に生じさせるのは、基本的には、正にネガティブな雰囲気なのです。それは避けられないことです。人が外的世界からの印象をすべて抑制し、そして、完全に自分自身の中に沈潜するとともに、以前は彼のものであったポジティブな性格を消し去るような状況を意識的に達成するとき、彼はネガティブに、そして自分自身に没頭するようにならざるを得ないのです。

もっと容易で外的な方法を取るときにもこれと同様のことが起こります。この方法自体が私たちにより高次の生活に導くことはありませんが、それは私たちの上昇のための支えを与えてくれます。例えば、一種の動物的なやり方でポジティブな衝動を引き起こすような食べ物から特別な食事、すなわち野菜やそういったものに移行するとき、そのようなことが起こります。確かに、菜食主義やあれこれのものを食べることによって高次の世界に上昇することができるようになるわけではありませんし、それによってあの高みへと上りつめることができるとすれば、それはあまりに安易なことでありましょう。私たち自身の魂への働きかけ以外に、私たちがそこへ連れていくことができるものは何もないのです。けれども、栄養における特別な形態が有する妨害的な影響を避けることによって、その働きかけをもっと容易なものにすることはできます。より高次の、より精神的な生活を送ろうと試みる人は誰でも、ある種の食習慣を採用することによって、彼の力を高めることができる、ということ容易に確信することができます。と申しますのも、もし、彼が頑強でポジティブな要素を彼の中に育てる傾向のある食物を遠ざけるならば、彼はネガティブな状態へともたらされることになるからです。

真の精神科学の基盤の上に立ち、いかさまとは無縁の人であれば誰でも、真の精神的な生活へと導く努力に実際に結びついた事柄を、たとえそれが外的なものであったとしても、認めないということは決してないでしょう。しかし、これは、私たちが悪しき精神的な影響にさらされるかも知れない、ということの意味しています。私たちが精神科学によって自分を教育し、日常的な印象をぬぐい去るとき、私たちは絶えず私たちの周りにいる精神的な事実や存在たちに私たち自身を開放します。確かに、彼らの中には、適切な器官が私たちの中で展開するとき、私たちが最初に知覚するのを学ぶところの善き精神的な力や勢力がいるかも知れませんが、私たちは悪しき精神的な力や勢力にも曝されることとなります。それは、ちょうど、調和のとれた音の調べを聞くためには、不調和な音にもまた開かれていなければならないのと同じです。もし、精神的な世界に貫き至ることを欲するならば、その経験の悪しき側面にも遭遇しやすくなる、ということをお確かにおかなければなりません。私たちがネガティブな性質をもって精神世界に接近すべきであるならば、私たちは危険につぐ危険に脅かされることになるのです。

精神的な世界から目を移し、通常の生活について考えてみましょう。例えば、菜食主義は、何故、私たちがネガティブにするのでしょうか？もし、そのようなことが推奨されているからとか、あるいは確かな判断もなく、私たちの生活様式や行動様式を変えることもせずに、単に原則の問題として菜食主義者になるとすれば、ある種の条件下で、それは私たちの上に、おそらくある種の身体的な特徴の上に、その他の影響との関連で、深刻な弱体化をきたすような影響を及ぼすかも知れません。けれども、もし、私たちが、外的な生活に発する使命ではなく、豊かに発達する魂の生活に発する新しい使命を含む自主的な生活に入っているとすれば、食習慣における新しい路線を取るということも、そして、以前の私たちの食習慣から生じているであろう何らかの障害を取り除くということも、非常に有益であり得るのです。

物事は、異なる人々に対して、非常に異なった効果を及ぼします。ですから、精神科学の探求者はここ

で何度も強調されてきたところの次のようなことがらに固執します。つまり、人は新しい印象を受け取るために必要とされるネガティブな魂的性質をただ単に育成したり、内的な観照や内的な集中を発達させることに満足したりすべきではない、何故なら、新しい段階へと上昇すべき生活は、それを満たし、支えることができるほど十分に力強い内容を有していなければならないからである、ということを実に明らかにすることなく、高次の世界へと上昇する方法を誰かに伝えることはありません。もし、私たちが、精神的な世界をのぞき見ることを可能にするであろうような力を獲得する方法を単に誰かに示すとすれば、私たちはその人を、その種の努力にはつきもののネガティブな性質を通して、あらゆる種類の悪しき精神的な力に曝すこととなります。けれども、もし、彼が精神的な探求者によって伝えられるところの高次の世界について喜んで学ぶのであれば、彼は決して単にネガティブなままにとどまることはないでしょう。何故なら、彼は、より高次の段階にあるポジティブな内容を彼の魂に浸透させることができるような何かを有することになるからです。私たちが、探求者は単により高次の段階に向けて努力するだけでなく、同時に、精神科学が伝えるところのものを注意深く研究しなければならない、ということを実に何度も強調するのはこのような理由によります。新しい領域を経験すべき人はそれらに対して受容的であり、したがってネガティブでなければならない、という事実を精神的な探求者が考慮するのはこのようにしてなのです。

私たちは、私たちが意識的に魂の開発に乗り出すときに呼び出すべきものを、通常の生活の中で出会うような様々な人々の中に見ることができます。それは、魂が、ただ現在の生活の中でのみ発達を遂げているのではなく、以前の生活の中で発達を経験した後、地上的な存在状態に入るという決定的な段階にあるからなのです。私たちが現在の生活の中で段階的に先に進むとき、ちょうどポジティブな段階に進むためにネガティブな性格を獲得しなければならないように、多分、私たちが最後に死の門を通り、ポジティブあるいはネガティブな性格をもって新しい生活に入ったときにも同様のことが起こったかも知れません。私たちがポジティブな性格とともに人生へと送り出したデザインは、私たちが今いる場所に取り残し、さらなる発展にとってのブレーキとして働くでしょう。何故なら、ポジティブな傾向とは明確に規定された性格を形成するものだからです。一方、死と新たな誕生の間に、多くのものを魂の中に受け入れるのを私たちに可能にするのは、正に、ネガティブな傾向なのです。しかし、それは私たちが地上の生活における多くの偶然のできごと、特に他の人々が私たちに投げかける印象にも曝します。ですから、ネガティブなタイプの人々が他の人々に出会うとき、その人々の性格が彼の上に刻印づけられるのがよく見られます。彼が友人や好意的な関係にある誰かと親交を結ぶとき、いかに自分がますます相手に似てくるかを自分自身で感じることもできるでしょう。結婚や親密な友人関係の場合、筆跡さえ似てくるかも知れません。それを観察すれば、ネガティブな人の筆跡が本当にその結婚相手の筆跡にますます似てくるのが分かるでしょう。

このように、ネガティブなタイプの人というのは他の人、特に親しい関係にある人の影響を受けやすいのです。ですから、彼らはある一定の危険、つまり、自らを失い、自分たちの魂的生活や自我感覚が消されてしまうかも知れない、という危険に曝されているのです。

ポジティブなタイプの人にとっての危険とは、彼が他の人々からの印象を簡単には受け入れられず、彼らの特徴的な性質を評価するのにしばしば失敗するかも知れないということ、そのため、彼はすべての他の人のそばを通り過ぎ、誰とも友人関係や親しい交わりを築くことができないだろうということです。ですから、彼には、彼の魂が硬化し、荒廃する危険があります。

人々をそのポジティブあるいはネガティブな側面において考察するとき、人生に対する深い洞察が得られます。そして、これは人々が彼らの周りの自然に対するときの様々な方法にも当てはまります。では、ある人が他の人々からの影響や、外的世界からの印象を受け取る時、その人に働きかけているものとは何なのでしょう？

魂に絶えずポジティブな性格を与えているものがひとつあります。それは、現代人にとって、その発達段階に関わらず、人生の中で生じるであろうあらゆる状況あるいは関係を明かにしてくれるところの健全な判断であり、合理的な検証です。この反対が、健全な判断の喪失であり、ポジティブな性質による防御が破られるような仕方では印象が受け取られる場合です。私たちは、ある種の人間活動が無意識の中に落ち込むとき、それはしばしば通常の判断が意識的に行使されているときよりも強力な影響力を人々に及ぼす、ということさえ観察することができます。

不幸なことに、特に、精神科学運動にとって不幸なことなのですが、精神世界に関する事実が厳密に論

理的な形態において、つまり、それ以外の生活領域においてはよく認知された形態で示されると、人々はそれから逃げ腰になる傾向があるのです。彼らは、そのような事実が原因と結果の合理的な関係において示されるのを、しっかりこないとと思うのです。一方、彼らは、これらの情報が彼らの判断を喚起しないような方法で伝えられるときには、はるかに容易に反応するのです。合理的な言葉で伝えられる精神世界についての情報にはきわめて疑り深い反面、漠然とした力によって吹き込まれたように見える霊媒から聞いたことは何でも信じ込む人たちがいます。自分が何を言っているのか知らず、自分が知っている以上のことをしゃべるこれらの霊媒たちは、自分が何を言っているのかを正確に知っている人たち以上に多くの信者たちを引きつけます。少なくとも半意識状態にあり、明らかに何か別の力に捉えられている人でなければ（このように言われるのを私たちはよく耳にするのですが）、どうして精神世界のことを私たちに告げられるだろうか？これは、精神世界から引き出された事実を「意識的に」伝えることに反対する理由としてよく言われることです。健全な判断に基づき、合理的な言葉で伝えられる情報に注意を払うよりは、霊媒のところを走る方がはるかに一般的である理由がこれなのです。

精神世界に由来するものは、それが何であれ、意識を排除された領域へと突き落とされると、魂のネガティブな性格に働きかける恐れがあります。何故なら、このような性格は、意識下の暗い深みからの影響が私たちに迫るとき、いつでも前面に出てくるものだからです。綿密な観察が示すように、比較的愚かな人物が、そのポジティブな性質のおかげで、より知的な人物に対し、もし、後者が意識下の暗闇から現れるあらゆるものに印象づけられやすい性格であるとすれば、強い影響力を持つ、ということがよくあります。こうして、私たちは、何故、人生においては、繊細な心をもった人たちが頑強な性格の人たち、その主張が彼ら自身の衝動と傾向だけから導き出されるような人たちの餌食になる、というようなことが起こるのかを理解します。

このことにさらに一步踏み込むならば、ある顕著な事実に至ります。単に、ときとして理性のあるところを見せないだけなのではなくて、心の病に罹っており、彼の混乱した状態から湧き出すようなことを口にする人について考えて下さい。彼は、彼が病気だと気づかれない限り、繊細な性質を持った人に対し、普通ではない強さの影響を及ぼすかも知れません。

このようなことすべては人生の叡知に属しています。ポジティブな性質を持った人間は道理に対して開かれていないだろう、一方、ネガティブなタイプの間は、しばしば、彼には締め出すことのできないような非合理的な影響に左右されやすいだろう、というようなことに気づかない限り、それを正しく理解することはできません。より緻密な心理学はこれらの事柄を考慮しなければならないでしょう。

さて、個々人がお互いに及ぼしあう印象についてはこれくらいにして、人々が彼らの周囲の環境から受け取る印象に移りましょう。ここでもまた、私たちは、ポジティブ、ネガティブという文脈の中で、重要な結果を得ることができます。

例えば、ある特定のテーマについて、非常に実り多い働きをし、それに関連する多数の事実を集積した探求者について考えてみましょう。これによって、彼は人類にとって何か有益なことを成し遂げました。今、彼がこれらの事実を彼が受けてきた教育やそれまでの人生から得られた考え、あるいは、それらの事実についての非常に一面的な見方を提示するかも知れないようなある特定の理論や哲学的な観点から得られた考えに結びつける、と想像してみてください。彼がその事実から推量した概念や考えは彼自身の内省的な思考の結果であることから、魂に対して健全な影響を及ぼすのです。何故なら、彼は、彼自身の哲学を苦心して作り上げることによって、彼の魂にポジティブな感情を吹き込んでいるからです。けれども今、彼が何人かの追従者を見出すと想像して下さい。彼らはその事実について自分でよく調べたのではなく、単にそれについて聞いたり読んだりした人たちです。彼らは、その探求者が彼の研究室での仕事や勉強によって自分自身の中に引き起こしたところの感情に欠けているでしょう。そして彼らの気分は完全にネガティブであるかも知れません。こうして、全く同じ教義が、たとえそれが一面的なものであるにしても、その一団の指導者を彼の魂においてポジティブにする一方、単にその教義を繰り返すためにそこに群れ集まった追従者達に対しては、不健全でネガティブな影響を及ぼし、彼らをますます弱めるかも知れないのです。

これは何か人類の文化史全体を通して流れているところのものです。今日でも、完全に唯物的な世界観をもった人たちが、そして、彼らは彼ら自身の発見に基づいてその世界観を発展させようと精力的に働いているのですが、いかに生き生きとしてポジティブな性格であるか、会うのが楽しみであるような人たち

であるかが分かります。しかし、彼らの追従者達の場合、同じ基本的な考えを頭に入れて持ち運んでいるとはいえ、彼ら自身の努力によってそれらを獲得したわけではないために、それらの考えには不健康で、ネガティブで、弱体化させるような効果があるのです。こうして、人が自分自身で哲学上の観点を達成するか、あるいは単に他の人からそれを取り入れるかでは大きな違いがある、とすることができます。前者はポジティブな性質を、後者はネガティブな性質を獲得するのです。

このように、私たちの世界に対する態度は私たちをポジティブにもネガティブにもすることができるものである、ということが分かります。例えば、自然に対する純粋に理論的なアプローチは、特に私たちが実際に自分の目で見ることが出来るあらゆるものを見落とすとすれば、私たちをネガティブにするのです。自然に関する理論的な認識は存在しなければならないのですが、この認識（動物、植物そして鉱物の系統的な研究から得られ、自然法則として概念や考え方の中に体现したところの認識）は、私たちのネガティブな性質に働きかけ、私たちをこれらの考えの中に閉じこめるだろう、という事実に対して盲目であってはなりません。一方、自然がその雄大さの中で私たちに差し出すものすべてに対し、生き生きとした鑑賞力を持って応えるならば、つまり、例えば、花をバラバラに引き裂くのではなく、その美に反応しながら、その中に喜びを見出すとすれば、あるいは、太陽が昇るとき、朝の光をいっぱい受けながら、それを天文学的に検証するのではなく、その栄光に見入るとすれば、私たちの魂の中にはポジティブな性質が呼び覚まされます。私たちの魂は、私たちが世界に関する理論的な概念を通して受け入れるところのいかなるものにも巻き込まれることはありません。そのとき、私たちは、他の人たちがそれを私たちに口述させるがままにするのです。しかし、私たちが自然の現象に快や不快を感じる時、私たちの魂全体はそれに生き生きと関わっています。自然の真実が自我に左右されることはありませんが、私たちを喜ばせたり、不愉快にしたりするものは違います。何故なら、私たちが自然に対し、どのように反応するかは、私たちの自我の性格にかかっているからです。

こうして、私たちは次のように言うことができます。自然への生き生きとした参加はポジティブな性質を、自然の理論化はネガティブな性質を発達させる、と。ただ、このことは、繰り返しになりますが、一連の自然現象を最初に分析する研究者が、彼の発見を単に受け入れたら、それらから学んだりする人よりもはるかにポジティブである、という事実によって修正されなければなりません。この違いは教育の幅広い分野において注意を払われるべきものです。これに関連して、今日お話ししてきたような事柄についての意識が存在していた場所では、人間の魂のネガティブな性格がそれ自身のために養成されることは決してなかった、という事実があります。プラトンは、彼の哲学のための学院への入り口に、何故、「幾何の知識を有するものだけが入ることを許される。」という言葉を書き刻んでいたのでしょか？それは幾何と数学が他人の権威によっては受け入れることのできないものだからです。私たちは、私たち自身の内的な努力によって幾何をやり通さなければならず、ただ、私たちの魂のポジティブな活動によってのみそれを修得できるのです。今日、このことに注意が払われていたならば、あたりをうるさく飛び回る哲学大系の多くは存在していなかったでしょう。と申しますのも、幾何学のような思考体系が打ち立てられるために、いかに多くのポジティブな働きが積み込まれたかに気づく人は誰でも、人間精神の創造的な活動に対して敬意を払う、ということを学ぶであろうからです。ところが、例えば、ヘッケルの「世界の謎」を、それがどれほど苦心して作りだされたものであるかに思いをはせることごとく読む人は、全く容易に新しい世界観へと至るかも知れませんが、彼は魂の純粋にネガティブな状態からそうすることになるのです。

さて、精神科学、もしくは人智学には、何か無条件にポジティブな反応を要求するものがあります。もし、誰かが、よく知られた近代的な装置、写真やスライドを使えば、動物だの自然現象だのが彼の目の前でスクリーンに映し出されるのですよ、と言われるならば、彼はそれをネガティブな気持ちで、全く受動的に見ることになるでしょう。ポジティブな性質は必要とされず、考えることすら必要とされないかも知れません。あるいは、彼は氷河が山を下っていくときの様々な局面を映し出すところの一連の写真を見せられるかも知れませんが、それも全く同じことです。これらの例は、このようにネガティブな態度に訴えかけるものが、今日、いかに幅広く存在しているかを示しています。人智学はそれほど単純ではありません。写真は、せいぜい人智学的な考え方のいくつかを象徴的に示唆することができるだけでしょう。人はその魂の生活を通してのみ精神の世界に近づくことができるのです。実り多いやり方で、精神科学に精通したいと望む人は誰でも、その最も重要な要素が見せ物の題材になったりすることはない、ということに気づかなければなりません。ですから、彼への助言は、活動し続けるということ、それも彼の魂とともに、そ

して、そのことによって、その魂のもっともポジティブな性質を引き出すということです。実際、精神科学はこれらの性質を人間の魂の中に育成するのに、最高の意味で、ふさわしいものです。それは魂の中で眠っている力をかき立てる以外のことは要求しないのですが、ここにもまたその世界観の健全さが存在しているのです。人智学は、あらゆる魂に本来備わっている活動に訴えることによってその隠された力を呼び覚まし、それらが身体のすべての活力と精力に浸透するようにします。ですから、それは、人間の全体に対し、十全なる意味において、健康を与える効果を有しているのです。そして、人智学は、集団心理によってではなく、ただ個々人の理解力を通してだけ呼び出される健全な理性にのみ訴えかけ、集団心理が引き起こすあらゆるものを放棄しているがゆえに、人間の魂の最もポジティブな性質を考慮するものなのです。

このように、私たちは、作り話ではなく、いかに人間がふたつの流れ、ポジティブな流れとネガティブな流れのただ中に置かれているかを示す多くの事例を集めて来ました。彼は、より低次のポジティブな段階を離れ、彼の魂が新しい内容を得ることができるようなネガティブで受容的な状態へと赴くことなしに、さらに高次の段階に上昇することはできません。つまり、彼はこのネガティブな状態をずっと伴っていくことによって、より高次の段階において、もう一度ポジティブになるのです。もし、私たちが自然を正しく観察することを学ぶならば、私たちは、いかに人間が、世界の叡知による配剤にしたがって、ポジティブな位相からネガティブな位相へと、そして再びポジティブな位相へと導かれるかを見ることができます。

このような観点から、特別なテーマ、例えば、アリストテレスの有名な悲劇の定義について学ぶのは有意義なことです。彼によると、悲劇とは、観客の中に恐れと哀れみを引き起こすことができるような完全に劇的な演技を、これらの感情が浄化され、その罪障が消滅するような仕方で私たちの前に提示するものです。人間は、最初、彼の通常のエゴイズムとともにその存在状態に入るに際し、非常にポジティブであるということ、つまり、彼は彼自身を硬化させるとともに、他の人間から自分を切り離す、ということに注意しましょう。けれども、その後、もし、彼が、他の人たちの悲しみに同情したり、彼らの喜びを自分の喜びとすることを学ぶならば、彼は非常にネガティブになるのです。それは、彼が自分の自我から離れ、他の人々の感情に参入するからです。

私たちがネガティブになるのは、誰か別の人に降りかかるように見える何か漠然とした運命、つまり、私たちが親密な共感をいただいている誰かに、明日、降りかかるかも知れないできごとで深く心を動かされる時です。誰かが自分を破局へと導くであろう行いに向けて急ぐとき、つまり、私たちにはそれを予見することができるけれども、自分の衝動に突き動かされているために、彼にはそれを避ける力がないような破局に急ぐとき、誰が震撼せずいられるでしょうか？ 私たちはそれがもたらすはずのものを恐れるのですが、そのことが私たちの中に魂のネガティブな状態を醸し出すのです。何故なら、恐れはネガティブなものだからです。もし、私たちが、危険に満ちた未来に近づきつつある誰かのために恐れをいただくことができなるとすれば、私たちはもはや人生の中で真の役割に与ることはないでしょう。私たちがネガティブにするのはそのような恐れと共感なのです。悲劇が私たちの前にヒーローを登場させるのは、私たちが再びポジティブにするためです。私たちが彼の行為に共感を覚え、そして、彼の運命を非常に身近に感じることで、私たちの運命が目覚めさせられるのです。同時に、そのヒーローの姿は、演劇の進行とともに、私たちの恐れや哀れみが純化されるような仕方で私たちの前に現れます。つまり、それらはネガティブな感情から、芸術の働きによって私たちに付与されるところの調和的な満足へと変化させられ、それによって、私たちが再びポジティブなあり方へと上昇させられるのです。

こうして、古代ギリシャの哲学者による悲劇についての定義が私たちに示すのは、いかに芸術が必然的にネガティブな状態の感情をポジティブな状態に変容させるところの人生における要素であり得るか、ということです。私たちは、当初、より低次の発展段階からさらに発達していくために、ネガティブでなければならないのですが、芸術はそのあらゆる領域において私たちがより高次の水準へと導くのです。

美は、さしあたり、私たちが私たちの現在の段階を超えて上昇するのを助けるために私たちの前に置かれるように意図されたものである、と見なければなりません。そのとき、通常の人生は、もし、私たちが既に芸術を通してより高次の水準に上昇させられていたとすれば、魂のより高次の状態から放射するもので浸透されるのです。

こうして、私たちは、いかにポジティブとネガティブな性質が、個々人之間だけではなく、人間の一生を通じて交替するものであるか、そして、それが、いかに個人とそして人類全体をある受肉から次の受肉

へと上昇させることに寄与するものであるかを理解します。もし、時間があれば、いかにポジティブあるいはネガティブな時代と歴史的な年代があったかを容易に示すこともできたでしょう。ポジティブとネガティブの考え方はあらゆる魂の生活領域と広く人類全体の生活領域に光を当ててののです。

ある人がいつもネガティブで、別の人がいまもポジティブであるというようなことは決して起こりません。私たちひとりひとりが存在の様々な段階で、ポジティブとネガティブな状態を通過しなければならないのです。その考え方をこの光の下に見るときにのみ、私たちはそれを真実として、したがって、人生を実際に生きるための基本として受け入れることができるのです。こうして、私たちは、この連続講義の始めと終わりに置いてきた言葉、つまり、人生をあまりにも深くのぞき見ることができたために「変人」と呼ばれた古代ギリシャの哲学者、ヘラクリトスの「いかなる道を探求しようとも、魂の境を見出すことは決してできないだろう。魂の存在とはそれほど包括的なものなのだ。」という言葉が今日の議論でも確認しました。

さて、誰かが次のように言うかも知れません。「では、魂についてのあらゆる探求は無駄に違いない。何故なら、もし、その境界を見つけることが決してできずとすれば、いかなる探求もそれを確定できず、そもそもそれについて何かを知るといことは絶望的なことなのだから。」と。ただネガティブな人だけがこの路線を取ります。ポジティブな人は次のように付け加えるでしょう。「魂の生活があまりにも深遠で、知識が決してそれを取り巻くことができないことを神に感謝する。何故なら、それは、今日、理解したことを明日は越えていくことができ、それによって、より高次の水準へと急ぐことができるということなのだから。」と。あらゆる瞬間に、魂の生活が私たちの知識をあざ笑うことに感謝しましょう。私たちは際限のない魂的生活を必要としています。何故なら、この無限の展望こそ、私たちが絶えずポジティブな性格を越え、段階を追って上昇することに対する希望を与えるものだからです。私たちが希望と確信をもって前を見ることができるのは、正に、私たちの魂的生活が際限のないものであり、不可知のものである、その程度においてなのです。決して魂の境を発見することができないがゆえに、魂はそれを越え、より高く、どこまでも高く上昇することができるのです

第7講「不調と心的な障害」

(1910年4月28日)

この冬に、私がこの場で皆さんの前に提示することを許された連続講義では、本連続講義の第一講で性格付けされたような精神科学の観点から、非常に多様な現れ方をするところの人間の魂的生活、あるいはもっと広い意味での生活に光を当てる、というのがその使命でした。今日は、悲惨や苦悩、そして恐らく希望の喪失をももたらすかも知れないような人間生活の領域を観察することにしましょう。これを補完するために、次回の講義では、「人間的な意識」と題して、人の自我意識の人間的な尊厳、価値、力が最大限に表現されるような高みへと私たちを連れ戻す領域について触れることにします。そして、最後に、今日、暗く、最も戦慄すべき人生の側面から私たちの前に現れるように見えるものの全く健全な面を示そうと努めるところの「芸術の使命」についての考察をもって今年の連続講義の締めくくりにしたいと思います。

不調と心的な障害について語られるとき、誰の魂の中にも、人間の最も深い苦しみのイメージと同時に最も深い人間的な共感のイメージが生じます。そして、このようにして魂の中に生じるあらゆるものは、人間の魂の中に存在するこの深淵を、この連続講義の中で得られると期待されるところの光をもって照らし出すための挑戦でもあり得るのです。特に、ここで私たちの魂の前に示された考え方によって前進することにますます精通する人は、精神科学的な観察方法をもってすれば、ある意味で、人生におけるこの悲しみの章に光を当てることができるかも知れない、という希望を持つにちがいません。と申しますのも、なにがしかの文献上の知識を有している人であれば誰でも、ただし、ここでいう文献とは今や急速に広まっている素人によるものではなく、むしろ専門家による文献ですが、そのような知識が、精神科学的な観点から見た場合、ある意味で、非常にはるかな地点にまで達するものであり、それに関連する事実を評価するための豊かな素材を提供するものである、ということに気付くことができる一方、どの文献の中でも、現代における様々な理論や観点、思考様式が収集された経験や科学的な観察に骨組みを与えるという点で、ほとんど役に立たない、ということがあまりにも明らかになってきている、ということがあるからです。特に、この領域においては、いかに精神科学が真正で本物の科学と、つまり、科学的な事実や結果、経験として私たちが出会うところのあらゆるものと調和しているかをはっきりと見て取ることができます。けれども、同時に、各段階において、いかに精神科学が、これらの経験と現代の潮流となっている科学的な観点からそれらの経験が説明されるその仕方との間に矛盾を見出すか、ということもまた理解することができるのです。他の領域においてと同様に、私たちはここでもそのテーマを概略的に扱うことしかできないかも知れませんが、それは、多分、私たちがこれから扱おうとしている悲しむべき状況との関連においても、私たちがますます私たち自身の方向性を見出すことができるように、私たちの実生活の中にも流れ込むことができるような適切な理解を獲得するための刺激を与えることになるでしょう。

「不調」と「心的な障害」という言葉を使用するにあたっては、それらが基本的に異なっている、ということ私たちは意識しています。にもかかわらず、実際に心的な障害を受けているものとして記述できるような魂的生活を正確に観察する人がそこに見出すのは、人生の中の何らかの点に関して生じるところの、そうでなければ正常と見なされるような不調とは単に程度において異なるところの表現や外観かも知れません。しかし、そのような観察は、ある種の思考の方向性が個別的な区分けをばやかせ、実際、健康で正常な魂的生活と「心的障害」という言葉で記述できるようなものとの間にははっきりとした線を引くことはできない、と言わせるような傾向を有していることから、間違った説明をしやすいのです。

その種の記述には、そのようなことが起こった場合、強調されなければならないようなある種の危険が含まれているのです。そして、その危険は、その記述が間違っているということではなく、それが正しい記述であるという事実の中にあるのです。これは矛盾であるように聞こえるかも知れませんが、とはいえ、間違った記述というのは、ときとして、説明することができ、一方的なやり方で実践に移すことができるような正しい記述よりも危険が少ない、というのは事実なのです。それは、その記述の正しさの中に本来備わっている危険が気付かれない、ということです。何かが、ある文脈の中で、正しいと証明されるならば、それはそれで十分だと考えられがちなのですが、私たちはあらゆる正しいことならにはその反対の側面があり、私たちが見出すいかなる真実もある種の事実と経験の観点から見たときにのみ真実である

にすぎない、ということに気付くべきなのです。危険はその真実が他の領域にまで外挿される瞬間に、つまり、それがあまりにも遠くまで拡張され、教条的な信念になるときに生じます。たとえ私たちが、真実は存在する、ということを知っていても、一般に大したことは達成できない、真の認識において重要なのはその知識が有効に働く限界を知ることである、と言われるのはこの理由によります。

私たちは、確かに、通常の健全な魂的生活がある限界点を越えるとき、病理学的な徴候にもなる、という現象を観察することができます。この記述を十分な重みをもって認識することができるのは、より親密なレベルで人生を観察することに正しい仕方では慣れている人だけです。ある人が何らかの概念を理解し、それを正しい瞬間に別の概念に結びつけることができず、そのため、それを新たな、そして全く不適切な状況下で適用し、以前の状況下では正しかったけれども、後にそうではなくなった考えに基づいて行動するとすれば、誰がそこに「心的な障害」の題字の下に括られる病理学的な側面があることを否定するでしょうか？誰が、これは病理学的なものに近似している、ということ否定するのでしょうか？もし、そのことが程度を越えて起こるならば、それは心的な障害への直接的な徴候なのです。けれども、他方では、その気苦労の多さときちなさのために仕事をうまく進められない人々がいる、ということも否定できません。そこに見られるのは、通常の魂的生活におけるひとつの状況（ある考えを展開していくことができないという状況）なのですが、不調について語るのをやめて、病理的な心身の障害について語り始めるべき地点へと接近できるのはそのような状況においてなのです。例えば、誰か（これは本当に起こることなのですが）勘違いしやすい人がいて、周りにいる人の咳払いが普通の咳のようにではなく、彼に対する人々の悪口であるかのように聞こえる、つまり、そのような幻想を彼に与えると仮定してみましょう。もし、彼が、そのとき、その生活と行動をこの幻想に適應させるとするならば、彼は心的な障害を持った人と考えられることとなります。そして、それにもかかわらず、このことと通常の生活におけるできごと、すなわち、ある人が、何らかのことが語られるのを漏れ聞き、その内容について、実際に語られたのとは全く違うものを聞いたかのように説明する場合との間にはわずかの違いしかないのです。ある人が、「だれそれが私についてあれこれのことを言った。」と言い、にもかかわらず、そのだれそれがそのことを言ったという形跡がない、というようなことがあります。通常の魂的生活がその健全な道筋からはずれ、魂的な障害へと変わるのはどの地点においてなのかを決めるのはそれほど容易なことではないのです。

次に述べることは、矛盾しているように見えるかも知れませんが、この分野において、何らかの考えを喚起するのに役立つでしょう。すなわち、並木道に立っている人が、近くを見るときには木と木の間の正しい距離を全く正常に知覚できる一方、遠く離れている木はお互いに少しずつ接近しているように見えるために、それらの間にロープを張ろうと決心した際、遠くに行けば行くほど張り渡すロープの長さがますます短くなると考えたとします。これは完全に健全な観察から間違った結論を引き出す人の例です。しかし、健全な観察が可能なのは、錯覚があるからに他なりません。錯覚もまたひとつの観察なのです。その不健全で害のある側面が現れるのは、ただそれが目の前の机と同じ現実性を有しているものと考えられるときだけです。その観察が病理的なものであると言われ得るのは、単にそれが正しい方法で説明されないときだけです。さて、誰かが幻覚を抱き、それが通常の物理的な意味において現実であると考えられる場合と、先ほどの並木道で、木と木の間を遠くに行くほどますます短いロープで結びつけようとする人との間の矛盾とを比べてみるすることができます。論理的には、これらふたつのことからは原則的な違いはありません。それにもかかわらず、幻覚は何と容易に私たちを間違った判断へと導き、そして、私たちは、並木道を観察するとき、何とめったに同じような間違いをしないことでしょうか！何人かの人はこのようなことはすべてばかばかしいと考えるかも知れません。けれども、それはさておき、これらの点を逐一考慮する必要があります。と申しますのも、もし、そうしなければ、すぐに話しが脱線して、通常の魂的生活がいかに容易に混乱させられるものであるか、ということを理解できないからです。

さて、私たちはさらに、その魂的生活が健全で最高度に明晰なものと考えられている人々についてのもっとずっと衝撃的な例を挙げることができます。私は、その分野で働いている人たちの間で最も卓越した人物のひとりであると考えられているドイツの哲学者について触れたいと思います。その哲学者は彼の経験を次のように述べています。

彼はかつてある人物と話していたのですが、その中で、彼らの二人ともが知っているある学者に話しが及びました。その学者に話しが及んだ瞬間、その哲学者が思い出したのはパリのイラスト集と、その次に、ローマの写真集でした。その間、その学者についての会話がつづいていました。その哲学者は、何故、会

話中に、最初はパリのイラスト集のイメージが、つづいてローマの写真集が現れる、というようなことが起こったのかをよく考えてみました。そして、実際、彼はその正しいつながりを何とか確立したのです。彼らの話題に上った学者は特筆すべきあごひげをはやしていました。このあごひげは、直ちに、同じようなあごひげをはやしていたナポレオン三世のイメージをその哲学者の潜在意識の中に呼び起こしたのです。そして、このナポレオン三世のイメージはフランスを経由してパリについてのイラスト画へと導きながら、彼の意識の中へと押し進んで来ました。そして、今や、同じようなバンダイクひげをはやしていた別の男のイメージが彼の前に現れます。イタリアのヴィクトール・イマニュエルのイメージです。そして、このイメージがイタリアを経由してローマの写真集に導いたのです。ここには、十全に意識的な魂的生活において、全く異なることが起こっている間に、気ままでもたらめな一連の考えが展開しているのが見られません。さて、ある人の中にパリのイラスト画が現れ、もはや会話の糸をたぐることができず、そのすぐ後に、次のローマの写真集についての考えがつづく仮定してみましょう。彼はでたらめな思考生活に左右され、誰とも秩序だった会話を持つことができず、ひとまとまりの考えから次の考えへとリズムも論理もなく彼を導くような病理的な魂的生活の中に織り込まれてしまうことでしょう。

しかし、私たちの哲学者はさらに先へと進みます。そして、これを別の場合と対比させるのですが、彼は、それによって、これらのことがらがどのように関連しているかを認識できるようにしたいと思っていました。彼は、かつて、税金を払うために税務署に出かけたことがありました。彼は75マルクを払いに行ったのです。そして、その哲学はともかく、彼はきちんとした男でしたから、この75マルクを彼の支出簿に記入し、そして、別の仕事に取りかかりました。彼は、後になって、そのとき払った税金の額を知りたいと思ったのですが、思い出すことができません。彼は考えました。そして、哲学者でしたから、体系立ててその仕事に取りかかりました。彼は連想によってその額を思い出そうとしたのです。彼は税務署に向かう自分の歩みに集中し、そして、財布の中に金色の二十マルク札が四枚入っていたということ、さらには、そのときお釣りとしてもらった五マルクのイメージを思い出しました。彼はこのふたつのイメージを思い出し、そして、後は簡単な引き算によって、今や、彼が払ったのは七十五マルクであった、ということを見出すことができたのです。

ここには、全く異なるふたつのできごとがあります。最初のケースでは、一連の意識的な思考によるコントロールを一切受けない、いわば、自発的な魂的生活がその役割を演じています。これがパリのイラスト画のイメージとローマの写真集のイメージを創り出しました。二番目のケースでは、魂がその踏み出す一步一步を選び取りながら、いかに体系的に振る舞うかを見ることができます。これらふたつの魂の過程には、本当はかなり違いがあるのです。しかし、かの哲学者は精神的な探求者であれば直ちに気がつくであろうようなことに注意を向けることができませんでした。と申しますのも、最初のケースでは、彼の注意は話し相手に向けられているということ、つまり、彼の意識的な魂的生活の全体は相手との会話を維持することに関わっており、でたらめなイメージは、まるで別の意識レベルにあって、勝手に浮かんで来るかのようなものである、というのが肝心な点なのです。二番目のケースでは、哲学者は彼の注意力のすべてを思考のつながりを決定する方向へと向けています。このことは、最初のケースでは、イメージがでたらめに生じたのに対して、二番目のケースでは、それらが意識的な魂的生活のコントロールの下にあった、というのは何故かを説明します。

とはいえ、そもそも何故、イメージが生じるのでしょうか？哲学者が見落としているのはその点です。人生を観察する人で、そのようなケースを知っており、問題の哲学者の性格を考慮する立場にある人であれば（私はたまたまそのことを知っているだけではなく、その男をも知っているのですが）、次のような仮説を立てるでしょう。その哲学者は、彼には格別興味のない人物について話し合っていたので、会話に集中しつづけるために、ある程度の努力を必要としていた。そのため、一定量の魂的生活がこの会話に関与しないままに取っておかれ、それが内に向かった、と。しかし、興味のない会話に注意を割かねばならなかった彼には、結果として生じる一連のイメージをコントロールする力がなく、それらはでたらめに生じることになりました。このことは、そのようなイメージがいかに意識的な魂的生活の背後で、影のように生じるかについての示唆を与えます。このような例は無数に挙げることもできるでしょうが、特にこの例を取り上げたのは、それが非常に特徴的であり、それによって多くのことを学ぶことができるからです。

さて、次のように問うことができるでしょう。そのようなできごとは、人間の魂的生活をもっと深く探求するように私たちを促すのではないのか？また、そのような魂的生活の裂け目は、そもそも、どのよう

にして生じるのか？と。私たちはここで、今日取り上げているあのあまり愉快でないテーマに関する経験を、この冬、私たちがあれほどしばしば取り扱ってきたところのものに、全く自然に適合させることができるような領域へとやって来ました。その例の中で触れられた哲学者は、彼の経験を記述しようとして謎に直面しますが、事実を一度告知してしまえば、そこからさらにつづけようとはしません。それは、私たちの科学が事物や人間の本質についての認識の手前で、それがどんなに多くのことを語ることもできるとしても、立ち止まってしまう、ということから来ています。

人間の本質的な性質に関する私たちの観察が示したのは、人間は外的な科学によってなされる以上のやり方で眺められなければならない、外的な人間と内的な人間を区別しなければならない、ということでした。私たちは、あらゆる領域において、通常の科学によって理解されているのとは異なる仕方で眠りに注目すべきだ、ということを示してきました。私たちが示したのは、眠っている人間の中で、ベッドに残っている部分は単に外的な人間であり、その外的な人間をベッドに残していくところの不可視の、そしてより高次の内的な人間は通常の意識をもってしては追い求めることができない、ということでした。何か人間から去って行くのですが、それは正にベッドに残る部分と同じくらい現実的なものであり、そして、その内的な人間は、眠りに落ちてから目覚めるまで、その真の故郷である精神的な世界に引き渡される、ということ通常意識は単に理解できないのです。それはまた、彼が通常の魂的生活を支えるために起きてから寝るまでの間に必要とするものをそこから抽出する、ということ認めることにも失敗します。眠っている間もその法則とともにそこにある外的な人間と、起きている間だけ外的な人間とともにあり、眠っている間は分離する内的な人間を別々のものと見なし、はっきりと区別しなければならない理由がここにあります。この区別をしない限り、私たちは人生における最も重要なできごとを理解することができません。便宜的に、あらゆるものを統一体と見なし、別の考えを容れず、いたるところに一元論を確立しようとする人たちは、私たちが人間を内的な人間と外的な人間のふたつに分けるということのために、私たちに二元論者の烙印を押しします。しかし、そのような人たちは、水を水素と酸素に分ける化学者もまたひどい二元論者であると認めないわけにはいかないでしょう。もし、元素をもっと深いところに横たわっているものとして認識しないとすれば、より高次の意味で一元論者であることは不可能です。ところが、最も身近なものの中にのみ統一を見る人たちは、多様な生の本性を観察するとともに、それだけが命を説明することができるようなことがらを認識することを自ら妨げているのです。

さて、外的な人間と内的な人間の内にある個々の構成体もまた区別されなければならない、ということも示されました。外的な人間の中で私たちが最初に区別したのは見たりさわったりすることができる肉体です。さらに、その肉体を形成し、作り上げるところの私たちがエーテル体と呼ぶ別の構成体があります。肉体とエーテル体は眠っている間、ベッドの中に残ります。次に、眠っている間、肉体とエーテル体から去り、精神的な世界に入っていく部分は、この連続講義の中で、アストラル体として記述されましたが、それ自身、自我の担い手を包摂しています。けれども、私たちはさらにもっと微妙な区別をしました。つまり、アストラル体の中にある魂の三つの構成体を区別しました。そして、これら三つの構成体を注意深く区別することによって、人生における多くのできごとを説明することができました。

私たちは魂の最も低次の構成体を感覚魂と呼び、二番目の構成体を悟性魂あるいは心魂、三番目を意識魂として記述しました。ですから、私たちが内的な人間に言及するときは、あらゆる種類の意志衝動、感情、概念そして考えが区別されないままに入り交じったものについて語るかわりに、魂の中にあるこれら三つの構成体を注意深く区別することができるのです。さて、通常の生活においては、外的な人間と内的な人間の間にはある一定の関係があります。その相互関係は次のようなものです。魂のより高次の構成体がほとんど発達していない場合、私たちが奴隷のように従わせるであろう欲望や熱情を担う魂の最も低次の構成体は感覚体と関連しています。感覚体は感覚魂に似ていますが、それは人間の場合には外的な人間に属していると考えられます。アストラル体はここでいう感覚体とは別に記述されなければなりません。と申しますのも、魂を構成する三つの個々の部分はアストラル体が部分的に改造されたものにすぎないのですが、単にそれから作り出されたのではなくて、分離されたものだからです。起きている間、感覚魂は絶えず感覚体と相互作用しています。同様に、悟性魂もしくは心魂はエーテル体との絶えざる相互作用の中にあり、ある意味で、意識魂は肉体と密接に結びついています。私たちが意識魂の中に入ってくるものに関しては、目覚めた意識に依存している、というのはこの理由によります。肉体、感覚、脳の活動により伝達されるものは、まず意識魂の中に入ってくるのです。

このように、人間には三つの構成体から成る二つの部門があり、お互いに対応しています。つまり、感覚魂と感覚体、悟性魂もしくは心魂とエーテル体、そして、意識魂と肉体です。この対応は、私たちが内的な人間から外的な人間へと導く糸を解明するための手助けになるとともに、もし、それらが通常の仕方で機能できないとすれば、いかに通常の魂的生活に支障を来すかを私たちに示すことができるでしょう。では何故、このようなことが起こるのでしょうか？

感覚魂は感覚体の影響下にあり、これらが正しく対応していないときには、感覚魂の健全な生活は中断されるのです。同様のことは、悟性魂が、エーテル体を正しいやり方で制御し、それを自分のための適切な道具にすることができないときにも起こります。そして、意識魂もまた、肉体がその正常な表現のための障害や妨害になるとき、通常でないものとして現れるでしょう。このように、私たちが人間を体系的に分割するとき、健全な魂的生活に必要な秩序だった対応が見られます。そして、あらゆる種類の障害が、感覚魂と感覚体、悟性魂とエーテル体、意識魂と肉体の間の相互作用の中に生じ得る、ということもまた理解することができます。この複雑な有機体を貫いて走る糸と、生じ得る不規則性を認識できる人だけが魂の中で起こり得る障害を認識することができるでしょう。障害が起こるのは内的な人間と外的な人間の間に不調和があるときだけです。

意識による完全なコントロールの下で生じる魂的生活は、一方では意識魂の中に、他方では悟性魂の中に存在するものを示しています。しかし、感覚魂の中には、ほとんどそれとは気付かれないようなイメージ、パリのイラスト画やローマの写真集が、ひとつまたひとつと流れているのです。このようなことが生じるのは、哲学者が彼の前に立っている人物との関係を保ちつつも彼の注意を逸らすことによって、感覚魂と感覚体との間に裂け目を生じさせるためなのです。パリのイラスト画やローマの写真集のイメージは感覚魂の中に求められなければなりません。そこでは今述べたようなコントロールされていないプロセスが生じているのです。二人の人物の間での会話は意識魂の中で起こっています。この場合、注意が会話から逸れて彷徨するのを防ぐように強いられる、という必要性が感覚魂と感覚体との間の亀裂を生じさせた原因となっています。

これらは単に一時的な状態です。と申しますのも、独立するのが感覚体だけである場合、最もわずかの妨害が魂的生活に生じるだけだからです。私たちはそのようなときにも、理性と、そして認識を保持する意識の内的な糸とを保つことができます。つまり、今や独立した感覚体のゆえに現れる強制的なイメージとは別に、私たちもまだそこに存在しているのです。

そのような亀裂が悟性魂とエーテル体に関して生じるとき、事態ははるかに困難なものになります。そのとき、私たちはあの病理的な状態との境界を接するところの状態の中へとはるかに深く入り込むのです。とはいえ、どこで健全な状態が終わり、どこから病理的な状態が始まるのかを決めるのは困難です。エーテル体がストライキに入るとき、つまり、それが私たちの思考の単なる道具であることを拒否するとき、悟性魂が完全に孤立して経験するところのものを保持することがいかに難しいかをひとつの込み入った例が明らかにするでしょう。エーテル体が独立し、悟性魂に抵抗するとき、思考を十分に表現することが妨げられます。そのため、それは途中で打撃を受け、完遂されることがありません。このことは最も賢いと言われている人たちにも起こる可能性があります。ある奇妙な例を取り上げてみましょう。

誰でも笑ってすぐに気付くのは論述の論理的な愚かさです。つまり、皆さんがまだ失っていないものはまだ持っている、というのは論理的な結論であり、皆さんは大きな耳をまだ失っていないので、まだ大きな耳を持っているのです。愚かさは思考が事実と一致しないために生じるのであって、これと全く同様の、つまり、「皆さんがまだ失っていないもの」という先行する論述が不当な仮定であり、そのことに気付いていないというパターンにしたがって、そこでは事態がもう少し込み入ったものとなる人生の最も重要な問題に関し、最も信じ難い間違いが犯されることがあるのです。こうして、ある哲学者は人間の自我に関して自分が打ち立てた理論を大いに強調するのですが、私たちがここでしばしば触れてきたのは、いかに自我が、その定義においてさえ、私たちが有することができるいかなる経験とも異なっているか、ということでした。誰でも、テーブルを「テーブル」、ガラスを「ガラス」、時計を「時計」と呼ぶことができます。「私」という言葉だけは、それが私たち自身を指すときには、他の誰もそれを使うことができません。このことは自我の経験とその他すべての経験との根本的な違いを示唆しています。このようなことは観察することができるか、もしくは半分だけ観察することができます。そして、その哲学者が「したがって、自我は決して対象となることはなく、したがって自我は決して観察され得ない。」というような結論を導くとき、

それを半分だけしか観察していません。そして、彼が、「もし、それを把握しようと試みるならば、自我は外的に存在していなければならず、同時に、それ自身の中にも存在していなければならない。」と言うとき、それは賢明な観点であるかのように見えます。これは、木の周りを走っている人にとっては、彼が十分速ければ後ろから自分に追いつけるのだが、と言うのと同じです。自我はそれ自身の中では把握され得ない、という教義がそのような例によって裏付けられるとき、誰かそれを信じない人がいるでしょうか！そして、それにもかかわらず、このことすべては、そのような比較は正当なものではない、という事実、つまり、自我は観察され得ないという仮定に基づいているのです。木との比較でいえば、ただ次のように言うことができるだけでしょう。自我は木の周りを走る人ではなく、せいぜい、蛇のように木の周りに自分を巻き付ける人と比較するべきだ、そうすれば、多分、足を手で掴むことはできるだろう、と。このように、自我は、私たちの経験の中でも、それ以外のあらゆるものとは全く違ったものなのです。それは主体と客体が一致するものとして把握することができる実体なのです。このことは、あらゆる時代の神秘家達によって、自分のしっぽをくわえる蛇という象徴的な言葉によって示唆されてきました。この象徴を用いてきた人たちは、彼らの前にある象徴の中で、いわば彼ら自身を観察しているのだ、ということを理解していたのです。

この例は、いかに私たちがただ感覚体とのみ不調和をきたす可能性があるところの私たちの直接的な知覚についての感情や知覚から、単に純粋な感情や知覚だけではなく、悟性魂もしくは心魂にも影響するところのものへと前進するか、ということを示しています。思考の内的な消化においては、そして、それは思考そのものに比べると既にはるかに恣意的ではないのですが、イメージそのものが原因となって生じる障害ばかりではなく、全く別の種類の抵抗、そしてそれはその過程を厳密に追求することによって結論に到達できないような思考には認識不可能な抵抗なのですが、そのような抵抗となる何かがあるのです。私たちは、いかに人間がそれとは気付かずに、事実に関する論理ではなく、単なる自分の論理である論理に巻き込まれ得るか、という例を見てきました。事実に関する論理は、悟性魂とエーテル体との結びつき、したがって、そのエーテル体に対する支配力が保持されるときにのみ存在します。こうして、私たちの魂的生活が病理的な表現形態を取るのには第一義的には私たちの考えと考えの間の結びつきが損なわれることによるのですが、それはエーテル体がその表現のための健全な道具として私たちの悟性魂に仕えることができなからである、ということが明らかになります。

けれども、今、私たちの悟性魂の動きを妨げるような障害を作り出すエーテル体が私たちの本性の一部を成しているとすれば、魂が単なる不調から心的な障害へと移行するような影響を及ぼすような原因は何か私たちがコントロールできないようなものの中に横たわっていると言わざるを得ないのか、という問は正当なものです。ある意味で、そのような例は、もしそれが真に理解されるならば、ここで何度も強調されてきたこと、私たちの同時代人の多くが（最も開明的な人たちでさえ）ナンセンスであると考えよう的な何かを私たちに気付かせてくれます。私たちのエーテル体が悟性魂の行く手に障害を置き、その思考のつながりを全うさせないようにするのが観察されます。そのとき、私たちは、自分が無力でもうここから先に進むことはできないと認めるかわりに、ごちゃごちゃになり、ねじ曲げられた判断を通します。私たちの悟性魂からの判断はエーテル体の侵入によって混乱したものになるのです。ある奇妙な状況、つまり、エーテル体が外的な人間に属しながら、あたかも悟性魂と同レベルにあるかのようにその活動に介入する、と考えられるような状況があるのですが、これはどのように説明すればよいのでしょうか？

純粋に言葉の上だけで説明するとすれば、「遺伝的な特徴」やその他のことを指摘することができるでしょう。このことは、一定の固定された思考パターンが原因となって、魂に関することからについて論理的に思考することができない人たちによってなされてきたことです。しかし、魂についてじっくり思考することのできる哲学者は次のように言うでしょう。そのような場合に、魂の中に入って来る不調や混沌とした状態は単に物理的な遺伝の結果ではあり得ない、と。ところが、現代の有名な哲学者は、純粋に物理的なものを越えて行くところの私たちの内的な過程を驚くべき言葉で記述しています。ヴントが「これは私たちが永遠に続く進化の闇へと導く！」と言うとき、もし私たちが深刻なテーマを扱っていないとすれば、それはなかなかの言葉であると言えるかも知れません。厳密な思考をすることに慣れた人は世界的に有名な哲学者のそのような言葉を奇妙なものと思うでしょう。この言葉を魂と精神は魂と精神だけにその起源を有していると語る精神科学の真実と比べてみて下さい。それは、17世紀に偉大な自然科学者、フランセスコ・レディが別の分野で口にしたもうひとつの真実、すなわち、生き物は生き物だけから発生するこ

とができるという真実に比べられるものとして私たちがしばしば見てきたもののさらに高次の真実です。精神科学は物理的な遺伝について明らかにするだけではなく、精神的な要素があらゆる物理的なものの中で活動している、ということをも示します。そして、エーテル体の悟性魂に対する妨害的な影響があまりにも大きくなる状況では、恐らく何かが悟性魂に似たエーテル体を形成し、準備したに違いない、ただそれはひどい仕方です。と、思われます。ですから、もし私たちが現在の私たちの悟性魂の中にそのような不調を見出すならば、そして、もし私たちが私たちの理性を保持することができるならば、私たちはその不調を、それが私たちの身体性にまで貫き至ることがないようなやり方で是正することができるのであって、あらゆる情動が直ちに病気を引き起こすものであると考えるべきではないのです。誰かが心的な障害に陥るとき、それを深く考えることなく外的な影響に帰するのはナンセンスである、という精神科学の観点に立つほど厳密であることは誰にもできません。しかし、一方で、たとえ私たちに自分のエーテル体を変化させる力がないとしても、それは間違いが起こるときに存在するのと同じ不調の法則によって満たされ、色づけられるのであって、その間違いがエーテル体の中で表現されるようになるときに病気になる、ということが理解されなければなりません。通常、そのような間違いは、私たちの誕生から死までの現在の人生において、直ちに影響を及ぼすというわけではありません。このことが生じるのはそれが繰り返され、習慣になるときです。もし、ある特別な場合のように、私たちが誕生から死までの間、絶えることなく間違いの上に間違いを積み重ねるとすれば、もし、思考、感情、そして意志に関するある種の弱さにいつも流され、誕生から死に至るまでその弱さとともに生きるとすれば話は別ですが、誕生から死までの間の外的な身体性はただ限定的な変化を被るだけなのです。私たちが死の門を歩いていくとき、肉体はそのすべての良き性質と悪しき性質とともに破壊され、私たちは、私たちが自分の思考、感情そして意志において創造したあらゆる良きものと悪しきものとを伴って行きます。そして、私たちは、私たちの次の人生のための外的な身体性を構築するに当たり、現在の人生からもたらされるところの思考、感情そして意志における弱さや間違い、混乱をその中に移行させるのです。

このように、私たちに對して妨害的に働くエーテル体については、私たちの現在の魂的生活における間違いが直ちに私たちのエーテル体の中にその姿を現すのではなく、現時点では、それは単に、私たちの魂が私たちの次の人生を組織するであろう、ということに甘んじているのです。私たちのエーテル体の中に原因として、また、ある種の特徴として現れるものは、私たちの現在の人生を遡るのではなく、以前の受肉へと立ち返るとき、確かに見出すことができます。

このことは、私たちが心的障害について幅広く理解することができるのは、単に隠された「永遠に続く進化の闇」の中を手探りで進むだけでなく、その人間の以前の存在状態へと赴くときだけである、ということを示します。とはいえ、私たちはこの真実をあまり極端なものとして受け取るべきではありません。何故なら、私たちは、人間が以前の人生から来る性質の他に、遺伝された性質をも彼の内に有しているということ、そして、私たち人間の外的な性質は遺伝されたものとして考えられるべきである、ということに気付いていなければならぬからです。人間がひとつの人生から次の人生へと運んで行くものと、祖先から受け継いできた彼の特徴とを注意深く区別することが必要なのです。

さて、同様の不調和は私たちの自意識の基礎をなす意識魂と私たちの肉体との間にも生じ得ます。そのとき、以前の受肉に起因するような肉体的な特徴だけでなく、先祖からの系譜の中に見出されるような特徴も現れてきます。しかし、ここでもまた原則は同じです。意識魂の働きが肉体の活動的な法則の中に障害を見出す可能性があるのです。そして、意識魂がこれらの障害に遭遇するとき、心的障害のある種の徴候なかに荒々しく現れるところの様々なことがらが生じます。同様に、ある特定の器官が肉体の中で特に卓越するとき、その器官のあらゆる不幸な側面が現れるのです。私たちの肉体の諸器官が適切に共働し、そして、そのどれもがその他の器官に比べてより発達しているということがなければ、ちょうど健全な目が見ることの妨げにならないように、私たちの肉体は意識魂のための適切な道具となります。この関連で注目されるのは、現代のある重要な科学者によって取り上げられたひとつの症例です。ある人物が片方の目に視覚障害を持っていたために、特に薄暗がりの中では、彼には何か幽霊のようなものが見えるように思われました。この目の障害による彼の視覚への影響のため、彼にはしばしばその行く手に誰かが立っているかのように感じられたのです。目によるそのような影響が障害となる場合、通常の視覚は不可能です。このような部分的な欠陥は全く別の形態を取って現れることもあります。

意識魂が肉体の中に障害を見出すとき、それは何らかの器官の特別な卓越性に帰せられることができま

す。肉体の中の諸器官が通常の共同的な働きを行っているとき、肉体は意識魂にとって抵抗とはならず、私たちは自分の意識を通常の方法で表現することができるのですが、ある器官が特別な卓越性を獲得する場合に限り、障害があることに気が付きます。つまり、それは抵抗に遭遇するからですが、この外的世界との自由な関わり合いが妨害され、そして、私たちがその妨害に気付かない場合、より深いところに根ざした病気の徴候としての誇大妄想や偏執狂的な考えが現れるのです。

このように、人間を複雑なものとして観察することにより、人生における不調和と調和について理解することができるのですが、精神科学がいかに今日のふさわしい文献の中に示されているところのすばらしい結果を秩序立て、明らかにすることができるかについては、簡潔に示すことしかできませんでした。このことを理解するならば、私たちはさらなる洞察を得ることができるでしょう。つまり、内的な人間の現実や、それぞれの受肉における内的な人間と外的な人間との関わりについての洞察、すなわち、いかに以前の存在状態に由来する弱さや過ちの結果が、外的な人間における何らかの欠陥、例えばエーテル体の欠陥として現れるか、についての洞察をです。しかし、このことはまた、障害があまりにも大きい場合には、強く内的に規則的な魂的生活によってもそれらをいつも克服できるとはかぎらない、ということを私たちに示します。とはいえ、多くの点でそれが可能なのは、普通ではない魂的生活の中に外的な人間と内的な人間との衝突だけがあるとすれば、内的な人間をできるだけ強化することが重要である、ということ私たちが理解することもまた可能だからです。この考え方を最後まで厳密に追求しようとする弱い人間、自分の考えを明確に規定することを欲しない弱い人間、感情が自分の経験と一致するような方法でそれを発達させようとする弱い人間、そのような人間は、外的な人間の抵抗に対し、ただ弱々しく反対することができるだけでしょう。つまり、彼が自分の内に病気の種を抱えているとき、いつかそのときが来れば、彼は心的な障害に陥るでしょう。しかし、もし私たちが強い内的な存在によって外的な人間による病気に対抗することができるならば、状況は違ってきます。何故なら、ふたつの内、強い方が勝つからです！このことから、私たちが私たちの外的な本性に対し、いつも勝利を収めるとは限らないにしても、規則的で強力な魂的生活を発達させることにより、それに対する主導権を維持するべく多くのことを為すことができる、ということが分かります。そして、私たちがあらゆる些細な不都合によって影響されると感じないで済むように私たちの感情や情動、そして私たちの意志を発達させるように努め、より大きな文脈を包括するために私たちの思考を拡大することに努め、私たちの思考によって、単にその最も明らかな道筋を辿るだけでなく、その最も些細な成り行きをも追求するように努め、不可能なことを欲するのではなく、状況に即して私たちの望みを発達させることに腐心するのは何故かを理解することができるのです。私たちが強力な魂的生活を発達させたとしても、それでも限界に行き当たるかも知れません。しかし、私たちは、私たちの内的な存在があらゆる外的な抵抗に対して優勢になるように、できるだけのことをしたのです。

こうして、私たちは、人間がその魂的生活をそれ相応に発達させることの重要性を理解することができます。今日、魂的生活を発達させるということが何を意味しているかについてはほとんど理解されていません。以前、同じような機会に触れたのは、今日では、体育、例えば、散歩に行くことや肉体を鍛えることに重きが置かれている、ということでした。そこに含まれている原則について、何も言うことはありません。これらは健康的であり得ます。しかし、生理的な強化だけを目指して運動がなされるとき、まるで機械であるかのように外的な人間だけが考慮されるならば、それらがよい結果をもたらさないことは確かです。体育においては、あれこれの筋肉が特に強化されるべきだという観点によって特徴づけられるような運動にとりかかるべきでは全くないのです。そうではなく、私たちはあらゆる運動ごとに内的な喜びを体験できるように、あらゆる運動への衝動を内的な健康の感情から取り出してくるように注意しなければなりません。運動への衝動は魂からやって来るべきなのです。体育の教師は、例えば、あれこれの運動にとりかかるとき、いかに魂があれこれの種類の健康を感じるかを感情をもって経験することができる立場に自分を置くことができなければなりません。そのとき、私たちは魂を強化するのです。つまり、もしそうでなければ、私たちは肉体だけを強化して、魂はずっと弱いままに留まる可能性があるからです。人生を洞察する人は、この観点から取り込まれる運動が健康に良い影響を与えるものであり、人間を単なる解剖学的な機械であるかのように考えて取り込まれる運動とは全く異なる寄与がある、ということを見出すでしょう。魂の活動と

肉体の活動の間の関係が明らかになるのは精神科学の厳密な探求によってのみです。精神的な努力とのバ

ランスを物理的なものによって取ることができると信じている人は本質的なことが分かっていないのです。精神科学の探求者は、例えば、彼が何らかの真実を伝えるように頼まれ、その後、そのテーマについてまだ正しく自分の考えを述べることができず、その思考において正しいイメージを形成することができないような相手の話を聞かなければならないような場合、それが非常に疲れることであるということ、一方、例えば、彼が精神世界を探求する場合、どんなに探求したとしても疲れることはない、ということを知っています。それは、誰か他の人の話を聞くときには肉体的な脳を使う物理的な意志疎通にたずさわっているのに対して、精神的な探求においては、それが低次のレベルにある場合にはまだある程度、物理的な器官が必要であるにしても、より高次の段階に達すれば達するほどその程度は低くなり、したがって、それに応じてますます疲れなくなる、という理由によります。外的な人間が参加しなくても済むようになったとき、消耗と疲労はもはや生じないのです。精神的な活動においては、その衝動が魂自体から与えられるか、あるいは、それが外部から促されるかでは違いがあり、それは区別されなければならない、ということが分かります。人間の様々の発達段階においては、いつでも内的な衝動に対応した事柄が生じていることから、そのことはいつも考慮されるべきなのです。

以前に強調された例を取り上げてみましょう。それは、私の小冊子、「人智学の光に照らされた子供の教育」という本の中に見出される例です。そこで述べられているのは、7才までの子供は、まず第一にその行動の全てにおいて模倣への衝動を感じている、ということです。そして、歯牙交替期から思春期までの発達は、「権威にしたがって自らを方向づける」、あるいは、別の人物によって私たちに刻印づけられた印象にしたがって行動する、とでも言えるようなものによって特徴づけられます。模倣と権威への敬意というこれらふたつの段階が無視されたと仮定してみましょう。もし、それらが全く考慮されないならば、外的な体は魂のための道具になるかわりに、不規則に発達することでしょう。そして、さらなる発達過程において、その外的な人間の不規則な性質に対し、魂が正しい方法で影響を及ぼし、それと相互作用する機会を持つことはないでしょう。もし、これらの法則が観察されないならば、人が、その人生における重要な時期にあって、新しい発達段階へと入っていくとき、彼の存在におけるある構成体が停滞するのが分かります。精神分裂病、早発性痴呆の根底にあるのはこの法則を無視することなのです。早期における正しいプロセスを無視することによって、内的な人間と外的な人間との間の不調和の結果として現れるのは早発性痴呆すなわち時期を逸した模倣の症状です。精神科学によって明確に区分されるこれらのことからの間にみられる不調和が多くの場合、魂における異常の原因になっている、ということはよくあることなのです。同様に、人生の終わりに向かって現れる老人性痴呆の中に見られるのは、思春期とアストラル体が完成する時期との間に内的な人間と外的な人間の間に調和が存在し得るような方法でその人が生きなかつたために生じるころの内的な人間と外的な人間の間の不調和です。

このことは、人間についての知識が不調と心的障害の本性を照らし出す、ということを私たちに示します。そして、たとえ私たちが表面的な結びつきしか見出さないとしても、つまり、もし、人が、不調は通常の魂的生活の一部であるから、それは私たちの外的な本性には影響を及ぼし得ない、と言うにしても、それとは反対に、力強い論理の発達すなわち感情や意志において調和的で規則的な魂的生活が外的な人間から生じる障害に対抗して私たちを強化するときにしたがうところの法則は大いに勇気を与えるものである、ということが述べられなければなりません。こうして、精神科学は、多分いつもそうであるとは限りませんが、それでもほとんどの場合、外的な人間の超越あるいは卓越に対抗する可能性を私たちに与えるのです。私たちが内的な人間を強化し、育成するときには、外的な人間の卓越に対抗するためにそうする、ということが重要なのです。精神科学は私たちがこれを行うための癒しの力を与えます。したがって、それがいつも強調するのは、途中で停止することのない、首尾一貫した思考を最後まで追求するため、不適切なものを避けるころの秩序づけられた思考を発達させる、ということの重要性です。内的な規律と調和の中に魂的生活が現れるような仕方です。それを秩序づけることを厳密に要求する精神科学自体が私たちの体的本性における病理的症状の卓越に対抗する医療である、というのはこの理由によるのです。そして、人間が健全な意志、健全な感情、そして自律的な思考の光によって、体的な弱さ、体的な不具合を包み込むことができるとき、彼は病理的な傾向に対して勝利を収めることができるのです。このことは今日では一般的ではありませんが、それでも現在を理解する上でそれは重要です。こうして、精神科学はある慰め、つまり、精神の中には、もし、私たちがそれを真に強化するならば、人生において私たちに影響を与え得るあらゆるものに対する最良の救済があり続けるのだ、という慰めさえ私たちに与えてくれるのです。私

私たちは精神科学によって精神の単なる理論化を学ぶのではなく、俗物が中途半端な思考で立ち止まろうとすることで努力し続けることによって、それを私たちの中で治癒的な力に変えることを学ぶのです。と申しますのも、「あなたの言う輪廻転生やその他のことを証明してみなさい。」というのは中途半端な思考以外の何者でもないからです。思考をその結論にまで導くことを拒否する人に対してそれを証明することはできません。真実全体を半端な思考をもって証明することはできないのです。それらはただ思考を全うする人にとってのみ証明され得るのであり、そして、全体的な思考は彼の内なる人間によって発展させられなければならないのです。

もし、ここで示唆されたことがさらに発展させられるならば、このこと、つまり精神に対する不信が私たちの時代における不徳の中心に位置している、ということが分かるでしょう。しかし、一方で、不信を信へと、つまり、真の精神性へと変容させるための方法がある、ということがそこで示唆されたのだ、ということも分かるでしょう。今日の人類には、論理への信頼が大きく欠けているのです。ですから、精神科学の真実を理解するために必要な論理的な客観性がいつも存在しているわけではありません。ファウストの中で、ある種の人々について語られている言葉を私たちの時代に適用するにしても、それはばかにしたり皮肉を込めてではなく、ある種の悲しみをもってそうするのです。

「たとえ賢者の石を持っていたとしても、
哲学者にはちと荷が重すぎるというものだ。」

論理は精神科学を理解することができるのです。そして、精神科学の論理的な理解は最奥の広がりを持つ体的本性を癒すことができます。ところで、このことは、今日、精神科学の探求者ばかりではなく、その他の人々によっても主張されています。この主張は現代的な精神科学以外の道によって精神に近づこうとした人々によってもなされているのですが、そのような人々もまた現代ではほとんど理解されていません。ヘーゲルがいたところに論理の存在と働きと必要性を強調したという正にその理由のゆえに、彼を嘲笑しない人がいるのでしょうか？彼は今日の人間の中での論理の働きを次のように考えることによってそのことを強調しました。「私は人生を十字架として想像する。」と。そして、彼にとって、十字架上のバラは人間の中の論理に相当するものでした。これが、彼の著作のひとつにおいて、彼が次のようなモットーを前書きに書いた理由です。「論理とは、現代の十字架上のバラである。」と。そして、論理への信頼はその十字架を勝利へともたらします。論理への信頼、律せられた思考、調和的な感情や意志への信頼が十字架上にバラを置くことになるでしょう。発達させることができ、そして、発達させなければならない調和的な感情、調和的な意志、そして、自立的な理性に対する信頼を私たちが有するとき、私たちは、私たちの中に、私たちが心的障害と呼ぶところのものに立ち向かうための力を少なくともある程度は有しています。もし、私たちがこれら三つのものを発達させるならば、私たちは、人生におけいかなる状況の下でも、より力強く、意気揚々としていることでしょう。そして、ヘーゲルは、調和的な感情、意志、そして、規律的な思考すなわち理性的な知性を論理の中へと収めるゆえに、私たちが魂的生活を発達させるに際して私たちのモットーとして役立つ言葉、すなわち、論理は人間にとって現代の十字架上のバラであるべきだ、ということ述べているのです。

第8講「人間の良心」

(1910年5月5日)

今日の講義を個人的な思い出から始めることをお許し下さい。私が若かった頃の経験で、たいして重要ではないように見えながら、後になってしばしば楽しい思い出としてよみがえってくるような種類のちょっとした経験です。

私は大学で文学史の講義に出席していました。その講義は、レッシングの時代における文化生活の特徴についての考察から始まり、18世紀の残りの部分と19世紀の一部を含む時代における様々の文学上の発展についてさらに議論する、という意図をもっていました。彼の最初の言葉は大変印象的でした。レッシングの時代における文化生活に現れた主要な革新を特徴づけるために、彼は「芸術的な意識が審美的な良心を獲得した。」と述べたのです。彼がこのように言うことによって意図していたのは（今はそれが正当なものであったかどうかを問う必要はないのですが）おおよそ次のようなことでした。

レッシングとその同時代人の努力に結びついていたところのすべての芸術的な考察や意図は、芸術を何か人生の単なる付加物あるいはその他大勢の単なる楽しみ以上のものにしたい、という深い熱望に浸透されていた。芸術はその名にふさわしく、人間のあらゆる存在形態における必須要素になるべきであった。偉大で実り多い人類の活動について語る声と協調し、聞くに値する人間の深刻な関心事のレベルにまで芸術を引き上げること、そのようなことがこの時代の先頭に立つ思索家たちの目的であった。審美的な良心がその時代の芸術と文学への道を見いだしていた、ということが強調されるとき、その講演者が言おうとしていたのはそのようなことでした。

この指摘が色々な人の心の中に反映されるところの存在の謎を把握しようと努める魂にとって重要であったのは何故でしょうか？それは、芸術の概念とは高められるべきものであるとともに、人間生活のあり方とその運命全体にとってそれが重要であるということについては疑う余地がない、というような方法で表現されるべきものであったからです。芸術活動の重要性と意義については議論の余地がないところへと置

かれるように意図されていましたが、実際、「良心」という言葉によって示される経験とは、本当に、それが指し示すあらゆる状況が高貴なものになる、といったようなものなのです。言い換えれば、「良心」という言葉が話されるとき、人間の魂は、その言葉が魂自身の中で最も価値ある要素のひとつに言及しているのだということ、そして、その要素を欠くということは重大な欠乏を意味しているのだということに気づくのです。

それが文字どおり受け取られるか比喻として受け取られるかはともかく、「人間の魂の中で良心の声がするとき、それを語るのは神の声なのだ。」という言葉によって、いかにしばしば良心の重要性が問題にされてきたことでしょうか。そして、その人が高次の精神性に関与する準備がどんなにできていなかったとしても、良心とは何なのかについて何も考えてこなかった人を見つけることはほとんどできないでしょう。良心というものは、それが何であろうと、何が善で何が悪かを、すなわち、自分が納得するためには何をなすべきで、自分を見捨てないためには何をなすべきでないかを抗いがたい力を持って決定するところの個々人の胸の内にある声として経験されるところのものである、ということは誰でもぼんやりと感じていることです。このことから言えるのは、良心とはすべての人の胸の内に何か聖なるものとして現れるものであり、それについてある種の意見を形成するのは比較的たやすい、ということです。

しかし、人間の歴史とその精神生活にざっと目を通してみるならば、事態はそれとは異なってきます。この種の精神的な状況をより深く探求しようとする人ならば誰でも、当然、そのようなことがらに関する知識が前提になっていると考えられる人たち、つまり哲学者の意見を参考にしたいと思うでしょう。けれども、幅広い人間の関心事の全般にわたってそうであるように、この場合にも、彼は、様々の哲学者が良心について非常に異なった説明をしている、あるいは、そう見えるけれども、その多かれ少なかれ漠とした核心はどの場合にも同じようなものである、ということを見いだすでしょう。しかし、そのことが最悪であるわけではありません。もし、誰かが古代の、そして現代の哲学者にとって良心が何を意味しているのかをわざわざ調べてみるとるならば、彼はあらゆる種類の非常に洗練された、そしてまた理解するのが

難しい多くの言葉に出会うかも知れません。しかし、彼は、自分の感情から、これが良心だ、と疑問の余地なく言えるであろうようなものは何も見いださないうでしよう。

もちろん、ここで人類の哲学上の指導的な人物たちによって何世紀にもわたって与えられてきた良心についての説明を総括するならば、それは行き過ぎになってしまうでしょう。ただ、中世の最初の3分の1以降の中世哲学を通して、良心が話題にされるときにはいつでも、それは人間の魂の中にある、人がなすべきこととしないでおくべきことを直ちに宣告することができる力である、と言われてきたことに注目することができます。けれども、これらの中世の哲学者たちはこの魂の力の根底には何か別のもの、良心そのものよりもよりも繊細な性質を持つ何かがある、とも語ります。ここでしばしば取り上げられる人物、マイスター・エックハルトが告げるのは、良心の下に横たわる小さな閃光、もしそれが留意されさえすれば、善悪の法則を間違いのない力をもって宣言するところの魂の中の永遠の要素についてです。

近代においても、私たちは再び良心についての実に様々な説明に出会います。そして、その中のいくつかは奇妙な印象を与えるのですが、それはそれらが明らかに私たちが良心と呼ぶところの神的な内なる声の重大な本性について気づいていないからです。良心とは人間が人生における経験を絶えず拡張していくことによって、彼にとって何が役に立ち、何が害があり、何が満足を与えるか等々について学ぶとき獲得できるようなものである、とする哲学者たちがいます。これらの経験の総計が「これをせよ、これをするな。」という評価を生じさせるというのです。

他の哲学者たちは最高の称賛の言葉をもって良心について語ります。そのような哲学者の中に、とりわけすべての人間の思考と存在の基本的な原則としての人間の自我（一時的な個人的自我ではなく、人間の中の永遠の本質）を指し示した偉大なドイツの哲学者、ヨハン・ゴットフリート・フィヒテがいます。とりわけ彼は、人間自我にとっての最高の経験とは、「お前はこれをすべきである。何故なら、それをしないということはお前の良心に反することなのだから。」という内的な判定に耳を傾けるときの良心の経験である、と考えていました。彼はこの判定の威厳と高貴さは超越しがたいものである、と信じていました。フィヒテは人間自我の力と意義を最高度に強調した哲学者であったとはいえ、良心を自我の最も重要な衝動として位置づけたところに彼の特徴があります。

さらに現代に近づけば近づくほど、そして、思考が唯物的になればなるほど、人間の心の中でというより、多かれ少なかれ唯物主義に染められた哲学者の思考の中で、良心がますますその尊厳を剥奪されていくのが見いだされます。この傾向を説明するにはひとつの例をあげれば十分でしょう。

十九世紀の後半に、魂の高貴さ、調和のとれた人間的な感情、寛大で広い心のゆえに、最も洗練された人物のひとりに数えられるべき哲学者が生きていました。私はパーソロミュー・カルニエリのことを言っているのですが、彼は今日ではほとんど言及されることはありません。皆さんが彼の著作に目を通されるならば、彼はその繊細な性質にもかかわらず、当時の唯物的な思考に深く染められていた、ということが分かります。良心に関してはさてどうしたものか、と彼は問います。彼は言います。それは、基本的には、我々がごく若い頃に吹き込まれ、人生の経験を積むにしたがって強化されるところの習慣と評価の総計以上のものではない。我々がもはや意識していないこれらの影響が、「これをせよ、これをするな。」という内なる声の源泉なのだ。

こうして、良心はその源泉を外的な影響と習慣に求められ、しかも、それらは非常に狭い範囲に限定されてしまいます。もっと唯物的な志向をもつ19世紀の何人かの哲学者はさらに先に進みます。例えば、かつてニーチェに大きな影響を及ぼしたポール・レーですが、彼の書いた良心の起源についての本は私たちの時代の世界観を示す徴候として興味深いものです。彼の考えは（簡単な描写においては細かい点でのいくらかのゆがみはつきものですが）おおよそ次のようになります。ポール・レーが言うには、人間は彼のすべての能力において発達している、したがって良心に関しても発達している。もともと人間は私たちが良心と呼ぶところのものの痕跡も持っていなかった。良心が永遠のものであると考えるのは大変な偏見である。レーによると、私たちに何かをするように、そして何かをしないように告げる声はもともとは存在していなかったのです。けれども、人間本性の中には実際に発達してきたところの何か別のもの、復讐への本能とでも呼べるようなものがあつた。これはあらゆる衝動の中でも最も原始的なものであつた。もし誰かが別の者の手で苦しみを受けたならば、復讐の本能が彼に仕返しをするように駆り立てた。社会生活がより複雑になるにしたがって、徐々に復讐の遂行は支配権力の手ゆだねられた。それで人々は、他の人間を傷つけるようないかなる行いも、当然、以前に復讐心と呼ばれていたような何かが引き起こ

したのだと信じるようになった。結果を引き起こした行いは別の行いによって再び沈静化されなければならなかった。ときがたつにしたがって、この確信は特別な行為への感情、あるいはもっと言えば、そのようなことをしてしまいたいような誘惑の感情を伴うようになった。復讐への当初の衝動は忘れられたが、害を与えるような行いはその報いを受けなければならない、という感情が人間の魂に染み込んでいった。そうして今、内なる声を人間が聞いていると信じる時、これは実際、内的な形態を持つように変化させられた復讐の呼び声以外のものではない、と。ここにあるのは、この種の説明の極端な - 極端なというのは良心が完全な幻想として示されているという意味ですが - 例です。

他方、良心は人間が地上に生きてきたのと同じくらい長く存在している、言い換えれば、良心はある意味で永遠である、と断言するならば、それはあまりに行き過ぎである、ということを私たちは認めなければなりません。良心をより精神的に考える人も良心を純粋な幻想とみなす人も両方とも間違いを犯しているがゆえに、たとえそれが私たちの毎日の内的な生活に、そして実際、その聖なる部分に属しているとしても、そのことに関して何らかの合意に達するのはいずれにしても非常に困難なことなのです。

哲学者たちを一瞥するだけで、以前の時代には、彼らの中の最高の人たちがさえ、今日私たちが良心についてそのように考えざるを得ないような仕方とは違った方法でそれについて考えていた、ということが示されます。と申しますのも、私たちは、良心とは最も素朴な人の胸の内からさえ、神的な衝動として、「お前はこれをすべきである - それをしてはならない。」と語りかける声であると言いますが、これはソクラテスやその後継者プラトンにおいて私たちが見いだすところの教えとはいくらか異なっています。彼らは両方とも、徳は学ぶことができると主張しています。実際、ソクラテスは、人間が自分は何をすべきか、そして何をすべきではないかについて、はっきりとした考えを形成するならば、徳とは何なのかについての知識を通して、徐々に正しい行為を学ぶことができると言います。

さて、現代的な観点からみて、もし、私たちが正しく行動することができるようになるためには、何が正しく、何が悪いかを学ぶまで待たなければならないとすれば、それは困ったことであろうという反論が容易になされるかも知れません。つまり、良心が人間の魂の中にある基本的な力によって、「お前はこれをしなければならぬ、それをしてはならない。」と語り、ひとりひとりがそれを聞くのは、私たちが善悪についての考えを形成することを学び、そしてそれによって道徳的な教訓を定式化し始めるずっと前なのだ。そしてさらに言えば、良心とは、人が自分に「お前は何かお前が同意することができるようなことをした。」とすることができるような場合、その魂に一定の平静さをもたらすものなのだ。我々の振る舞いに関して同意できるような評価に到達するために、徳の本性と性質について多くのことを学ばなければならないとすれば、それは都合の悪いことだ、と多くの人が言うかも知れません。ですから、その死により彼の哲学が最高のもの、高貴なものになった哲学者、私たちが哲学の殉教者として尊敬する哲学者は - 私はソクラテスのことを言っているのですが -、良心について、今日見られるような観点とはほとんど符合しない概念を私たちの前に示している、とすることができます。そして、その後に現れるギリシャの思索者においてさえ、完全な徳とは学ぶことができるような何かであるという主張、つまり原初的で基本的な良心の力というものと合致しない教義がいつも見いだされるのです。

では、ソクラテスのようにあれほど傑出し、力強い人物が、今日、私たちが有しているような良心についての考えに気がつかないというようなことが何故あり得るのか、つまり、私たちが彼について研究するときにはいつでも、プラトンも言っているように、最も純粋な道徳性と最高の徳が彼の言葉を通して語っていると感じるにもかかわらず、何故そういうことがあり得るのでしょうか。それは、今日では生来のものであるかのように感じられる考え、概念、そして内的な経験が、実際には、人間の魂によって、ときの流れの中で苦労して獲得されたものだからです。私たちが人類の精神生活を過去へと遡るとき見出すのは、太古の時代には、良心についての私たちの考えやそれに対応する感情は今のようなあり方では存在していなかった、したがって、ギリシャ人の間にも存在していなかった、ということです。良心は実際、「生まれた」のです。しかし、例えば、ポール・レーがそうであったように、外的な経験や学識のような安易な方法では、良心の誕生について何ひとつ学ぶことはできません。人間の魂についての啓発を得ようとするならば、その問題にもっと深く分け入って行かなければなりません。

さて、この連続講義における私たちの仕事は、魂をより高い認識のレベルにまで引き上げることから来る光の助けを借りて、正に魂の構成を照らし出す、ということでした。つまり、先見者の内的な目、感覚世界だけの知識を得るのではなく、その感覚世界のヴェールの後ろにその第一義的な源泉、精神的な基礎

が見出される領域を見るとその目に対して自らを現すような魂の生活全体が記述されました。そして、先見者の意識は私たちが日常生活で経験する魂の生活の上方に位置する魂のより深い領域への道を開く、ということが繰り返し - 例えば、「神秘主義とは何か？」の講義の中で - 示されました。私たちは、日常生活においても、私たち自身をのぞき込み、思考、感情、そして意志に関する経験に出会うとき、このより深いレベルについて何らかのを知ることになると信じているけれども、通常の間違った状態では、魂は精神的なものの外的な側面を明らかにするに過ぎないということもまた指摘されました。もし、私たちが、見たり、聞いたり、脳で理解したりするあらゆるものの背後に現れるような、これらの外的なものの基礎となる原因を見出そうとするならば、感覚世界の上にかげられたヴェールの後ろへと貫き至らなければならないように、もし、私たちが私たち自身の生活の精神的な基盤を知ろうとするならば、私たちは私たちの思考、感情そして意志の背後にあるもの、つまり、通常の内的な生活の背後にあるものを見なければなりません。

以上のような点から出発して、私たちは、多くの分岐によって織りなされる人間の魂の生活に光を投げかけるといふ仕事に取りかかりました。私たちが見てきたのは、魂は三つの構成体から成り立っていると考えられるべきであるということ、それらは区別されなければならないといふこと（この点に注意していただきたいのですが）お互いに全く別々に取り扱われるべきではないということです。私たちは、これらの構成体を感覚魂、悟性魂、そして意識魂と名づけました。そして、それらを結びつける統合点としての自我がまるで道具を糸で操るかのようにならざるに働きかけ、無限に多様な方法で共鳴させることによって、いかに協和音や不協和音を奏でるかを見てきたのでした。この自我の活動は段階を追って発達してきました。そして、もし、人間が未来においてどのようなものになり得るのかを垣間見るとすれば、あるいは、今日においてさえ、もし、意識魂の中からより高次の超感覚的な意識形態を発達させているとするならば、私たちは今日の意識や魂の生活が、いかに太古の昔から進化してきたものであるかを理解することになります。

意識魂はその通常の状態において、私たちが感覚を通して知覚した外的世界を把握することができるようにします。もし、誰かが感覚世界のヴェールの後ろに貫き至ることを欲するならば、彼は彼の魂の生活をより高次のレベルに引き上げなければなりません。そのとき彼は何か魂の覚醒といったようなこと、つまり、生まれながらに盲目の人に施された手術が成功し、それまで知らなかった光と色の世界が彼に侵入してくるといふ成果に比べられるようなことが起こり得るのだという大いなる発見をするのです。正しい方法によって自分の魂をより高次の発達段階に引き上げる人についても同様です。私たちが普通の状態では無視してきたにもかかわらず、いつも私たちの周囲を群をなして飛び回っているあれらの要素が、それを知覚するための新しい器官を私たちが獲得したことにより、その豊かな存在性と活動をもって私たちの魂の生活の中に入り込んでくる瞬間がやって来るのです。

ある人がこの種の意識的な見霊能力を訓練によって獲得するときには、彼の自我は最初から終わりまで完全に存在しています。このことが意味しているのは、彼が私たちの感覚世界の基礎をなす精神的な事実や存在の間を、ちょうど物理的な世界の中にある机や椅子の間を縫っていくように動き回るといふこと、そして今や、彼は、彼の感覚魂、悟性魂、そして意識魂の経験を通して彼を導いてきたところの自我を魂の生活のより高次の領域へともたらず、ということです。

さて、自我によって照らされ、点火されるこの意識的な超感覚的能力から魂の通常の生活にもう一度目を向けてみましょう。自我はこれら三つの魂の構成体の中で、実に様々の方法で生きています。もし、ここに感覚魂の中から生じる欲望や熱情、本能的な衝動に自分の生活を譲り渡す男がいたとしますと、彼の自我はほとんど活動的ではない、それは感覚魂の打ち寄せる波のただ中にあるかすかな炎のようであり、それらにうち勝つ力をほとんど有していない、とすることができます。自我は悟性魂の中である程度の自由と独立を獲得します。ここにおいて彼は彼自身に至るのであり、そのことによって彼は彼の自我をある程度認識するのです。何故なら、悟性魂は人間が感覚魂を通して彼のところにやって来る経験を内的な落ち着きの中で熟考し、洗練させる限りにおいてのみ発達することができるからです。自我はますます光を放つようになり、ついには意識魂の中で十全なる明晰さを獲得します。そのとき、人は「私は自分を把握した - 私は真の自意識を達成したのだ。」と自らに言うことができます。人が感覚魂から悟性魂へと発展し、意識魂の中で働くようになって初めてこの段階の明晰さが自我において達成されるのです。

けれども、もし、人が自我の中で意識魂を越え、より高次の魂の原則と比べられるような超感覚的な意

識へと上昇することができるのであれば、私たちは、先見者が人類進化の過程を振り返り、「自我は、こうして正により高次の魂の段階へと上昇していくのと同じく、ある低次の状態から感覚魂の中へと入ってきたのだ。」と私たちに告げるのをよく理解することができます。私たちは魂の構成体 - 感覚魂、悟性魂、そして意識魂 - が、いかに体的な組織の構成体 - 肉体、エーテル体、そしてアストラル体もしくは感覚体 - と関連づけられているかを見てきました。皆さんはこのことから - 精神科学が示すように - 、自我が感覚魂へと上昇する以前には、感覚体の中で活動しており、さらにそれ以前にはエーテル体と肉体の中で活動していた、ということを理解できるのがお分かりでしょう。当時、自我はまだ外側から人間を導いていました。それは体的な生活の間の中で支配しており、人間はまだ自分自身に関して「私」ということができず、自分自身の内にその存在の中心点を見出していませんでした。太古の時代に支配し、人間の外的な体的組織を作り上げたこの自我について、私たちはどのように考えればよいのでしょうか？今日、私たちが私たちの魂の中に担う自我に比べて、それはより不完全なものであったと見なすべきなのでしょうか？

私たちは自我を、私たちの存在の現実的な内的焦点として、つまり、私たちに内的な生活を付与し、未来においては、訓練により、無限に進歩することができるものとして眺めます。私たちはその中に私たちの人間本性の縮図と、人間としての尊厳を保証するものを見ます。さて、私たちがこの自我についての意識を有していなかったとき、自我が世界の暗い精神的な力から私たちに働きかけていたとき、それはそれが今日そうであるようなものと比べてより不完全だったのでしょうか？全く抽象的な思考方法だけが、そうであったとすることができるでしょう。

私たちの肉体について考えてみて下さい。私たちはそれを、人間の魂の住居として太古の昔に精神的な世界から形成されたものとして眺めます。唯物的な精神だけが、この人間の体は元々精神から生まれたのではない、と信じることができでしょう。単に外的な観点から見るときには、肉体は奇跡的に完全なものとして現れるに違いありません。人間の心臓の構造に現れた叡知に比べて、私たちの知的な能力や技術的な熟練のすべてとは結局どれほどのものなのでしょうか？あるいは、橋の建設で用いられるエンジニアリング技術やその他のものを取り上げれば - 人間の大腿骨の構造、その支持機構を顕微鏡で観察したときの驚くべき十字構造に比べて、それは何ほどのものなのでしょうか。外的な肉体の構成に固有の叡知を人間がわずかでも達成したと想像するならば、それは全く際限のない傲慢でしょう。そして、私たちの魂的生活について、ただ単に私たちの本能、欲望そして熱情だけでも考えてみてください - それらはどのように機能しているのでしょうか？私たちは、私たちの体の叡知に満ちた組織を内的に浸食するために、私たちにできるあらゆることをしているのではないですか？実際、もし、私たちが偏見なしに私たちの肉体組織の驚異を考えるならば、私たちの体的な構造とは、私たちがその内的な生活において示すことができるあらゆることに比べて、もっとも私たちは、それらが現在の不完全さから完成にむけてさらに前進することを望んでいるかも知れませんが、はるかに賢いものである、ということ認めないわけにはいきません。観察可能な事実を単に偏見なく見るとすれば、たとえ超感覚的な能力がなくても、これ以外の結論に至ることはほとんど不可能でしょう。

自我の住居として人間の体を作り上げたのは自我自身の本性と何か共通したものを有しているはずのこの賢明な活動ではないのでしょうか？私たちはこの形成的な力を、測り難く進歩した自我の性質を有するものとして考えなければならぬのではないのでしょうか？私たちの自我に関係した何かが、太古の時代を通して、その自我が居住可能になるような構造を建設するために働いていた、と言わなければなりません。これを信じることを拒否する人は誰でも何か違うことを想像するかも知れませんが、そのとき彼は人間が住むために建てられる普通の家も人間の精神によってデザインされたのではなく、単に自然の力の働きによって組み立てられた、と想像しなければならないでしょう。ひとつの仮定は他の仮定と同様に真実です。こうして私たちは、どこまでも完全な自我性を付与された精神的な力が私たちの体的な鞘に働きかけていたところのはるかな過去を振り返ります。私たちの自我は、当時、無意識の深みに隠されており、そこから現在の意識状態へとその歩を進めて来たのです。

もし、私たちがこの進化をはるかな過去から眺めるとすれば、自我がまるで子宮の暗闇の中にあるようにその鞘の中に隠されていたときには、それはそれ自身についての知識を有していなかったとはいえ、それだけよいに、私たちの体的な乗り物に働きかけていたところの、人間の自我に関連しているとはいえ、それとは比較できないほど大きな完成度を有するあの精神的な存在達の近くにいた、ということが分かります。こうして超感覚的な洞察は、人間が精神的な生命そのものの中に横たえられていたためにまだ自我

意識を獲得しておらず、彼の魂的生活もまた、自我がそこから現れた魂的力のずっと近くにいたために、今とは異なっていたはるかな過去を振り返ります。私たちはまたその時代の人間の中に、自我の光に照らされていなかったためにぼんやりと夢のように機能していた原初の超感覚的な意識を見出します。そして、自我が最初に現れたのはこの意識形態からだったのです。人間が、未来において、彼の自我とともに獲得するであろう能力は、太古の時代には、自我なしに存在していたのです。超感覚的な意識は、精神的な存在や精神的な事実を周囲に観察する、ということ必然的に伴っているのですが、このことは、その超感覚的な能力が夢のようであり、まるで夢の中のように精神世界を眺めていたとはいえ、以前の人間にも当てはまります。彼はまだ自我の光に貫かれていなかったために、精神的なものを見ようとしたときにも、彼の内に留まるように強制されることはありませんでした。彼は彼の周囲に精神的なものを見ると同時に、彼自身を精神世界の一部として眺めたのです。そして、彼が何をしようとも、それは彼にとって精神的な性格を帯びたものになりました。彼が何かを考えると、彼は自分に向かって、今日の人間がそうするように、「私は考える。」とは言わなかったでしょう。つまり、彼の思考は彼の超感覚的な視界の前で立ち止まったのです。そして、彼が何らかの感情を経験するため、彼自身の中を覗き込む必要はありませんでした。つまり、彼の感情は彼から輝き出し、彼を彼の精神的な環境全体に結びつけたのです。

太古の時代における人間の魂的生活とはそのようなものでした。彼は、彼自身に至るために、つまり、彼の中で、今日まだ不完全な状態にあるとはいえ、人間が彼の自我とともに精神世界への歩みを進めるとき、未来においてますます完成に近づくであろう彼の存在におけるあの中心点に至るために、彼の夢のような超感覚的な意識から内的に発達して来なければなりません。

さて、もし、既に述べられたような方法で、超感覚的な手段により、あの太古の時代に光が投げかけられるならば、当時の人間の意識に関して、例えば、人間が悪い行いを犯した場合には、先見者は私たちに何を告げるのでしょうか？彼の行いは、彼が内的に評価できるような何かとして彼に提示されたものではありません。彼はそれが彼の魂の前に、その悪徳と恥辱のすべてを伴って幽霊のように立ち現れるのを見たのです。そして、彼の悪しき行いに関する感情が彼の魂の中に生じたときには、その恥辱が彼の前に精神的な現実として現れることによって、彼はまるで彼が働いた悪い行いの光景に取り巻かれているかのようでした。

そして、時の経過とともに、この夢のような超感覚的な能力が消え、人間の自我がますます前面に出てきました。人間が自分の内にその存在の中心点を見出すにつれて、古い超感覚的な能力は消し去られ、自我意識がますますはっきりと自らを確立するようになったのです。彼が以前に有していた彼の善行や悪行についての視界は彼の内的な生活の中に移し替えられ、そして、かつて超感覚的に眺められた行為は彼の魂の中で反射されるようになったのです。

さて、夢のような超感覚的な視界には、人間の悪い行いに対応するものはどのような形を取って現れたのでしょうか？それは、いかに彼が宇宙的な秩序を妨害し混乱させたかを示すような光景であり、彼を取り巻く精神的な力が彼に有益な影響を及ぼすことを意図して彼に示した光景でした。それは、彼を上昇させようとする神が、彼の行いによる影響を彼に示し、彼がその有害な結果を取り除くことができるようになることを望んで取られた措置でした。これは、実際、彼にとっては恐ろしい経験でしたが、人間自身がそこから現れたところの宇宙的な基盤からやって来る基本的に有益な経験でした。人間が自分自身の内にその自我中心を見出す時代が来たとき、外的な光景は反射された像の形で彼の魂の中に移されました。自我が最初に感覚魂の中に出現するとき、それは弱く、脆いものです。人間はその自我の完成に向けて徐々に前進するために、まず自分自身にゆっくりと働きかけなければなりません。さて、彼の悪事の結果についての外的、超感覚的な視界が消えたとき、もし、それが有益な影響を持つその内的な対応物によって置き換えられなかったとすれば、何が起こっていたのでしょうか？彼は彼の熱情によって、まだ脆い彼の自我とともに、まるで際限のない波打つ海の中にあるかのよう、感覚魂の中をあちこち引きずり回されていたことでしょうか。では、この歴史的な瞬間に、外的世界から内的な魂の生活へと移されたものとは何なのでしょう？人間が何を善なるものにすべきであるかをその超感覚的な意識の前に示しながら、その行為の有害な効果を治癒的な影響としてもたらしたのが偉大なる宇宙の精神であったとすれば、後に、人間の自我がまだ弱かった頃、その内的な生活の中に力強く自らを現したのもその同じ宇宙の精神でした。その精神は、超感覚的な視界を通して人間に語りかけた後、彼の内的な生活の中へと引き下がり、宇宙秩序の中に引き起こされたゆがみの是正について語るべきことを彼に伝えました。人間の自我はまだ弱いので、

その宇宙精神は絶えることなく、眠ることなくそれを監視し、自我がまだ判断できない場所で判断を下します。その弱い自我の後ろには、何か力強い宇宙精神の反映のようなもの、以前は、人間の行為の結果を超感覚的な視界を通して彼に示していたものが立っているのです。そして今や、その反映は、彼を監視する良心として経験されるのです。

こうして私たちは、良心が人間の内なる神の声として素朴に記述されるとき、いかにそれが真実であるかを理解すると同時に、いかに外的な光景が内的な経験になった瞬間、つまり、良心が生まれた瞬間が精神科学によって指し示されるかを見るのです。

今まで私がお話ししてきたことは純粋に精神世界から引き出されることができません。外的な歴史は必要でなく、私が記述した事実は内的な目によって観察されるのです。それを見ることが出来る人は誰でもそれを疑う余地のない真実として経験するのですが、時代の必要性から私たちは次のような問いに導かれます。一体、外的な歴史は、この場合、内的な能力によって見られる事実を確認するような何かを、もしかすると提示することができるのだろうか？

超感覚的な意識によって見出されるものは、いつでも外的な証拠によって検証され得るのであって、その証拠がそれらと矛盾するのではないかと恐れる必要はありません。そのようなことは検証が不正確であった場合にのみ起こり得るように見えるのです。超感覚的な洞察からここで導き出された記述を外的な事実がいかに確認するかを示す一例を示してみましょう。

良心の誕生というできごとが起こってからそれほど長い時間は経っていないのです。紀元前5世紀から6世紀を振り返るならば、私たちは古代ギリシャの偉大な悲劇詩人、アイスキュロスに出会い、そして、彼の作品の中に、ある特筆すべきテーマを見出します。そのテーマが注目されるのは、それが後の時代のギリシャ詩人によって全く異なった仕方で行われているからです。

アイスキュロスが私たちに示すのは、アガメムノンがトロイから帰還し、家に帰り着いたとき、彼の妻、クリテムネストラに殺されることです。彼の息子、オレステスは神の忠告にしたがって母を殺し、アガメムノンの仇討ちをします。では、オレステスにとって、この行為の結果とはどのようなものなのでしょう？アイスキュロスが示すのは、いかに母殺しの重荷が当時もはや普通ではなくなっていたものの見方をオレステスの中に呼びさますかです。彼の罪の非道さが古い超感覚的な能力を過去からの遺産のように彼の中に目覚めさせたのです。オレステスは次のように言うことができました。「アポロが、神自身が私に告げたのは、私が母に父の仇討ちをしたのはひとつの行為にすぎないということだ。私が行うあらゆることがそれを是とする。しかし、私の母の血は働き続けるのだ！」と。そして、オレステス三部作の第二部で、古い超感覚的な能力がオレステスの中で目覚め、仕返しの女神、エリニエス - あるいは、後にローマ人がそう呼んだところの復讐の女神 - が近づいてくる様子が力強く示されます。

オレステスは夢見るような超感覚的な意識の中で、外的な形態を取って現れる母殺しの行為の結果を目の当たりにします。アポロはその行為を容認していたのですが、そこには何かより高次のものが存在しているのです。アイスキュロスはもっとさらに高次の宇宙的な儀式が通用することを示したかったのですが、それができたのはただその瞬間にオレステスを超感覚的な意識にすることによってのみでした。何故なら、彼はまだ私たちが内なる声と呼ぶところのものをドラマ化するのに十分なところまで来ていなかったからです。もし、私たちが彼の作品を研究するならば、何か良心のようなものが人間の魂の内容全体から現れようとしている段階にありながら、彼はその地点には全然到達していない、という感じを受けます。彼はまだ良心へと変容していない夢のような超感覚的な眼差しをもってオレステスに向かいます。けれども私たちには、彼がもう少しで良心を認識するところにいるのが分かります。例えば、彼がクリテムネストラに語らせる言葉のひとつひとつが、まぎれもなく、彼は今日の意味での良心という考え方を示すべきである、という感情を呼び覚ますのですが、彼は決してそこに行き着きません。当時、偉大な詩人が示すことができたのは、それ以前の時代においては、いかに悪い行いが人間の魂の前に立ちはだかったか、ということだけでした。

さて、私たちはソフォクレスをとばして、ほんの一代だけ後に同じ状況を取り扱ったエウリピデスに目を向けてみましょう。学者達が正しく指摘したように - とはいえ、精神科学だけがそのことをその真の光の中で示すことができるのですが - 、エウリピデスにおいては、オレステスが経験した夢の像は良心の呵責の影のようなイメージ以上のものではありません - シェイクスピアにおいてもいくらか同様です。このように、詩という芸術は良心という考えが確立した段階があったことをはっきりと証明しています。私

たちは、いかにアイスキュロスのような偉大な詩人でさえ良心そのものについて語るができなかったかを、そしてその一方、いかに彼の後につづくエウリピデスが正にそれについて語るかを見ます。この発展を心に留めれば、何故、人間の思考一般が良心についての真の概念に向かってただゆっくりとその歩みを進めることができるだけなのかが分かります。現在、良心の中で働いている力は太古の時代にも働いていました。それは人間の超感覚的な視界の前に彼の行いの影響を示す像として現れました。唯一の違いは、この力が内在化されたということなのですが、それを内的に経験するためには、徐々に良心の概念へと導いていった人間の発達全体が必要でした。

こうして私たちは、段階を追って前面に出てくる能力、人間自身の努力によって獲得されなければならない能力を良心の中に見るのです。では、私たちは良心の最も力強い活動をどこに探すべきなのでしょう？それは人間の発達過程の中でも、自我が初めて認知されるようになった時点、それがまだ弱いものであった時点においてです。古代ギリシャでは、自我は悟性魂の段階にまで進んでいました。しかし、古代エジプト、カルディアにまで遡ると - 外的な歴史はこのことについて何ひとつ知りませんが、プラトンとアリストテレスはそれについての超感覚的な認識をもっていました - 、当時の最も高度に発達した文化でさえ、内的に独立した自我の存在なしに達成されたものであるのが分かります。エジプトやカルディアの聖地によって生まれ、使用に供された知識と私たちの近代的な科学との違いは、私たちの科学が意識魂によって把握されるのに対して、ヘレニズム以前の時代においては、すべてが感覚魂からのインスピレーションに依存していた、ということです。古代ギリシャにおいて、自我は感覚魂から悟性魂へと発達しました。今日、私たちは意識魂の時代に生きているのですが、これは真の自我意識が今初めて生じている、ということの意味しています。人類の進化を研究する人、特に、東洋的な文化から西洋的な文化への移行を研究する人は誰でも、いかに人間の発達がどこまでも増大する自由と独立の感情によって特徴づけられてきたかを見ることができます。以前の人間においては、自分は神々とそこからやって来るインスピレーションに完全に依存していると感じられていたのに対して、西洋において初めて、文化が内的な生活から湧き出してきたのです。

このことは、例えば、アイスキュロスが人間の魂の中に自我意識を生じさせようとしていかに苦闘したかを見れば特に明らかです。私たちは彼が片方の目を東洋に、もう片方を西洋に向けて、人間の魂の中から良心の概念へと統合されるべき要素を集めながら、いかに東洋と西洋の境界線上に立っているかを見ます。彼はこの良心の新しい形態を劇の形に体現させようと努力しますが、まだ十分にそうすることができません。比較は混乱を招きやすく、私たちは単に比較するのではなく、区別しなければなりません。大事なのは、西洋においては、あらゆるものが自我を感覚魂から意識魂へと上昇させるようにデザインされていた、という点です。東洋においては、ヴェールをかけられたあいまいさの中で自由ではなかった自我は、西洋において、それとは対照的に、意識魂への上昇の道を辿るのです。古い、夢のような超感覚的な能力が消し去られるとき、他のあらゆるものが自我を目覚めさせ、その自我を守る内なる神の声としての良心を呼び起こそうとします。アイスキュロスは東と西の世界を分ける礎石だったのです。

東の世界では、人間は神的な宇宙精神の中にその起源を有しているという意識がいきいきと保持されていました。そして、このことが彼らに、多くの人が - あるいは、例えばアイスキュロスが - 神の声として語られる何かを彼ら自身の内に見出そうと努力した時代から二、三百年後に起こったできごとについての理解を可能にしたのです。すなわち、このできごとによって、地球と人間の進化の中に入ってきた衝動の内、すべての精神的な立場からみて最も偉大な衝動 - 私たちがキリスト衝動と呼ぶところのものが人類にもたらされたのです。

神すなわち事物や人間の外的な鞘の創造主は私たちの内的な生活の中に認められる、ということを知って人間に気づかせることができたのがこのキリスト衝動でした。人間はキリスト・イエスの神的な人間性を理解することによってのみ、神の声とは魂の中で聞くことができるものである、ということを知ることになったのです。キリストは、人間が自分自身の内的な生活の中に何か神的な本性を見出すことができるようになるために、外的、歴史的なできごととして人類進化の中に入ってくる必要があったのです。もし、神なる存在であるキリストがナザレのイエスの体の中に存在しなかったとすれば、もし、彼が人間の体の中に存在することによって、神は我々の内的な生活の中に認められ得るものである、ということを知った一度だけ示さなかったとすれば、もし、彼がゴルゴダの秘蹟を通して死の征服者として出現しなかったとすれば、人間は、彼の魂の中には神が住んでいる、ということを決して理解しなかったでしょう。

もし、誰かが、たとえキリスト・イエスが歴史的に存在しなかったとしても、そのようなことは認識できたはずだと言うならば、それは太陽がなかったとしても我々は目を持っていたはずだと言うのと同じです。もし、光の起源は目に求められなければならない、何故なら目がなければ我々は光を見ることができないのだから、という哲学者達の一方的な見方に反対してそうするのと同様に、私たちはここでも、「目は光のために光によって創造された。」というゲーテの金言を持ち出さなければなりません。もし、空間を光で満たす太陽がなかったとすれば、人間有機体の中に目が発達することは決してありませんでした。目は光によって創造されたのであり、もし、太陽がなければ、目は存在しなかったのです。どんな目も、まず最初に太陽からその力を受け取っていないのであれば、太陽を知覚することはできません。同様に、もし、キリスト衝動が外的な歴史の中に入ってこなかったとすれば、キリスト衝動を把握し、認識する力は存在しなかったのです。宇宙にある太陽が人間の視覚に対して行ったのと同様に、歴史上のキリスト・イエスは、私たちが私たちの内的生活への神的本性の導入と呼ぶところのものを可能にします。

このことを理解するために必要な要素は東からやって来た思考の流れの中に存在していました。それらはただより高次のレベルに引き上げられればよかったのです。魂がこの衝動を把握し、受け入れることができるまでに成熟したのは西洋においてでした。西洋においては、かつて外的な世界に属していた経験が最も強力に内的な世界に移し替えられ、概して弱かった自我を良心の形で見張っていました。このようにして魂は強化され、今やその中で語る良心の声を聞くための準備ができました。つまり、東洋において、世界を超感覚的に見ることができた人々の前に現れた神性、この神性は今や私たちの中に住んでいるのです！

けれども、もし、内的な神性が意識の夜明けに際し、前もって語りかけていなかったとすれば、このようにして準備されていたものが意識的な経験になることはなかったでしょう。こうして私たちは、キリスト・イエスに対する外的な理解が東洋で生まれ、そして、西洋から現れ出た良心がやって来てそれに会おうのを見るのです。例えば、私たちは、キリスト教の時代の初期に、ローマ世界においてますます頻りに良心が語られるようになり、西に行けば行くほど、ますますその存在に対する認識が明白になるとともに、それが胎児のような形で存在しているのを明らかにすることができるようになるのを見ます。

こうして、東と西はお互いにそれぞれの手の中へと働きかけました。私たちはキリスト本性を有する太陽が東方に昇り、一方、西方では、発展する良心がキリスト理解への道を準備するのを見ます。ですから、キリスト教は栄光に満ちて西方へと前進するのであって、東方へではありません。東方では、東洋的な世界観の - その最も高いレベルにあるとはいえ - 最後の結果を代表する宗教が広まるのが見られます。つまり、仏教が東方世界を捉えます。キリスト教が西方世界を捉えたのは、それがキリスト教を受け取るための器官をまず準備していたからです。ここにおいて私たちはキリスト教が西洋文化における深化された要素すなわちキリスト教に体现された良心という概念に関係してくるのを見ることになります。

私たちがこれらの発展について知るようになるのは、外的な歴史を研究することによってではなく、事実を内的に熟考することによってのみです。私が今日申し上げましたことは多くの人にとっては信じられないことかも知れません。しかし、外的な現象の中に精神を認める、というのは時代の要請です。ただし、このことが可能なのは、少なくとも、精神がはっきりとしたメッセージの形で私たちに語りかけてくることで、さしあたりそれを識別することができるときだけです。通常意識は、「良心が語る時、それは魂の中で神が語っているのだ。」と言います。最も高次の精神的意識は、良心が語る時、それは本当に宇宙的な精神が語っているのだ、と言います。そして、精神科学は良心と人間進化における最も偉大なできごと、すなわちキリスト事件との関係を明らかにします。ですから、そのことによって良心が高貴なものにされ、より高次の領域へと上昇させられた、というのは驚くべきことではありません。良心のために何がなされたということを聞くとき、私たちは良心が人類の最も重要な所有物のひとつと見なされていると感じます。

こうして、私たちには、良心とは人間の中の神である、と人間の心が語る時、それがいかに当然で正しいことであるかが分かるのです。そして、神なる自然が人間に自らを現すとき、それは人間にとって最も高貴な経験である、とゲーテが言うとき、私たちは、神が精神において人間に自らを現すことができるとすれば、それは私たちが自然をその背景にある精神の光の中で見るときだけである、ということに気づかなければなりません。人間進化の中でこのことが充足されるのは、一方では、外から輝き入るキリストの光によってであり、他方では、私たちの内にある神の光、すなわち良心の光によってなのです。フィヒ

テのような人間の本質を研究する哲学者が、良心とは私たちの内的な生活における最も気高い声である、と言うとき、それが正当であるのはこのことによってなのです。このこととの関連で、私たちはまた、私たちの人間としての尊厳が良心とは不可分である、ということに気づいています。私たちは自我意識を有しているがゆえに人間なのであり、私たちが私たちの側で有している良心は自我の側にあるのだ、と言えます。こうして私たちは良心を個人が所有する最も神聖なもの、外的な世界によって侵害され得ないものと見なします。その声によって、私たちは私たちの方向性や目的を決定することができます。良心が語る時、他のいかなる声も口をはさみません。

ですから、良心は、一方では、世界の原初的な力と私たちとの関係を確認し、他方では、私たちは神から流れ来るひとつの滴のようなものを私たちの中の最も深いところに有している、という事実を保証するものです。そして、良心が人間の中で語る時、それは神が語っているのだ、ということを彼は知るので

第9講「芸術の使命」

(1910年5月12日)

この冬のシリーズにおける最後の講義は、人間の内的な生活から湧き出す最も偉大な宝物に満ちた、あの魂の生活の領域に捧げることにしましょう。私たちは、人間進化における芸術の本性と意義について考察したいと思います。皆さんにご理解いただきたいのは、芸術の領域はあまりに広範にわたるために、ここでは詩の分野に限るとともに、この分野において人間の精神が達成した最高のものだけを考察する時間しかない、ということです。

さて、誰かが次のように言うかも知れません。「この冬の連続講義は人間の魂の様々な側面に関するものであり、その中心課題は、精神世界との関連において、真実と知識を求める、というものであった。では、これらの探求は、人間の活動の中でも、とりわけ美の要素に表現を与えようとする努力とはどのような関係があるのか？」と。そして、私たちの時代には、真実と認識に結びついたあらゆるものが、芸術的な活動が目指すものとは遥かに、遥かにかけ離れている、という観点をとるのは容易なことかも知れません。今日、広く信じられているのは、科学のすべての分野においては、論理と実験の厳密な規則に従わなければならないのに対して、芸術的な仕事では、心と想像力の自発的な思いつきにしがたう、ということです。ですから、私たちの同時代人の多くは、真実と美とは何も共通したものを持っていない、と言うかも知れません。にもかかわらず、芸術的な創造の領域における偉大な指導者たちは、真の芸術とは、知や認識がそうであるのと同様に、人間存在の深い源泉の中から流れ出してくるべきものである、と絶えず感じてきたのです。

ひとつの例をあげてみましょう。もっとも、私たちは美と真実の両方を探求したゲーテに目を向けるだけなのですが、彼は若い頃、あらゆる可能な方法を用いて、世界についての知識を獲得し、存在の偉大な謎に対する答えを見出そうと苦闘しました。あこがれの理想を秘めた国に彼を導くことになるイタリア紀行の時代の前には、彼はワイマールの友人たちとともに、例えば、人生におけるすべての現象の中に統一的な実質を見出そうとした哲学者スピノザを研究することによって真実を追求する道を進んでいました。神の考えについてのスピノザの論文はゲーテに深い感銘を与えました。メルクやその他の友人たちとともに、彼はスピノザの中に、あらゆる周囲の現象を通して語る声のようなもの、存在の源泉をほのめかすような何か - 彼のファウスト的なあこがれをどうにかして癒すことができそうな考えを聞くことができる、と信じていました。けれども、ゲーテは、あまりに豊かな魂に恵まれていたために、概念的、分析的なスピノザの仕事から、真実と知識に関する満足のいく像を得ることはできませんでした。このことに関して彼が感じていたこと、彼の心が希求していたものが最もはっきりと現れるのは、彼が偉大な芸術作品に接し、その中に古代の芸術の名残をとらえた彼のイタリア旅行に私たちがついて行った、と仮定したときでしょう。彼はそれらの作品の前で、スピノザの考えから引き出そうとしてかなわなかった感情を経験したのです。こうして、彼はワイマールの友人たちに次のような手紙を送りました。「ひとつだけ確かなことがある。古代の芸術家達は、ホメロスその人と同じように、自然についての知識と、何が表現され得るのか、それはどのように表現されるべきなのか、についての確かな考えを有していたということだ。残念なことに、最高の段階にある芸術作品はあまりにも少ない。けれども、それらについてよく考えてみると、人が望むことができるのは、それらを正しく知り、そして、その前から静かに去る、ということだけだ。これらの卓越した芸術作品は自然の最も気高い産物として人間の手により、真の自然法則にしたがって創造されたものだ。あらゆる思いつきや単なる想像の産物は消え失せる。そこには必然があり、神があるのだ。」

ゲーテは、これらの最高の段階にある芸術作品が、それらを創造した偉大な作家たちによって、彼らの魂の中から、自然そのものが従うところの法則と同じ法則にしたがって取り出されたということを見極めることができた、と信じていました。このことが意味するのは、自然法則に関するゲーテの観点においては、鉱物、植物、そして動物界において作用しているものが、人間の魂の中で、新しい段階に引き上げられ、新しい力を付与される、そのため、それらがその魂の中で十全に表現されるようになる、ということに他なりません。ゲーテはこれらの芸術作品の中にも自然の法則が働いていると感じ、そのため、ワイマールの友人たちに、「あらゆる思いつきや単なる想像の産物は消え失せる。そこには必然があり、神がある

のだ。」と書き送ったのです。ゲーテは、そのような瞬間に、最高度に表現された芸術は知や認識と同じ源泉からやって来る、という考えに心がかきたてられるのですが、私たちは、彼が、「美とは、そうでなければ永遠に隠されたままに留まるであろう自然の秘密の法則が表現されたものである。」と断言するとき、そのことが真実であることを、彼がいかに深く感じていたかを知るのです。こうして、ゲーテが芸術の中に見るのは、認識に関するその他の分野における探求の中で見出されたものを、それ自身の言葉によって確かなものにするところの自然法則の顕現です。さて、ゲーテから離れ、ある使命をもって芸術を探求したひとりの個性、芸術を通して何か存在の源泉に関係があるものを人類にもたらした現代の人物に目を向けるならば - もし、リヒアルト・ワーグナーに目を向けるとすれば、私たちは、彼が芸術的な創作の本性と意義を自分で明らかにしようとした彼の著作の中に、真実と美の間の内的な関係について、多くの同様の示唆を見出します。例えば、ベートーベンの第九交響曲についての著作の中で、彼は、これらの音が何か別の世界から現れたようなもの - 何か単に理性的あるいは論理的な言葉で把握し得るものとは全く異なるものを含んでいる、と言います。芸術を通して顕現するこれらのものについて、確かに言えることが少なくともひとつあります。それは、それらが確信的な力を持って魂に働きかけるということ、それを前にしては、すべてのただ単に理性的あるいは論理的な思考は無力であるような確信、つまり、それらが真実であるという確信を私たちの感情に浸透させる、ということです。

ワーグナーは、交響曲という音楽に関する著作の中でも、混沌が秩序づけられ、調和がもたらされた太古の時代、つまり、そのような感情を反射するためのいかなる人間の心もまだ存在しなかった時代の創造行為へと赴く感情、それを現出させるための器官として、それらの楽器があるかのように、何かがそこから鳴り響いてくる、と言います。こうして、ワーグナーは、芸術の顕現の中に、知性によって獲得される知識と同等の立場に立つことができるような神秘的な真実を見たのです。

ここで何か別のことを付け加えることができるかも知れません。私たちが偉大な芸術作品を精神科学の意味で知るようになるとき、私たちは、それらが、それら自身、人間による真実の探求の顕現を私たちに伝えていると感じます。そして、精神科学者は、彼自身、このメッセージに内的に関連していると感じるのです。実際、彼が、自分は今日の人々があまりにも軽々しく受け入れるいわゆる精神の顕現ではなく、そのメッセージにより親密に関連していると感じる、と言ったとしても、それは誇張ではありません。

では、真に芸術的な個性がこの種の使命を芸術に帰属させ、一方、精神科学者がこれらの偉大な芸術の神秘的な顕現にあれほど強く心引かれるように感じる、というのは何故でしょうか？ 私たちは、この冬の連続講義を通して私たちの魂の前にやって来た多くのことがらを統合することによって、この疑問に対する答えに近づくこととなります。

もし、私たちが、この観点から、芸術の意義と働きを探求すべきであるならば、人間的な意見や知性の屁理屈をもってそうするべきではありません。私たちは、人間や世界の進化との関連で、芸術の発達を考察しなければなりません。芸術自体に、その人類にとっての意義を語らせるようにするのです。

もし、私たちが、芸術のはじまり、芸術が詩という外観をとって人間の間初めて現れたときにまで遡ろうとするのであれば、私たちは、通常考え方にしたがって、本当にはるかに遡らなければなりません。ここでは、ただ現存する文書が私たちを連れていくことができる程度の過去にまで遡ることにしましょう。私たちはしばしば伝説的な人物と見なされるホメロス、その仕事かふたつの偉大な叙事詩、イリアスとオデッセイによって私たちのもとに伝わっているギリシャ詩の創始者にまで遡ることにします。

これらふたつの詩の作者、あるいは作者たち - 何故なら、今日はこの問題に立ち入らないので - が誰であったにしても、特筆すべき点は、両方の詩が全く非個人的な調子で始まる、ということです。

おおミューズ、アキレスの怒りを歌え・・・

という言葉で、最初のホメロスの詩、イリアスは始まり、そして

おおミューズ、大いに旅する男の詩を歌え・・・

というのが、第二のホメロスの詩、オデッセイの始まりの言葉です。ですから、その作者は、彼の詩をより高次の力に負っている、ということを示そうとしているのです。そして、私たちが、彼にとって、この高次の力とは象徴的なものではなく、現実的で客観的な存在であった、ということに気づくためには、ほんの少しホメロスを理解しさえすればよいのです。もしこのミューズへの祈りが現代の読み手にとって何の意味もないとすれば、それは彼らが、ホメロスの詩のように非個人的な詩がそこに由来するところの経験を、もはや有していないからなのです。そして、もし、私たちが初期の西洋詩におけるこの非個人的な

要素を理解しようとするならば、私たちは次のように問わなければなりません。それ以前には何があったのか？それはどこから生じたのか？と。

私たちが人類の進化について語るとき、人間の魂の力は千年紀の間に変化した、ということは何度も強調してきました。遙かな過去の時代、外的な歴史は到達することができないけれども、精神科学的な探求には開かれている時代においては、人間の魂は夢のような原初の超感覚的能力を付与されていました。人間が後の時代にそうなったように、あまりに深く物質的な存在性の中に横たえられるようになる以前の時代には、彼らは彼らの周囲のいたるところで、精神の世界を現実のものとして感知していたのです。私たちはまた、太古の超感覚的能力は、今日、達成されることのできるような意識的で鍛錬された超感覚的能力とは異なっていた、ということ指摘しました。と申しますのも、後者は魂の生活における確固とした中心点、それによって人間が自分自身を自我として把握する中心点の存在と結びついているからです。私たちが現在有しているようなこの自我感情は、長い時間をかけて徐々に発達してきたもので、遙かな過去には存在していなかったのです。けれども、正にこのことのゆえに、つまり、人間がこの内的な中心点を有していなかったがゆえに、彼の精神的な感覚が開かれていたのであって、彼は、その夢のような、自我とは無縁の超感覚的な能力を持って、遙かな過去に彼の真の内的存在がそこから現れたところの精神的な世界を覗き見ていたのです。私たちの物理的な存在性の背後にある諸力の力強い像、夢のような像が彼の魂の前に現れました。この精神的な世界の中で、彼は、彼の神々とその間で演じられる行為やできごとを見ました。そして、今日的な研究は、国によって様々に異なる神々の物語が単によく知られた想像の産物であると推定する点において、全く間違っています。遙かな過去にも、人間の魂はちょうど今日と同じように機能していた、ただし、物語に登場する神々を含めて、今日よりも物事を想像する傾向が強かった、と考えるならば、それは全くの想像の産物であり、想像力が豊かなのはそのように信じる人たちの方です。太古の昔の人々にとっては、彼らの神話の中で記述されたできごとは現実だったのです。神話、英雄伝、そして童話や伝説でさえも人間の魂の中にあつた太古の能力から生まれました。このことは、人間が、今では自分自身の中で、自分自身を所有しながら生きることを可能にしているところのしっかりとした中心点をまだ獲得していなかった、という事実と関連しています。遙かな昔には、彼は、後にそうすることができるようになるようには、彼自身を彼の自我の中に、つまり彼の環境から切り離された彼の魂の狭い境界内に閉じこめることができませんでした。彼は、彼の環境の中に、自分がそれに属していると感じながら生きていたのですが、現代人は、それから独立している、と感じているのです。そして、ちょうど今日の人間が、彼の生命を支えるのに必要な物理的な力が彼の肉体的な組織に流れ込み、また流れ出す、ということを感じることができるようになるように、太古の人間は、彼の超感覚的な意識をもって、彼が偉大な世界の諸力との内的な交換の中で生きることができるようになるように、精神的な諸力が彼の中に流れ込み、そして流出している、ということに気づいていました。そして、彼は次のように言うことができました。「何か私の魂の中で起こるとき、私が考え、感じ、あるいは意志するとき、私は孤独な存在ではない。私は私の内的な視界に現れる存在たちからやって来る諸力に向かって開かれているのだ。彼らは彼らの力を私に送り込むことによって、私に考え、感じ、意志するように促す。」と。まだ精神世界の中に横たえられていたときの人間はこのような経験を有していました。彼は精神的な力が彼の思考の中で活動している、彼が何かを成し遂げるときには、神的 - 精神的な力が彼らの意志や目的を彼の中に注ぎ込んでいる、と感じていました。そのような太古の時代には、人間は、自分のことを、精神的な力がそれら自身を表現するための器であると感じていたのです。

ここで私たちは過去へと遙かに遡った時代を振り返っているのですが、この時代というのは、あらゆる種類の中間的な段階を経て、正にホメロスの時代まで続いていました。ホメロスがいかに人類の太古の意識に引き続き表現を与えていたかを見極めるのは難しいことではありません。イリアスの登場人物の何人かを眺めさえすればよいのです。ホメロスは、ギリシャとトロイの大いなる戦いを描くのですが、どのようにしてそれを描くのでしょうか？当時のギリシャ人にとって戦いとは何を意味していたのでしょうか？

ホメロスはその観点から話を始めるわけではありませんが、この戦いには、人間の自我に発する熱情や欲望、考えによって引き起こされるところの敵意以上のものがあつたのです。この戦闘の中でぶつかっていたのはトロイとギリシャの単に個人的あるいは部族的な感情なのでしょうか？そうではありません！太古の意識とホメロスの意識とのつながりをしめす伝説が告げるのは、ヘラ、アテナ、アフロディテの三女神がいかに美の競演において競り合っていたか、そして、いかに人間であるトロイの王子パリスが美の鑑

定家として、そのコンテストの判定をするように指名されていたか、ということです。パリスは世界中で一番美しい女を彼の妻にすると約束していたアフロディテに賞を与えました。その女とはスパルタ王メネラオスの妻、ヘレネでした。パリスはヘレネを獲得するため、力づくで奪い取らなければなりませんでした。この蹂躪への仕返しとして、ギリシャ人たちはその国がエーゲ海の遥か対岸にあるトロイ人たちに対して武装し、そこで戦闘が起こったのです。

何故、人間の熱情がこのようにして燃え上がったのでしょうか、そして、何故、ホメロスのミューズが語ったようなできごとすべてが起こったのでしょうか？それらは人間世界における単に物理的なできごとだったのでしょくか？違います。ギリシャ人たちの意識を通して、私たちは、人間たちの戦いの背後に、女神たちの敵意が描写されているのを見るのです。当時のギリシャ人は次のように言ったことでしょう。「私は、人々を激しく対立させるようにした原因を物理世界の中に見出すことはできない。神々とその力がお互いに対峙するより高次の領域を見上げなければならないのだ。」と。当時、このようなイメージの中で見られた神的な力が人間どうしの衝突の中に働いていました。こうして、私たちは、詩という芸術における最初の偉大な作品、ホメロスのイリアスが人類の太古の意識から生まれてくるのを見るのです。ホメロスにおいては、太古の人類に自然な形でやって来た超感覚的な光景の残響が、後に現れた意識の立場から、韻文の形で提示されているのが分かります。そして、超感覚的な意識がギリシャ人にとって終焉を迎え、ただその残響だけが残った最初の時代を探すとすれば、それは正にこのホメロスの時代だったのです。

太古の人間は次のように言ったことでしょう。「私の神々が戦っている、私の超感覚的な意識の前に横たわる精神世界で。」と。ホメロスの時代には、このように言うことは既に不可能でしたが、それについての生き生きとした記憶が保持されていたのです。そして、ちょうど太古の人間が、そこに自分の存在を有していた神的な世界から靈感を受けていると感じていたように、ホメロスの叙事詩の作者は、その同じ神的な力が彼の魂の中で支配していると感じていました。ですから、彼は次のように言うことができたのです。「私に靈感を受けるミューズが内的に語っている。」と。こうして、ホメロスの詩は、もし、それらが正しく理解されるならば、太古の神話と直接的な関係にあることが分かります。この観点から、私たちは、ホメロスの詩的な想像力の中に、古い超感覚的な能力に代わるような何かが生じているのを見出すことができます。支配する宇宙の力が、直接的な超感覚的視界を人間から引き上げ、その代わりに、魂の中に同様に生きることができ、それに形成的な力を受けることができるような何かを彼に与えたのです。詩的な想像力は失われた太古の超感覚的な能力の代償なのです。

さて、何か別のことを思い出してみましょう。良心についての講義の中で、私たちは古い超感覚的な能力の衰退が色々な国々で、様々な時代に、全く異なった仕方で行ったのを見ました。東方においては、古い超感覚的な能力は比較的後の時代まで持続しました。西方のヨーロッパの人々の間では、超感覚的な能力はそれほど広くは存在していませんでした。それらの人々の中では、強力な自我感情が前面に出てきていた一方、他の魂の力や能力はまだ比較的未発達だったのです。この自我感情は、ヨーロッパの異なる地域で非常に様々な仕方で行れました - 北と西では異なっていました、特に、南においては異なっていました。キリスト教以前の時代、それはシシリアとイタリアにおいてもっとも強力に発達しました。東方の人々が長い間自我感情を持たないままに留まっていたのに対し、ヨーロッパのこれらの地域には、古い超感覚的な能力が失われていたため、特別に強い自我感情を持った人々がいたのです。精神的な世界が人間から外的に失われるのに比例して、彼の内的な自我感情が点火するのです。

こうして、ある時期、アジアの人々の魂と、ここで考察しているヨーロッパの各地に住む魂との間には大いなる違いがある、ということにならざるを得ませんでした。彼方のアジアにおいては、いかに宇宙の秘儀が依然として偉大な夢の像として魂の前に生じるかが、そして、いかに神の行為が人間の精神的な目の前で展開するのを目撃することができるかが分かります。そして、私たちは、そのような人間が語ることができるものの中に、何か世界の根底に横たわる精神的な事実に関する古い説明のようなものを認めることができます。アジアにおいては、古い超感覚的な能力が、それに代わるもの、すなわち想像力に取って代わられたとき、これは特に視覚的な象徴を像の形で生じさせました。西方の人々の間では、特にイタリアやシシリアにおいては、それとは異なった能力、しっかり根付いた自我から生じてくる能力が、一種の力の過剰、すなわち、いかなる直接的、精神的な視界も伴わないけれども、見えないものに到達したいというあこがれによって浸透され、魂から発生する熱情を生じさせたのです。ですから、ここには、いかなる神の行為の説明も見出されません。何故なら、そのようなことはもはや明らかではなかったからです。

けれども、魂が、語りと歌の中に表現される熱烈な献身をもって、ただあこがれることができるだけの高みを希求するとき、古い超感覚的な意識が翳った後、今や見ることができなくなった力に向かう原始的な祈りと賛美歌が生まれました。

それらの中間に位置する国、ギリシャにおいて、これらふたつの世界が出会います。そこには両方の側から刺激を受けた人々が見出されます。東方からは像のような視界が、西方からは見ることはできない神祕的 - 精神的な力に捧げる献身的な賛美歌に靈感を与えるところの熱情がやって来ます。そのふたつの流れがギリシャ文化の中で混ざり合ったことによって、紀元前八世紀から九世紀と考えられるホメロスの詩から、三、四百年後のアイスキュロスの仕事へと継続する流れが可能になったのです。

確かにアイスキュロスは十全なる東方の洞察力に向かって、つまり、神の行為とその人間への影響に関する古い超感覚的な視界の残響としてホメロスの中に見出されるような確信させる力に向かって開かれた人物として私たちの前に現れるわけではありません。この残響はいつでも非常に弱いものでしたが、アイスキュロスの中では、それはあまりにも弱かったので、彼は太古の超感覚的な視覚が人間にもたらしていた神々の世界に関する像のような視界に対する一種の不信を感じるようになっていたのです。ホメロスに関しては、かつて人間の意識が、物理世界における人間の熱情や感情の相互作用の背後に立つ神祕的 - 精神的な力についての視界を有していた、ということを知っていたのが分かります。したがって、ホメロスは単に人間の間の衝突を記述するものではありません。ゼウスとアポロの干渉に人間の熱情が巻き込まれ、そして、その影響はできごとの推移の中で明らかになります。それらの神々とは詩人が彼の詩の中に持ち込むところの現実なのです。

アイスキュロスに関しては、何と異なっていることでしょうか。人間の自我を特に強調し、人間の魂を内的に分離するような西方からの影響の流れが、彼に絶大な影響力を及ぼしていたのです。彼が自我から行動を起こし、神祕的な力の流入からその意識を開放し始めた人間を描写した初めての劇作家になったのはこの理由によります。アイスキュロスにおいては、ホメロスの中に見られる神々の代わりに、たとえ初期の段階に立っていたとはいえ、行動において独立した人間が登場します。劇作家として、アイスキュロスはこの種の人間を物事を中心に据えます。叙事詩は東方からやって来る像的な想像力の影響下に現れなければなりませんでした。個人的な自我を強調する西方の影響は行動する人間が中心となる劇を生じさせたのです。

例えば、オレステスを取り上げてみましょう。彼は母殺しの罪を犯し、その結果として復讐の女神を見ます。そうです、これはまだホメロスです。ものごとはそれほど簡単には過ぎ去りません。アイスキュロスは、かつて神々が像の姿で見た、ということはまだ知っているのですが、まさにその信念を捨て去ろうとするところに来ているのです。特徴的なのは、ホメロスにおいては十分にその力を発揮したアポロが、オレステスを扇動して彼の母を殺させるにもかかわらず、その後ではもはや彼の側に立つ権利を有していない、ということです。人間の自我がオレステスの中で身じろぎを始め、それが支配的になる様子が私たちに示されます。アポロに不利な裁決が下され、彼は拒絶されます。そして、私たちは、オレステスに対する彼の力の行使がもはや完全ではないのを見るのです。ですから、アイスキュロスはプロメテウスを、つまり、神々の圧倒的な力にタイタンのように立ち向かい、神々からの人間の解放を象徴する神祕的な英雄を劇化するための正当で適切な詩人であったのです。

こうして、私たちは、東方の像的な想像力を有するアイスキュロスの魂に、いかに西方からやって来る自我感情の目覚めが混ざり合っているかを、そして、いかに劇がこの統合から生まれたかを見るのです。そして、完全に精神科学的な探求によって見出されたものを、伝統が素晴らしい仕方で確認するのを見るのは本当に興味深いことです。

ひとつの注目すべき伝統が、部分的とはいえ、アイスキュロスからある秘儀の秘密を暴露した罪を免じます。ただし、彼は、そのようなことはできるはずがなかった、と応えるでしょう。何故なら、彼はエレウシスの秘儀に通じてはいなかったのですから。確かに、彼には、ホメロスの詩がそこに起源を有するところのテンプルの秘密から発するいかなるものをも示すつもりは全くなかったのです。事実、彼はその秘儀から少し離れた位置に立っていました。他方、彼がシシリアのシラクサで人間の自我の出現に関する秘儀の知識を得ていた、という物語が伝えられています。オルフェウスの信者たちが、もはや見ることができず、ただあこがれることができるだけの神祕的 - 精神的な世界に向けた古い形態の叙情詩、賛美歌を培っていた地域においては、この自我の出現は特別な形態を取っていました。芸術が一步前進したのは、この

ようにしてでした。私たちは、それが太古の真実から自然に現れ、人間の自我へと続く道を見出すのを見ます。人間が、主として外的世界に生きた後、彼自身の内的な生活を自分のものとしていたことから、ホメロスの詩で姿を取ったものたちがアイスキュロスの劇中の人格となり、叙事詩と並んで劇が現れたのです。

こうして、私たちは、古代の真実が芸術という別の形態を取って生き続けるのを、そして、太古の超感覚的な能力により達成されたものが詩的な想像力によって再構成されるのを見ます。そして、芸術によって太古の時代から保存されたものであれば何であれ、人間の個性に、つまり、自分自身に気づくようになった自我に適用されたのです。

さて、私たちは、13、14世紀のキリスト教の時代まで、年代をずっと下ることにしましょう。ここで私たちは、自我がそれ自身の努力で神的 - 精神的な世界へと上昇するとき、それが到達することができる領域へと非常に印象的な仕方で私たちを導く中世の偉大な人物に出会います。私たちはダンテに至ります。その「神曲」(1472年)はゲーテによって読まれ、再度読まれました。彼に対するその影響は非常に大きく、知り合いがその新しい翻訳を彼に送ったとき、彼は詩の形でその送り主に感謝の気持ちを表しました。

大いなる感謝は

もう一度この本を新たに
して私たちにもたらず彼に
栄光に満ちた仕方でその本が沈黙させるのは
私たちのすべての探索や不満だ

芸術はどのようにアイスキュロスからダンテへと発展したのでしょうか？ダンテはどのようにして私たちをその三つの世界、地獄、煉獄、天国 - 私たちの物理的な存在性の背後に横たわる世界 - へと導くのでしょうか？

ここで私たちが見ることができるのは、いかに人間の進化を指導する基本的、精神的な衝動がそれと同じ方向で働き続けてきたかです。全く明らかなことは、アイスキュロスがまだ精神的な力との関係を保っていた、ということです。プロメテウスはゼウス、ヘルメス、等々の神々と直面しますが、このことはまたアガメムノンにも当てはまります。私たちは、これらすべての中に、太古の超感覚的な能力の残響を認めることができます。ダンテに関してはかなり異なっています。彼が私たちに示すのは、ただ彼自身を彼自身の魂の中に沈め、そこに眠る力を発達させるとともに、この発達のためにあらゆる障害を克服することを通して、彼が言うように、人生半ばで - この意味は35才のとき、ということなのですが - 、いかに精神的な世界をのぞき見ることができたか、ということです。古い超感覚的な能力を付与されていた人間たちは彼らの眼差しを彼らの精神的な環境に向け、アイスキュロスはまだ古い神性を考慮していたのに対し、ダンテの中には、自分自身の魂の中に降り立ち、その個性とその内的な秘密の内に完全に留まる詩人が見られます。彼は、この個人的な発達を追求することによって精神的な世界に入り、そして、そのことによって、「神曲」の中に見出される力強い像の中でそれを示すことができるようになります。ここで、ダンテの魂は、彼の個性とともにあって全く孤独であり、外的な顕現には無関心です。ダンテが伝統の中から、古い超感覚的な能力の成果を引き継ぐことができた、などとは誰も想像できないでしょう。ダンテが頼りにするのは、その唯一の手助けとしての人間個性の力強さによって、中世において可能となった内的な発達です。そして、彼は、私たちの前に、目に見える像として、ここでしばしば強調されること - 人間は彼の超感覚的な視界を曇らせ、あるいは暗くするところのあらゆるものにうち勝たなければならない、ということを示すのです。ギリシャ人たちが、まだ精神世界の中に現実を見ていたのに対し、ダンテはそこに、像を - 克服されるべき魂的な力の像のみを見ます。高次の発達段階から自我を引き下ろそうとする感覚魂、悟性魂、そして意識魂のあの低次の力とはそのようなものです。その反対の善なる力とは、既にプラトンによって示された、意識魂にとっての叡知、悟性魂にとっての自立的な勇氣、感覚魂にとっての中庸です。自我が、これらの善なる力を獲得する発達を通して前進するとき、それは精神世界へと通じるより高次の魂の経験へと近づきます。しかし、まず、障害が克服されなければなりません。

中庸は放縦と貪欲に対抗して働きます。そして、ダンテは、いかにこの感覚魂の影の面に立ち向かうかを、そして、それにいかにうち勝つかを示します。彼はそれを雌狼として記述します。次に、いかに悟性魂の影の面、ライオンとして記述されるところの非常識な攻撃性が、それに対応する徳、自立的な勇氣によって克服されるかが示されます。最後に、私たちは、叡知、すなわち意識魂の徳へとやって来ます。高

みへと努力することなく、単なる抜け目なさやずるがしこさとして世界に適用される叡知はおおやまねことして描写されます。「おおやまねこの目」とは精神世界をのぞき見ることができるといえるような叡知の目ではなく、単に感覚の世界だけに焦点を合わせる目です。ダンテは、いかに彼が内的な発展を妨害する力から身を守るかを示し、そしてその後で、いかに物理的な存在性の背後に横たわる世界に上昇するかを記述します。

私たちは、ダンテの中に、自分自身を頼りとして、自分自身の中を探求し、自分自身の中から精神世界へと導く力を引き出す人間を見ます。彼において、詩は、人間の魂をしっかりと把握し、人間の自我とより密接な関係を持つようになります。ホメロスは、その本性が、実際、彼自身が感じていたように、神的・精神的な力の行為へと織り込まれていたために、「ミューズよ、私が語るべき物語を歌え。」と言います。彼の魂とともにある孤独なダンテは、彼自身の内から、彼を精神世界へと導くであろう力を引き出して来なければならない、ということを知っています。私たちは、いかに想像力を外的な影響に依存させることがますます不可能になるか、を見ることができます。この点で、私たちは単なる意見に関わっているのではなく、人間の魂に深く根ざした力に関わっているのだ、ということがちょっとした事実によって示されるでしょう。ゴットリーブ・フリードリヒ・クロプストクは信心深い人間であり、そして、ホメロスさえも凌ぐ奥深い精神でした。彼が望んだのは、ホメロスが古代のために為したことを現代のために行うという意識的な意図を持って、聖なる叙事詩を書く、ということでした。彼はホメロスのやり方を生き返らせようとしたのですが、彼自身を欺くことなくそうしようとはしました。そのため、彼は「私のために歌え、おおミューズ、」と言うことができず、その代わりに、彼の「メシア」を、「歌え、不死の魂よ、罪深き人間の救済を。」という言葉で始めなければなりません。こうして、私たちは、いかに人間たちの間で芸術的な創造における発達が実際に起こったかを見るのです。

さて、ダンテから別の偉大な詩人、シェークスピアにまでさらに数世紀、大きく時代を下りましょう。ここでもまた、私たちは、進歩という意味で、顕著な一歩が踏み出されるのを見ます。私たちはシェークスピアを批評しようというのでも、ある詩人を別の詩人の上に置こうというのでもなく、ただ、必要で合法的な前進を指し示す事実に関わろうとしているのです。

ダンテに関しては、何が私たちに特別な印象を与えたのでしょうか？彼はそこに、精神世界についての彼自身の顕現とともに一人で立ち、そして、彼自身の魂の中から彼のところにやって来た偉大な経験について記述します。皆さんは、もし、彼が彼の見たものを、五、六種類以上の異なる方法で記述していたとしても、彼がそのように見たところの真実にあれほど影響力のある印象を与えていただろう、と想像できますか？ダンテが彼自身をそこに置いた世界とは、一度だけしか記述できないようなものである、とは感じませんか？実際、ダンテはそうにしました。彼が記述する世界は、ある男が自分にとっての精神世界であるところのものとして一体であると自分自身で感じた瞬間におけるその男の世界なのです。私たちはここで次のように言わなければなりません。ダンテは彼自身を、人間的な個性の要素の中に、それが彼自身のものであるに留まるような仕方です沈めた、と。そして、彼はこの人間的・個性的な側面をあらゆる方向から考察することに取りかかるのです。

一方、シェークスピアはあらゆる可能な個性、リア、ハムレット、デズデモーナを豊富に創造するのですが、精神的な目が純粋に人間的な性質や衝動とともに物理的な世界にある彼らを見るとき、それはこれらの個性の背後に、いかなる神的なものも直接的に感知することはありません。彼らの魂から思考、感情そして意志の形で直接やって来るものだけを私たちは期待します。彼らはすべて際だった個性たちですが、彼らの中に、ダンテは、自分自身を自分自身の個性の中に沈めるとき、いつでもダンテである、というのと同じ仕方で、シェークスピア自身を認めることができるのでしょうか？いいえ - シェークスピアはさらに一歩先に進んだのです。彼は個人的な要素の中へとさらに突き進むのですが、ある個性の中ばかりではなく、もっと様々な個性の中へと突き進むのです。シェークスピアは、リア、ハムレットやその他の人物を記述するときにはいつでも、彼自身を否定します。彼は彼自身の考えを提示しようなどという気には決してなりません。何故なら、シェークスピアとしての彼は完全に消し去られているからです。彼は、完全に、彼が創造する様々な個性の中に生きています。ダンテによって記述される経験は一人の人間の経験です。シェークスピアが私たちに示すのは、きわめて多様な個性の中の内的な自我から生じてくる衝動です。ダンテの出発点は人間的な個性でした。彼はその中に留まり、そこから精神世界を探求します。シェークスピアは一歩先に進みます。彼もまた彼自身の個性から出発し、彼が描く個性たちの中に入り込むのです。

が、彼は彼らの中に完全に沈潜するのです。彼が劇化するのは彼自身の魂的な生活ではなく、彼が舞台の上で提示するところの外的な世界における登場人物たちの生活であり、彼らはすべて、彼ら自身の動機と目的を持ち、独立した人物として描かれます。

こうして、私たちは、ここで再び、芸術がどのように進化するかを見ることとなります。芸術は人間の意識が自我感情に欠けていた遙かな過去に始まり、ダンテによって、自我そのものがひとつの世界になるように、個人的な人間を包含する段階に到達しました。その世界は、シェークスピアによって、別の自我たちが詩人の世界になるまでに広がりました。この段階が可能になるために、芸術は、そこからそれが湧き出してきたところの精神の高みを後にして、物理的な存在が活動する場所にまで下降しなければなりません。そして、このことは正に、ダンテからシェークスピアへと移行するときには生じるのが見られるところのものです。この観点から、ダンテとシェークスピアを比べてみましょう。

皮相的な批評家はダンテを説教ぶった詩人であると非難するかも知れませんが、ダンテを理解することができ、彼の作品全体とその豊かさに応えることができる人は誰でも、彼の偉大さは正に中世の叡知と哲学のすべてが彼の魂から語っているという事実に起因している、と感じるでしょう。中世の叡知の全体が、ダンテの詩の力を付与されたそのような魂の発達にとって、必要な基礎だったのです。その影響は、最初、ダンテの魂に作用していたのですが、その後、彼の個性が世界へと拡張する中で再び明らかとなりました。中世における精神生活の高みを知ることなく、ダンテの詩作を正しく理解し、評価することはできません。私たちは、それを知るときにだけ、彼が達成したことの深みと巧みを評価できるようになるのです。確かに、ダンテは一段下降しました。彼は精神的なものをより低いレベルに落とそうとしたのですが、彼は、彼の先駆者の何人かが用いたラテン語ではなく、自国語で書くことによってそうしたのです。彼は精神生活の最も遙かな高みへと上昇するとともに、彼が生きた場所や時代の言葉と同じだけ深く物理世界の中へと下降します。

シェークスピアはさらに下降します。彼の詩における偉大な登場人物たちの起源は、今日では、あらゆる種類の想像力溢れる思いつきによって取りざたされていますが、もし、詩が日常生活の世界へと - 今でも、高みに位置するものによって、しばしば見下されるような世界ですが - このように下降したことを理解するとすれば、私たちは次のような事実を心に留めておかなければなりません。

私たちは、シェークスピアを除いては、今日ではあまり高く評価されることのなさそうな俳優たちによって劇が制作されていたところの、当時のロンドン郊外にあった小さな劇場を思い浮かべなければなりません。どのような人たちがこの劇場に行ったのでしょうか？ 下層階級の人たちです。当時は、飲んだり食べたり、気に入らなければ卵の殻を投げつけたり、舞台にまでなだれ込んで、俳優たちが観衆のただ中で演技しなければならなかったような劇場に行くより、鬪鶏やそれに似た見せ物にお金を出す方がファッションブルだったのです。ですから、これらの劇は、多くの人が好んで想像するように、文化生活における上流階級の間で最初から喝采を浴びていたのではなく、最初は、ロンドンのきわめて下層の大衆の面前で上演されていたのです。せいぜい、変装してどこか人目に付かないたまり場に出かけるような独身息子たちが、たまにこの劇場に行ったかも知れませんが、それは尊敬すべき人々にとっては大いに不適當なことだったのです。このことから、私たちは、詩がもっとも品性のない領域にまで下ったのを見ることができます。

シェークスピアの劇とその登場人物の背後に立っていた才能にとって、人間的なもので疎遠なものなど何もありませんでした。ですから、そこで起こったできごととは - 外的側面から詳細に見ても、高地において、細い川として流れていた芸術が、通常の間性の世界にまで下り、日常生活のただ中を流れる大きな川にまで広がった、ということです。そして、このことをより深く洞察する人であれば誰でも、シェークスピア劇に登場するような大いに個性的な性格の生き生きとした人物たちが現れるためには、気高く精神的な流れが、いかにより低いレベルにまで引き下げられる必要があったか、ということを理解するでしょう。

さて、私たちは私たち自身の時代にもっと近づくことにしましょう - ゲーテにです。彼を彼が創作したものに - 彼が彼の主著に取り組んでいた六〇年間にわたって、彼の理想や努力、そしてあきらめのすべてをその中に体現させたファウストという人物に関連づけてみましょう。世界の謎に対するより深い答えを求めて、認識の階梯を登りながら、彼の豊かな人生を通して、その最奥の魂において彼が経験したことのすべて - このすべてが、私たちが今日出会うようなファウストという人物の中に凝縮されているのです。

ゲーテの詩劇という文脈の中で、ファウストとはいかなる人物なのでしょう？

ダンテについては、私たちは彼が記述するものを彼自身が見たものの成果として思い描くことができる、と言うことができます。ゲーテはそのようなものは何も見ませんでした。彼は、ダンテがその「神曲」についてそうするように、とりわけ厳粛な瞬間に特別な顕現があった、と主張したりはしません。ゲーテは彼が提示するところのものに内的に働きかけていた、ということが「ファウスト」のいたるところで示されます。そして、ダンテの元にやって来た経験が彼自身の一方的なやり方でのみ記述され得たのに対して、ゲーテの経験は、それらがより個人的なものではないと言えないにしても、ファウストの客観的な性格へと移し替えられたのです。ダンテは私たちに、彼のもっとも親密で個人的な経験を提示します。ゲーテもまた個人的な経験を有していたのですが、ファウストの行為や苦しみはゲーテがその人生において経験したものと異なります。それらは、ゲーテが彼自身の魂の中で経験したことを自由に、そして詩的に変容させたものなのです。ダンテが彼の「神曲」と同一視され得るのに対して、ゲーテをファウストと同一視するためには、ほとんど文学史家を連れてこなければなりません。ファウストは一人の個性ですが、シェークスピアが創作した個性たちと同じくらい多くのファウストに似た人物たちを創作し得たであろうと想像することは不可能です。ゲーテが彼の「ファウスト」の中で描き出した個性は、たった一度だけ創造され得るものなのです。シェークスピアはハムレットの他にもリアやオセロ等々を創造しています。確かに、ゲーテは「タッソー」や「イフゲーニア」も書きましたが、彼らとファウストとの差は明白です。ファウストはゲーテではなく、基本的に誰でもあるのです。彼はゲーテのもっとも深いあこがれを体現しているのですが、詩に登場する人物としては完全にゲーテ個人からは引き離されています。ダンテは一人の男、つまり、彼自身が見たところのものを私たちの前に提示します。ファウストという個性は、ある意味で、私たちひとりひとりの中に住んでいるのです。このことは、詩がゲーテに至るまでに、はるかに進歩したことを示しています。

シェークスピアが創造し得た人物たちは非常に個性的だったために、彼は彼自身を彼らの中に沈め、彼らの一人一人に際だった声で喋らせることができました。ゲーテはファウストという個性的な人物を創り出すのですが、ファウストは一人の個人ではなく、誰でもあるのです。シェークスピアは、リア、オセロ、ハムレット、コルデリア等々の魂的本性の中に入っていました。ゲーテはすべての人間の中にあるもっとも気高い人間的要素の中に入っていました。このことによって、彼はすべての人間に適った代表的な個性を創造したのです。そして、この個性は、彼自身を詩人としてのゲーテ個人から引き離し、外的世界の中で、現実的、客観的な人物として私たちの前に立つのです。

私たちが概観してきた道に沿った芸術のさらなる進歩とはそのようなものです。より高次の世界の直接的、精神的な知覚から出発して、芸術はますます大きく人間の内的生活を捉えます。それがもっとも親密に生じるのは、ダンテの場合のように、人間が自分自身だけに關わる時です。シェークスピアの劇においては、自我はこの内密性から歩み出て、他の魂の中に入っていきます。ゲーテの場合には、歩み出た自我はそれ自身をファウストに代表されるすべての人間の魂的生活に沈めます。そして、自我は、それ自身の魂的な力を発達させ、自らを別の精神性へと沈潜させることができさえすれば、それ自身から出て、別の魂を理解することができるのですが、そのようにして、ゲーテが、単に外的世界における物理的な行為や経験だけでなく、精神世界へとその自我を開きさえすれば、誰でも経験することができる精神的なできごとをも記述するように導かれたのは、芸術的な創造活動の絶えざる進歩と符合しています。

詩は精神世界からやって来て、人間の自我の中に入りました。それは、ダンテにおいて、自我をその内的生活のもっとも深いレベルで捉えました。ゲーテにおいては、私たちは自我が再びそれ自身から歩み出て、精神世界への道を見出すのを見ます。太古の人類が有していた精神的な経験は「イリアス」と「オデッセイ」の中に反映されます。そして、ゲーテの「ファウスト」において再び現れた精神世界が人間の前に立ちます。私たちは、このようにして、「ファウスト」の偉大な終幕に、つまり、人間が深みへと下った後、彼の内的な力を発達させることによって、精神世界が再び彼の前に広がるように、その上昇への道を苦労して進むという終幕に相対するべきなのです。それは主旋律の合唱のようですが、どこまでも前進する形態を持ち、どこまでも新しいものなのです。精神的な視界に代わって人間に付与され、人間の天才達による滅ぶべき創造行為の中に形態を与えられた想像力が不朽の精神世界から響きわたります。不朽であるものから、ホメロスやアイスキュロスによって詩の中で創造された滅ぶべき登場人物たちが生まれました。詩は滅ぶべきものから不朽のものへと再び上昇し、私たちは「ファウスト」の最後の部分で歌われる

神秘的な合唱を聞きます。

移ろいゆくものはすべて比喩にすぎない・・・

そして、ゲーテが私たちに示すように、人間の精神の力もまた物理的な世界から精神的な世界へと再び上昇するのです。

私たちは芸術的な意識が、代表的な詩人たちの中で、世界を大股で進んで行くのを見てきました。芸術はその根元的な認識の源泉である精神世界から現れます。精神的な視界は、感覚世界がますます広く注目を集め、それによって自我の発達を促すにつれてますます退きます。人間の意識は、世界進化の経過を追って、精神世界から自我と感覚の世界へと旅しなければなりません。もし、人間が外的な科学の目を通してのみ感覚の世界を探求するとすれば、彼はそれを科学的な言葉で、単に知性的に理解するようになるだけです。けれども、人間は、超感覚的な能力が消え去ったとき、その代わりとして、彼にはもはや知覚することができないものの一種の影のような反映を彼のために創り出す想像力を与えられました。想像力は人間と同じ道、すなわちダンテの場合のように、最終的に彼の自意識へと入っていく道にしたがわなければなりません。けれども、人類を精神世界に結びつける糸は、芸術が下降して人間の自我の中に閉じこめられるときでさえ、断ち切られることはありません。人間は想像力を携えて彼の道を行くのです。そして、「ファウスト」の出現によって、私たちは精神世界が想像力から新しく創造されるのを見るのです。

こうして、ゲーテの「ファウスト」は、芸術がそこに起源を有するところの精神的な世界に、人間が再び入って行くべき時代の始まりに位置しているのです。ですから、芸術の使命とは、高次の訓練によって精神的な世界に至ることができない人々のために、はるかな過去の精神性と未来の精神性とを結びつけるべき糸を紡ぐ、ということなのです。実際、芸術は既に、「ファウスト」の第二部において見られるように、精神的世界についての視界を想像力の中で与えることができるまでに前進しています。人間は、彼が精神的な世界に再び入り、その意識的な認識を獲得することができるようにする力を発達させることを学ばなければならない地点に立っている、ということについての示唆がここにあります。芸術は、想像力の助けを借りて、人間を精神的な世界へと導いただけでなく、十全なる自我意識に基づき、精神世界についての明晰な視界を持つということを前提とする精神科学への道を準備したのです。精神科学の仕事とは、芸術の領域から引いてきた例の中で見てきたように、あの世界 - 人間があこがれるあの世界への道を指し示すということであり、それはこの冬の連続講義の仕事でもあったのです。

こうして、私たちは、いかに偉大な芸術家たちが、精神世界の反映こそ彼らが人類に提供すべきものであると感じてきた点において正当化され得るかを見ます。そして、精神世界の直接的な顕現がもはや可能ではない時代において、これらの顕現を仲介する、というのが芸術の使命なのです。ですから、ゲーテは、昔の芸術家たちの作品について、「そこには必然があり、神がある。」とすることができたのです。それらは、そうでなければ決して見出されることはなかったであろう隠された自然の法則に光を当てます。そして、リヒアルト・ワーグナーもまた、第九交響曲という音楽の中に、別の世界 - 主として知的な意識には決して到達できないような世界の顕現が聞こえる、とすることができました。偉大な芸術家たちは、彼らが、過去から現在、そして、未来に向けて、あらゆる人間の源泉であるところの精神を担っている、と感じてきました。ですから、私たちは、深い理解を持って、彼自身、芸術家であると感じていた一人の詩人（シラー）によって話された、「人間の尊厳は、あなたの手に渡された。」という言葉に同意することができるのです。

私たちは、このようにして、人間進化の過程における芸術の本性と使命について記述し、芸術が、今日、人々が軽々しく想像するほどには、真実についての人間の感覚からかけ離れているわけではない、ということを示そうと試みてきました。逆に、ゲーテが真実についての考えと美についての考えを別の考えとして話すことを拒否したとき、彼は正しくそうしたのであり、彼の言葉を借りれば、神的 - 精神的なものの必然的な働きという「ひとつの」考えがあり、真実と美とはそのふたつの顕現なのです。

詩人やその他の芸術家の間ではどこでも、人間存在の精神的な基礎は芸術においてその言辞を見出す、という考えに対する同意が見出されます。あるいは、彼らの中には、芸術は、彼らの作品が精神世界からのメッセージを人類にもたらすであろうと信じることを可能にする、と皆さんに言うことができるような深い感情を有する芸術家たちがいます。ですから、芸術家が、その表現において、もっとも個人的であるときでさえ、彼らは、彼らの芸術が普遍的な人間のレベルにまで上昇させられ、そして、彼らの芸術の性格と顕現が、次のようなゲーテの神秘的な合唱によって語られる言葉を効果的なものにするとき、彼らは

真の意味で人類のために語っているのだ、と感ずるので。

移ろいゆくものはすべて比喩にすぎない・・・

そして、私たちは、私たちの精神科学的な考察の力の上に、次のような言葉を付け加えることができるかも知れません。芸術は、一時的で滅ぶべきものに、永遠で不朽なるものの光を吹き込むために必要なのだ。それが芸術の使命なのだ、と。